

第十表

手旗通信常用略符號	
意	略符號
今少シク高ク或ハ遠ク位置ヲ占メヨ	タ
今少シク低ク或ハ近ク位置ヲ占メヨ	ク
右ニ位置ヲ移セ	ミ
左ニ位置ヲ移セ	ヒ
其位置ニ止レ	ト
宜シ	ヨ
待テ	マ
筆記セヨ	カ

第十一表

臨時定ムル略符號ノ一例	
意	略符號
第一大隊	一
第二中隊	二
攻撃前進	コ
突撃スベシ	ト
突撃セントス	ケ
敵ノ警戒線	キ
敵ノ機關銃巢	ソ
敵ノ側防砲兵	マ
松田總領	セ
敵ノ歩兵先頭	エ
敵ヲ側背ヨリ攻撃スベシ	

備考
 一、本例ハ單ニ一例ニ過ギズ要ハ適時其狀況ニ適合スル略符號ヲ臨時ニ規定シ巧ニ之ヲ使用スルニ在リ
 二、略符號ハ必ずシモ一字ニ限定スルヲ要セズ又片假名以外ノモノ例ヘバ歩兵射撃教範ノ命中點標示記號等ヲ應用シ得ルモノトス

第十一表

字 號 表

文字	符 號	文字	符 號	文字	符 號	文字	符 號
イ	—	カ	—	オ	—	メ	—
ロ	—	ヨ	—	ク	—	ミ	—
ハ	—	タ	—	ヤ	—	シ	—
ニ	—	レ	—	マ	—	エ	—
ホ	—	ソ	—	ケ	—	ヒ	—
ヘ	—	ツ	—	フ	—	モ	—
ト	—	ネ	—	コ	—	セ	—
チ	—	ナ	—	エ	—	ス	—
リ	—	ラ	—	テ	—	ン	—
ヌ	—	ム	—	ア	—	ゝ	—
ル	—	ウ	—	サ	—	〇	—
ヲ	—	キ	—	キ	—		
ワ	—	ノ	—	ユ	—		

第十二表

數字	符 號	略 符 號	備 考
一	—	—	丁 ス ル ト ヲ 得 數字 略 符 號 ハ 他 ノ 符 號 ト 混 同 使用 ス ル
二	—	—	
三	—	—	
四	—	—	
五	—	—	
六	—	—	
七	—	—	
八	—	—	
九	—	—	
〇	—	—	

記 號	符 號
長 音	—
區 分 點	、 —
段 落	└ —
括 弧	（ —

第十二表

三、通信所ノ人員ハ通常二名トシ、一名ハ信紙ヲ爲シ一名ハ通信文ノ讀方又ハ筆記ニ任ズル者ニシテ双眼鏡ヲ用フル場合ニハ更ニ一名ヲ増加ス、中繼通信所ニ在リテハ人員ヲ倍數ニ増加スルヲ可トス。
通信所ニハ通信用旗及筆記ニ要スル器具爲シ得レバ双眼鏡ヲモ備附クルモノトス。
四、通信所ノ移動或ハ撤去ニ際シテハ對向通信所ニ通報シ其返信ヲ待チテ實施スルコト必要ナリ。又通信者ハ絶エズ對向通信所ヲ注視シ連絡ヲ確實ニスルヲ要ス。

第九章 距離測量

第一節 要 則

第一、距離測量教育ノ目的ハ生徒ノ推理判斷力ヲ養ヒ統覺作用ヲ練磨シ以テ興味ノ中ニ實生活上必要ナル測量法ヲ會得セシムルニ在リ。
第二、射擊効力發揚ノ基礎ハ實ニ迅速正確ナル距離ノ測定ニ在リ、故ニ距離測量ノ演練ヲ重ネ之ニ熟達スルコト緊要ナリ。
第三、距離測量法ノ種類
歩測、目測、音響測量、器械測量ノ外地圖ニ依ル等種々ノ方法アリ。

距離測量

第二節 步 測

一、步測トハ步數ニ依リ距離ヲ測量スル方法ニシテ通常複歩（連續セル二歩ヲ謂フ）ヲ用ヒ短距離ニ於テハ單歩ヲ用フ。

二、複歩ヲ以テ距離ヲ測量スルニハ通常基準複歩數ヲ以テスルヲ可トス、之ガ爲自然ノ歩法ヲ以テ平坦地ニ於テ百米ノ長サヲ數回歩測シ、其平均複歩數ヲ定メ置クヲ要ス。

三、步測實施ノ要領ハ先ツ測量セント欲スル起點ヨリ歩行シ始メ各自ノ基準複歩數ニ依リ百米ニ達セバ一指ヲ屈シ更ニ一複歩ヨリ始メ逐次之ヲ復行シテ終點ニ達シ屈指數ニ依リ距離ヲ知ルモノトス。實際最後二十米ニ充タザル複歩數ハ比例式ニ依リ又百米ヲ七十複歩ヲ以テ踏ム場合ハ七複歩（十米）毎ニ他手ノ指ヲ屈シテ百米以下ノ距離ヲ知り十米以内ハ單歩ヲ以テ步測スルヲ便トス。

第三節 目 測

一、目測ハ何レノ場所ニ於テモ常ニ簡單迅速ニ測量シ得ルモ步測、器械測量等ニ比シ正確時期シ難シ。

二、目測ハ地上ノ長サト目標ノ見エ方トニ依リテ距離ヲ判知スルモノニシテ、概ネ左ノ方法ニ依ル。

1、數回ノ練習ニ依リ記憶シタル地上ノ距離或ハ目前ノ某既知距離ヲ以テ測量スベキ距離ニ比較シテ測定スルカ或ハ測量スベキ距離ノ中央ニ一點ヲ定メ此點ニ至ル距離ヲ目測シ之ヲ二倍シテ測定距離トナス。

2、一定ノ距離ニアル目標ノ明暗、大小ヲ記憶シ以テ測量スベキ距離ニ在ル目標ニ之ヲ比較シテ距離ヲ判知ス。

三、前項1ノ方法ハ中間ノ土地ヲ通視シ得ル時ニアラザレバ適用シ得ザルモ比較的正確ニ測定シ得ベク之ニ反シ2ノ方法ハ何レノ場合ニモ適用シ得ベシト雖、其結果稍々不正確ナルヲ免ガレズ、蓋シ同一ノ距離ニ在ル同一ノ物體モ諸種ノ原因ニ因リ見エ方ヲ異ニスレバナリ、故ニ前項ノ諸法ヲ巧ニ應用スルトキハ迅速且正確ニ距離ヲ判知シ得ベシ。雙眼鏡ヲ使用スルトキハ目標ニ至ル間ノ地形ノ觀察ヲ容易ナラシメ得ルヲ以テ目測ノ補助トシテ大ナル利益アルモノトス。

四、同一目標ニ對シテモ土地ノ形狀、目標ノ位置、天候、氣象、時刻其他種々ノ原因ハ目測ニ誤差ヲ生セシムルモノニシテ其場合概ネ左ノ如シ。

近ク誤リ易キ場合

イ、天候晴朗ナルトキ

遠ク誤リ易キ場合

一、目標ノ見エ方不明瞭ナルトキ、殊ニ目

距離測量

—(三三四)—

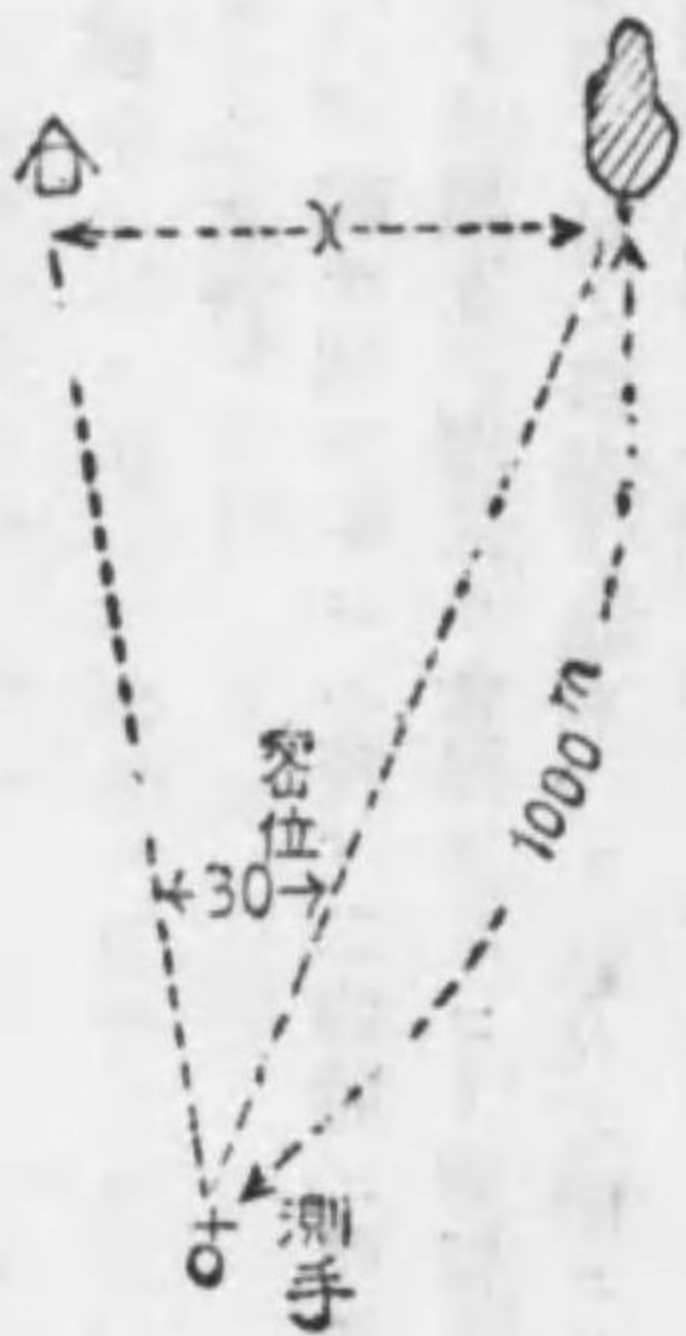
- ロ、測手太陽ヲ背ニスルトキ
- ハ、目標其背後ノ物色ノ關係ニ依リ鮮明ナルトキ
- ニ、遠隔セル明瞭ナル獨立物體
- ホ、積雪地、水面、平坦地並波狀地等ニシテ特ニ中間ノ土地ヲ通視シ得ザルトキ等
- ヘ、高地ヨリ見下ロストキ

- 標線ノ大部ヲ目視シ得ザルトキ
- ロ、炎熱ノトキ、陽炎アルトキ、測手太陽ニ面スルトキ等
- ハ、目標其背後ノ物色ノ關係ニヨリ鮮明ナラザルトキ
- ニ、曇天、濃霧、曉暮、森林内及狹長ナル土地等
- ホ、低キ姿勢ニ在リテ目測スルトキ
- ヘ、低地ヨリ高地ヲ仰視シテ目測スルトキ

五、幅員及高度ノ目測ハ其測定誤差一般ニ大ナルヲ常トス、故ニ此等ノ目測ハ通常密位（約一分畫）ヲ使用ス。

- 一密位ハ圓周ノ六千四百分ノ一ノ圓弧ニ對スル中心角ノ大サトス。此圓弧ハ半徑ノ約千分ノ一ノ長サニ等シク。
- 1、腕長ヲ基準トスル一指幅ハ約三十密位。
- 2、据銃セル場合ノ遊標幅ハ約百密位（約一分畫）百密位ヲ一分畫ト稱ス。

- 3、照尺ヲ起テタルトキ其内側ノ空間ハ約三十密位。
- 4、照尺一側ノ幅ハ約十五密位アリ。
- 七、密位法ニ依ル測定法ノ一例左ノ如シ。



右ノ圖ニ於テ測手ト樹木トノ距離千米（目測其他ニ依リ）ナルコトヲ承知シ樹木ト家屋トノ幅員ヲ測定セント欲セバ測手ハ概ネ自己ノ眼目高ニ腕ヲ前方ニ眞直ニ伸バシ樹木ト家屋トノ幅員ヲ指幅ヲ以テ測定ス。其結果幅員一指幅ナリトセバ前項「1」ニ述ベシ如ク三十密位ニ相當ス、一密位ハ半徑ノ千分ノ一ニ相當スルヲ以テ、測手ト樹木トノ距離ヲ半徑ト見做セバ三十密位ノ幅員ハ三十米ナルコトヲ知ルヲ得ベシ。

距離測量

—(三三五)—

距離測量

本例ハ半徑ヲ千米トナセシ好都合ノ一例ナルモ半徑トナルベキ距離千米以外ニ於テモ左ノ計算ニ依リ容易ニ測定シ得。

例 距離五〇〇米 密位量二十密位ノ場合

距離500=1:2

$$x = \frac{500 \times 1}{1000} = \frac{1}{2} \dots \dots \frac{1}{2} (\text{米})$$

20密位ニ應ズル幅ハ

$$\frac{1}{2} \times 20 = 10 \dots \dots 10 (\text{米})$$

- 七、密位法ニ依ル測定ノ正確ヲ期スルニハ豫メ二物體ノ間隔ニ應ズル密位量ヲ測定シ置キコレト幅トテ對照シテ相互ノ關係ヲ會得スルコト切要ナリ。
- 八、目測ハ絶ヘズ自習スル時ハ各種ノ地形、天候及姿勢ニ於テ諸種ノ目標ニ對シ大ナル誤差ヲ生ズルコトナク目測シ得ルニ至ルモノトス。

第四節 音響測量

- 一、音響測量ハ目測ニ比シ其測定一層不確實ナルヲ免ガレズ。且學校等ニ於テハ練習ノ機會少ナキヲ通常トスルモ煙花ノ打揚、雷鳴時等ヲ利用スルトキハ容易ニ練習シ得ベシ。

二、音波ノ傳達ハ天候平穩ノ場合ニ於テ一秒時間ニ約三百二十米ニ達スルモノナルヲ以テ、三秒時間ニ一ヨリ十マテノ數ヲ連呼シ得ル如ク口調ヲ練習スルトキハ一箇ノ呼稱ハ百米ニ相當ス。即チ發光ヲ見テヨリ音響ノ耳ニ達スル間ニ要スル時間ヲ口調ニ依リ測ルトキハ其距離ヲ概測シ得ルモノトス。

第五節 器械測量

器械測量ハ器械ノ種類、精度及其使用法ノ巧拙ニ因リ精確ノ度ヲ異ニスルモ他ノ測量法ニ比シ精確ナリ。

其一 測索ヲ以テスル方法

- 一、測索ニハ成ルベク伸縮セザル綱又ハ測鎖ヲ以テスルヲ便トス。
- 二、測索測量上注意スベキ事項左ノ如シ。
 - 1、測索ニ縛ヲ生ゼシメザルコト。
 - 2、測索ハ常ニ伸張シ途中ニ結節ヲ生ゼシメザルコト。
 - 3、道路ノ測量ハ其中心ニ就キ常ニ同ジ關係位置ヲ保持シツ、測量ス。之ガ爲屈曲點毎ニ區分シテ測定スルヲ可トス。
 - 4、傾斜地ノ測量ニ於テハ傾斜ノ度大ナルニ從ヒ平坦地ノ距離ト差ヲ生ズルモノトス。

距離測量

其二 携帶測遠器ヲ以テスル方法

一、携帶測遠器ヲ以テ距離ヲ測量スルニハ測手ハ先ツ第一測點ニ於テ測定セント欲スル目標ヲ測方ニシテ立チ測遠器ノ「退」ト記シタル視窓ヲ開キ對物方窓ヲ目標ニ面セシムル如ク器ヲ水平ニ保持シテ視視スベシ、然ルトキハ器中ニ於ケル目標ノ映像ハ目標ト測手トヲ連結シタル線ト直角ノ方向ニ現ハルベシ、測手ハ器ノ上方或ハ下方ヨリ前方ヲ通視シ其映像ト同方向ニ於テ之ト一致スベキ一ノ假標ヲ定ム次ニ臆板ヲ「退」ノ窓ニ移シ他ノ視窓ヨリ再ビ前ト同要領ヲ以テ目標ヲ視フトキハ目標ノ映像ハ前ノ假標ニ一致セズシテ之ト若干ノ離隔ヲ生ズベシ、是ニ於テ測手ハ假標ト第一測點トノ延長上ヲ後退シツ、此映像ト假標トノ一致スル點ヲ求メ之ヲ第二測點トス。此兩點間ノ距離(基線ト稱ス)ヲ測量シ其五十倍ヲ以テ求ムル距離ト爲ス。

若地形上後退スルコト能ハザル場合ニハ、全ク前ト反對ノ方向ニ面シテ之ヲ行ヒ以テ基線ヲ決定スベシ、又假標ト爲スベキ適當ノ地物ナキ場合ニハ約二百米ノ距離ニ竹竿等ノ垂直物體ヲ植立スルカ又ハ助手ヲ置キ其服裝中識別シ易キ部分ヲ假標トスベシ。

二、携帶測遠器ヲ使用スルニ方リ特ニ注意スベキ事項概ネ左ノ如シ。

一、眼ト器械トノ關係位置及姿勢ヲシテ測量間一定ナラシムルコト。

- 2、視視開器補ノ上面ヲ水平ニ保持スルコト。
- 3、觀測ヲ容易ナラシムル爲、目標ハ成ルベク垂直物體若ハ認識シ易キ點ヲ選ブコト。
- 4、測量セントスル目標ト假標トノ一致ヲ精密ニスルコト。
- 5、基線ヲ決定スル爲第二測點ヲ求ムルニハ正シク第一測點ト假標トヲ連結シタル直線上ナルコト。
- 6、基線ノ測量ハ勉メテ正確ナルコト。

第十章 測 圖

第一節 要 則

第一、測圖教育ノ目的ハ一般地形圖ヲ讀解シ圖上ニ於テ水平、垂直或ハ傾斜ニ沿フ距離、高サ、傾度等ヲ測定シ且簡易ナル要圖ヲ作製シ得ルノ技能ヲ附與スルニ在リ。

第二、地圖ハ一ノ比較面上ニ地貌地物ノ一方或ハ兩者ヲ併用現示セシモノナリ。

第三、地面上ノ諸物體ノ位置、形狀ヲ紙上ニ現示スルニハ土地ノ下方ニ通ズル一ノ水平面ヲ假想シ此ノ面上ニ地上ノ諸物體ヲ投影シテ其平面圖ヲ現示シ又土地ノ高低、起伏ハ土地ノ各點ヨリ此假想水平面上ニ至ル垂直距離ヲ算定シテ高低ヲ現示ス。

此假想水平面ハ海水面ニ平行セル表面ニシテ之ヲ比較表面ト稱ス。
我陸地測量部發行ノ地形圖ハ、東京灣ノ中等潮位ニ於ケル海水面ヲ以テ其比較表面ト
ス。

第四、地圖ハ其使用目的ニ依リ製作スルモノニシテ其種類甚ダ多シ、一ノ比較表面上ニ
地貌ノミヲ現ハセルモノヲ水準圖ト名ヅケ地物ヲ投影シ、其位置、形狀、種類ヲ現ハセルモ
ノヲ平面圖ト名ヅク而シテ此兩者ヲ併用セルモノヲ地形圖ト稱ス。地形圖ハ其描寫ノ目
的ニ應ジ之ガ精度ヲ異ニス而シテ其精度ニ依リ通常要圖、詳細圖、一覽圖ノ三種ニ分ツ。

第五、要圖ハ通報、報告文等ノ煩雜ナル字句ヲ省キ或ハ其意ヲ補足スル爲ニ用ヒラル、
モノニシテ簡單ナル測量法ヲ以テ現圖シ或ハ地圖ヲ參照シテ、概ネ迅速ニ描畫スマキモ
ノニシテ其精粗ハ一ニ使用目的ニ依リ決定スルモノトス。

第六、詳細圖ハ精度良好ナル器械ヲ用ヒ、精密ナル測量法ニテ測量シ明細ニ現圖セラレ
タルモノニシテ我が陸地測量部發行ノ地形圖ノ如キモノコレナリ。

第七、一覽圖ハ廣濶ナル面積ヲ小圖紙面上ニ縮小シテ現圖シタルモノニシテ、一般ノ位
置的關係ヲ見ルニ便ナルモノナリ。我陸地測量部發行ノ二十萬分一帝國圖、五十萬分一
及百萬分一輿地圖ノ如キモノ是ナリ。

第八、寫景圖ハ地圖ノ一種ニシテ地貌、地物ノ形態其關係位置ヲ要圖調製要領ニ從ヒ簡
單明瞭ニ描寫セシモノニシテ地形一部ノ實形ヲ知ルニ便ナルモノトス。

第九、陸地以外ノモノニ海圖、航空圖等アリ。

第二節 地圖ノ現示法

其一 地圖ノ讀解

一、地圖ハ一般ニ圖紙ノ上方ヲ北トシ若否ラザルトキハ矢標ヲ畫キ其方位ヲ示ス。

二、地形ヲ描畫スルニハ一定ノ比ヲ以テ原形ヲ縮小スルモノトス。其縮小ノ比即チ圖上
物體ノ長度ト地上實物ノ長度ニ於ケル比ヲ梯尺(縮尺又ハ)ト名ヅク。

地面上ニ於ケル甚ダ複雑セル各種地物ノ位置、形狀及地貌ヲ詳細ニ現示センガ爲ニハ
此等相互ノ位置的關係ヲ測定セザルベカラズ。即チ平面位置ヲ決定スルタメニハ平面測
量ヲ高低位置ノタメニハ水準測量ヲ行ヒテ此位置的關係ヲ決定シ、圖上ニ描畫ス之ガ爲
一定ノ方式ヲ定ム其平面圖描畫ノ爲ニ定ムルモノヲ平面圖式、水準圖描畫ノ爲ニ定ムル
モノヲ水準圖式ト謂フ。(附表第十三參照)

三、平面圖式及水準圖式ニ依リ定メタル諸記號ト雖、未ダ悉ク地形ヲ明示スルニ足ラズ
即チ固有名詞、標高等ハ文字、數字ヲ用ヒテ説明ス之ヲ註記ト謂フ。(附表第十四參照)

四、地形圖ハ前述ノ如ク、地貌地物ノ位置的關係ヲ測定シタル後之ヲ某梯尺ニ依リ縮小シ平面圖式及水準圖式ノ規定ニ依リ圖紙上ニ描畫シ註記ヲ加ヘテ現圖シタルモノナリ。

其二 梯 尺

一、梯尺ハ如何ナル地圖ニモ通常之ヲ明記シ縮小ノ比ヲ明瞭ニス。故ニ圖上ノ長サヲ知リテ地上ノ長サヲ求メ或ハ地上ノ長サヲ知リテ圖上ノ長サヲ求ムルコトヲ得。

二、梯尺ハ通常分數ニテ表ハスモノトス。而シテ之ヲ表ハスニハ使用ヲ簡單ナラシメンガ爲分子ヲ一トシ分母ヲ十ノ倍數ト爲ス、從ヒテ梯尺ノ大小トハ其分數ノ値ニ應ズル稱呼ニシテ例ヘバ二萬分一ノ梯尺ハ五萬分一ノ梯尺ヨリ大ナリト謂フガ如シ。

三、梯尺ノ一分畫ハ使用ニ便ナル如ク、適宜之ヲ定ムルモノトス。例ヘバ五千分一ノ梯尺ヲ作ルニハ先一直線ヲ畫シ左方ヨリ起リテ二種(地上百米ノ長サニ應ズ)毎二分畫シ各分畫點ノ上方ニ於テ左端ヨリ逐次0 100 200 300 400等ノ數字ヲ記シ次ニ0ヨリ左ヘ一分畫ヲ每二耗(地上十米ノ長サニ應ズ)ニ分畫シ其下方ニ於テ中央ニ50左端ニ100ノ數字ヲ記ス。尙0ト記シタル分畫ヨリ右方ノ線下ニ太キ一線ヲ畫シ以テ梯尺ヲ明瞭ナラシメ0ノ右上方ニハ尺度ノ單位ヲ記ス。(第六十三圖)

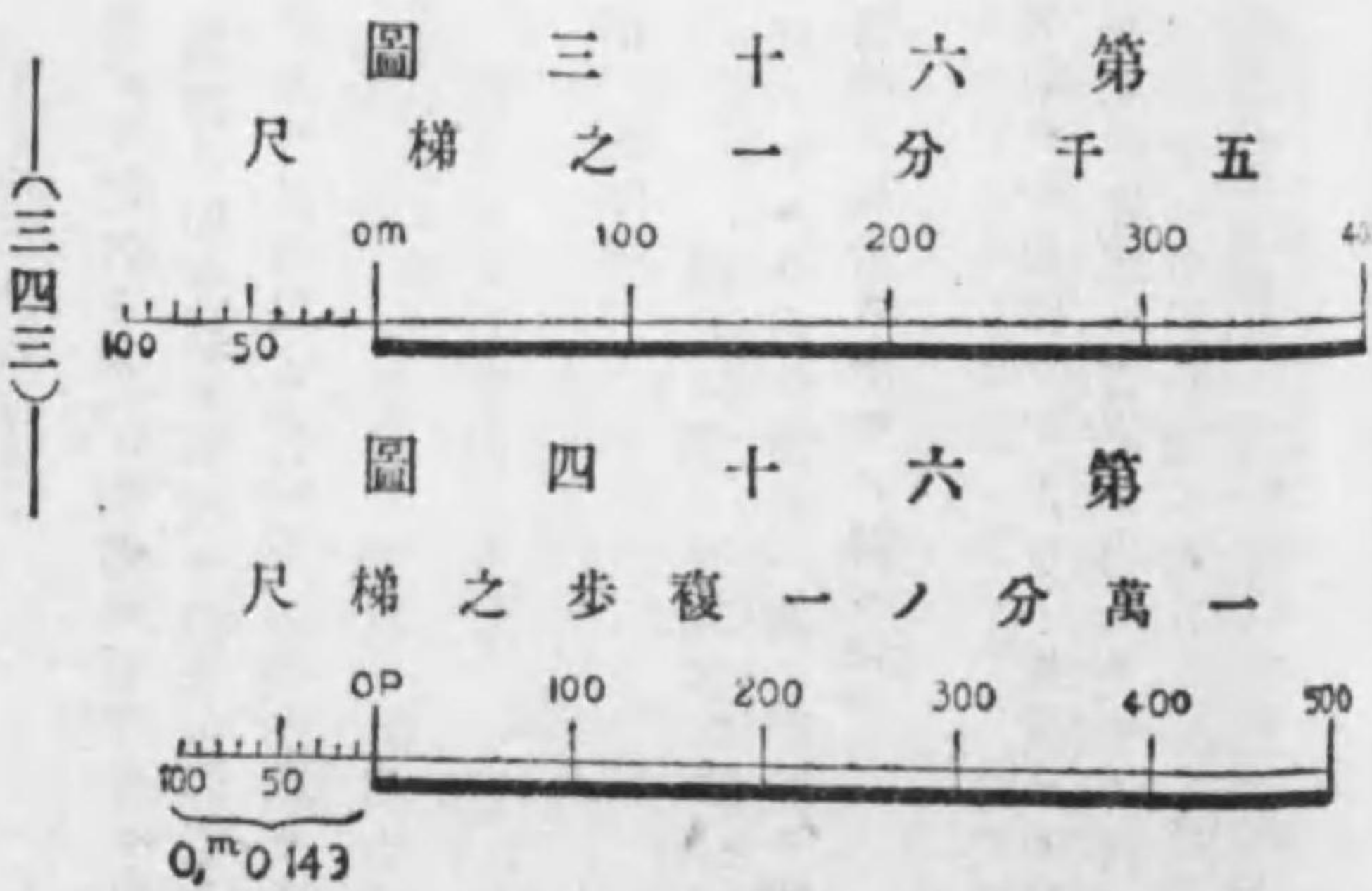
四、步測ヲ爲ス場合ニハ複歩ノ梯尺ヲ作り置クヲ便トス。其法先ツ百米ニ於テ七十複歩ノ中等數ヲ得タリトシ一萬分一ノ梯尺ヲ作ラントセバ、百米即チ七十複歩ハ一種ニシテ百複歩ハ一、四三種ナルヲ以テ此既知件ニ依リ尋常ノ梯尺ノ如ク作ルモノトス。(第六十四圖)

其三 平面圖式(附表第十三)

一、平面圖式ヲ大別シテ線號式及渲彩式ノ二種トス。

二、線號式ハ諸種ノ線號ヲ用ヒテ地物ノ位置、種類ヲ示シ、或ハ形狀ヲ象リ若ハ特別ノ記號ヲ設ケテ其位置、類別ヲ明ニスルモノナリ。

三、渲彩式ハ線號ノ一部ノ記號ニ代フルニ各種顏料ヲ用ヒテ渲彩シ諸物ノ類別ヲ明ニスルモノナリ。



四、平面圖ニハ梯尺ニ應ジテ縮少シタル眞ノ形狀ヲ畫クヲ要スト雖、物體ニ依リテハ其大サヲ梯尺ニ合セシムルコト能ハザルハ勿論、地物ノ類別ノ如キ遂ニ形狀ヲ以テ圖示シ、得ザルモノアリ故ニ此ノ如キモノニシテ現圖上必要ナルモノハ已ムヲ得ズ。其形狀ヲ大ニスルカ或ハ特殊ノ記號ヲ以テ現示ス。

其主要ナルモノヲ擧グレバ左ノ如シ。

- 1、眞ノ位置ニ其形狀ヲ縮寫シテ現ハスモノ例ヘバ
市街、村落、家屋及公園ノ道路、河川、溝渠、湖沼、海洋等
- 2、長サヲ眞ノ縮寫ニ取り其位置ハ記號的ニ現ハスモノ 梯尺ニ應ジテ縮少スルトキハ、其幅微少トナルノミナラズ、時トシテ全ク描ク能ハザルヲ以テ方向ハ眞ノ形狀ヲ縮少スルモ其幅ハ一定ノ尺度ヲ以テ適宜擴大シテ記號的ニ現示スルモノ例ヘバ、
道路、電線、構園、幅狭キ河川、溝渠等
- 3、眞ノ位置ニ於テ全ク記號的ニ現ハスモノ 著明ナル目標トナリ又ハ顯著ナル地物ヲ表示スルモノニシテ(小物體)特殊ノ記號ヲ以テ其位置或ハ方向ヲ現ハスモノ例ヘバ鳥居、獨立樹、土坑、三角點、煙突等
- 4、全ク記號的ニ地物ノ種類ヲ示スモノ例ヘバ

(イ) 城墟、古戰場、火山、探礦地、牧場等(上記等ノモノヲ示ス記號ヲ指示記號ト稱ス)ヲ示ス記號ハ當該場地中ノ主要ナル位置ニ描クモノトス若シ之ナキトキハ中等位置ニ描ク。

(ロ) 耕地、森林等ニ於ケル植物ノ種類、狀態(上記ノモノヲ示ス記號ヲ指示記號ト稱ス)ヲ示ス記號ハ其種類毎ニ境界ヲ描キ其内部ニ相當ノ記號ヲ配置スルモノニシテ耕地ニ在リテハ定間隔ニ其他ニ在リテハ不定間隔ニ描ク。

5、家屋ニハ更ニ記號ヲ添ヘテ其ノ種類ヲ示ス例ヘバ
神祠、佛宇、學校、公署、製造所及水車房等ノ如キ緊要ナル家屋ニハ諸種ノ記號ヲ副

ヘ以テ其種類ヲ區別ス此レヲ副記號ト稱ス。

其四 水準圖式

- 一、水準圖式ハ之ヲ分チテ曲線式、暈滲式、暈渲式、標高式及混合式トス。
- 二、曲線式ハ距離等シキ數多ノ重疊セル水準面(中等潮位面ニ平)ヲ以テ地面ヲ截斷セルモノト假想シ此水準面ト地面トノ交會點ヲ各比較表面上ニ投影シテ梯尺ニ化シ起伏ノ狀態ヲ現示スルモノナリ、此交會線ノ投影ヲ水平曲線或ハ單ニ曲線ト稱ス(第六十五圖)
- 三、暈滲式ハ垂直或ハ斜上方ヨリ各異ノ斜面ニ受クル所ノ光量ヲ思考シ地貌ノ變化ヲ現

- ハスモノナリ。
- 四、**暈滯式**ハ水平曲線ニ代フルニ色號ヲ以テ地貌ヲ現圖スル方法ニシテ鐵色或ハ褐色等ノ色度ノ濃淡ニ依リ傾斜ノ緩急ヲ現ハスモノナリ。
 - 五、**標高式**ハ圖上諸點ノ傍ニ標高ヲ註記シ各地點ノ高低ヲ示シ土地ノ起伏ヲ示スモノナリ。
 - 六、**混合式**トハ通常曲線式ニ暈滯式或ハ暈渲式ヲ混用シ黑色、褐色等ニ依リテ傾斜ヲ明瞭ニ現圖スルモノナリ。
 - 七、上記各種水準圖式ハ各々其特性ニ依リ利害、用所ヲ異ニス。而シテ通常使用スルモノハ曲線式ナリ以下曲線式ニ就テ述ベントス。
 - 八、「二」ニ於テ述ベシ距離等シキ數多ノ重疊セル水準面間ノ垂直距離ヲ真等距離ト名ヅケ之ヲ梯尺ニ化セシモノヲ圖上等距離ト稱ス。
- 等距離ハ地形梯尺ニ從ヒ變化スト雖同一地圖ニ於テハ一定ナルモノトス。其ノ一般ニ用フル等距離ハ次ノ如シ。

圖五十六第
領要ノ圖式線曲



比較表面

梯尺	真等距離 (米)	圖上等距離 (耗)
$\frac{1}{5,000}$	2	$\frac{2}{5}$
$\frac{1}{10,000}$	5	$\frac{1}{2}$
$\frac{1}{20,000}$	10	$\frac{1}{2}$
$\frac{1}{25,000}$	10	$\frac{2}{5}$
$\frac{2}{50,000}$	20	$\frac{2}{5}$
$\frac{1}{200,000}$	100	$\frac{1}{2}$

水平曲線ト地面ノ傾斜トノ關係

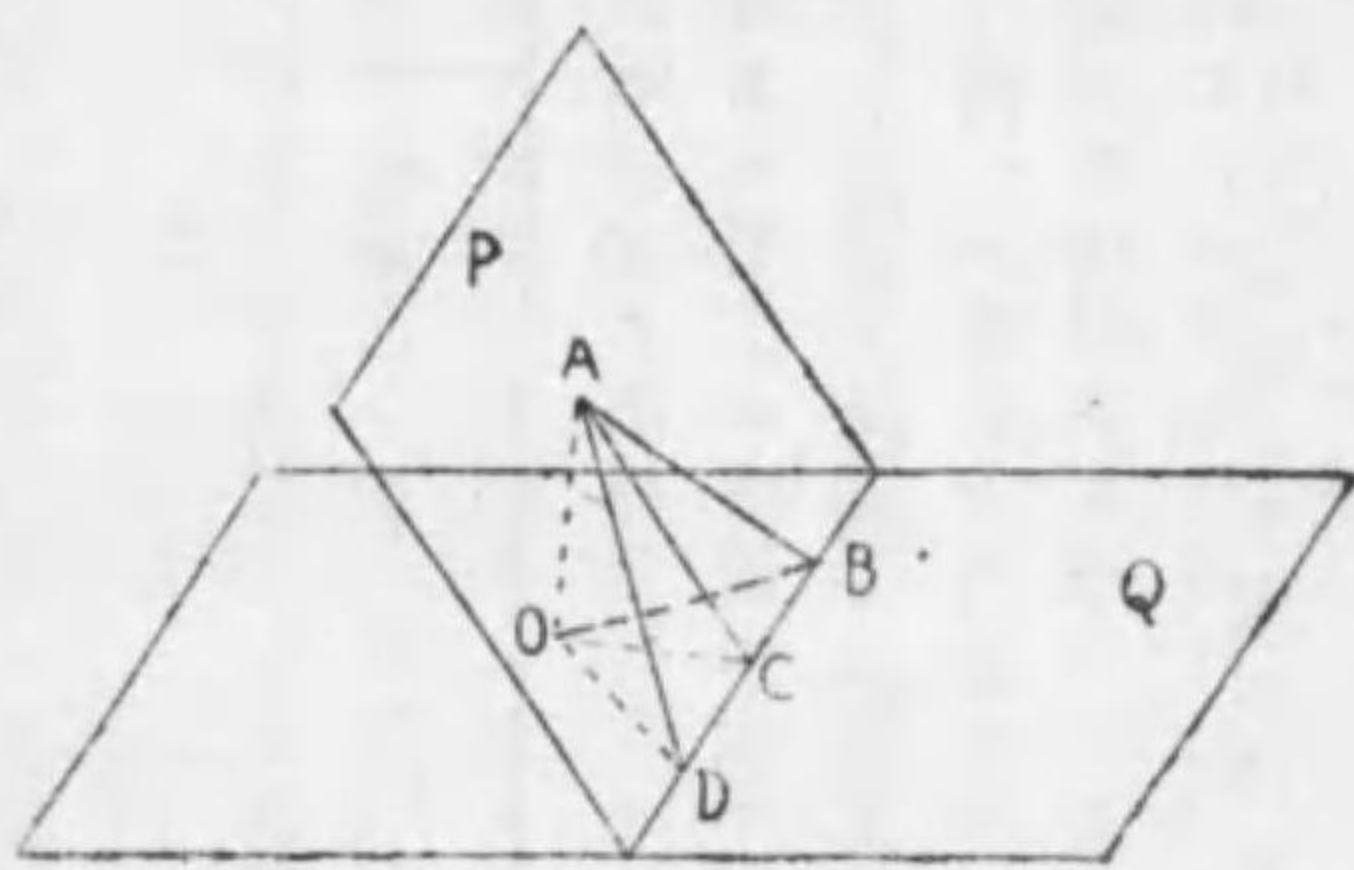
一、斜面ノ某點ヨリ其表面上ニ引ケル諸線中水平面ト最大ノ傾斜ヲ爲ス線、即チ流水線ヲ最大傾斜線ト稱ス。而シテ地面ノ傾斜ハ此最大傾斜線ト水平面トナス。角若ハ傾斜分數ニ依リテ示スモノトス。例ヘバ第六十六圖ニ於テACハP斜面中A點ヲ通ズル最大傾斜線ニシテOCハQ平面ニ於ケル其投影ナリ。

故ニP斜面ノ傾斜ハ $\frac{AC}{AO}$ 又ハ $\frac{AO}{CO}$ ニ依リテ測知スルヲ得。

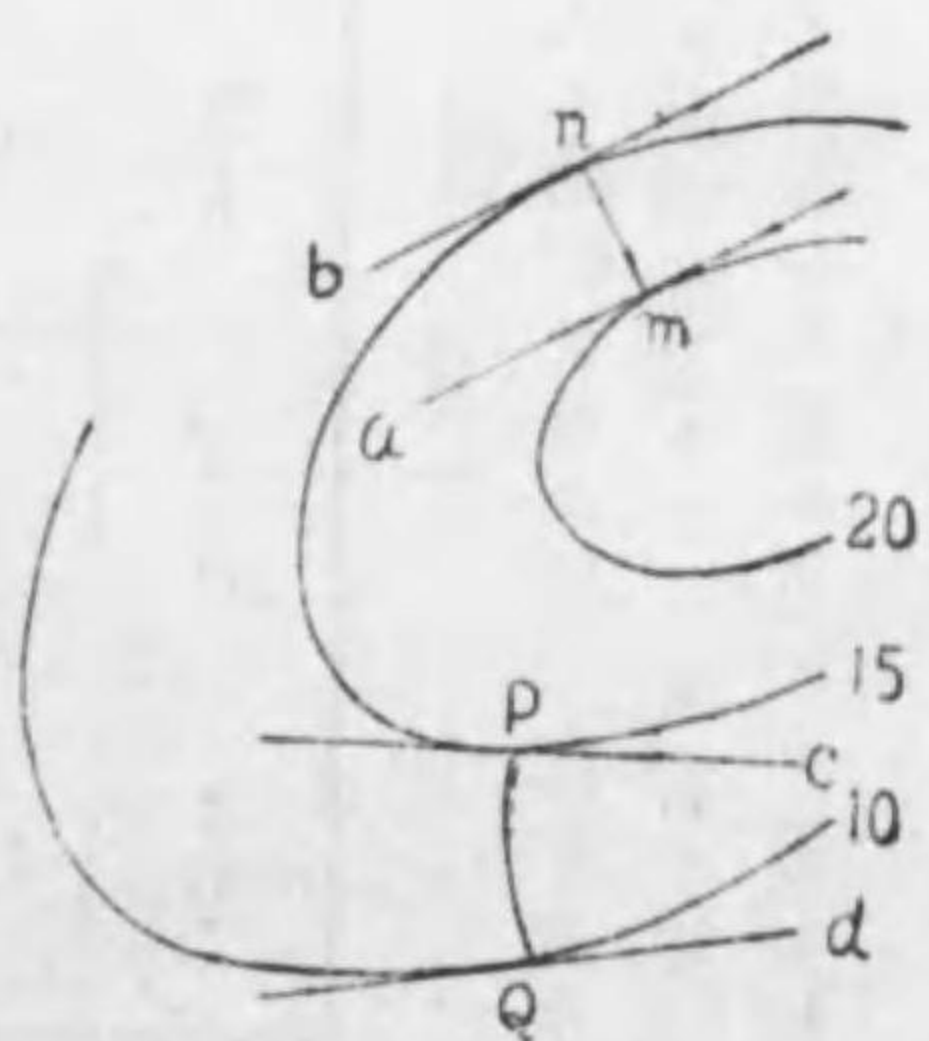
圖 六 十 六 第
(一 其)

線 斜 傾 大 最

$AC \perp BCD$
 $\hat{A}GO > \hat{A}BO$ 又 $\hat{A}CO > \hat{A}DO$



(二 其)



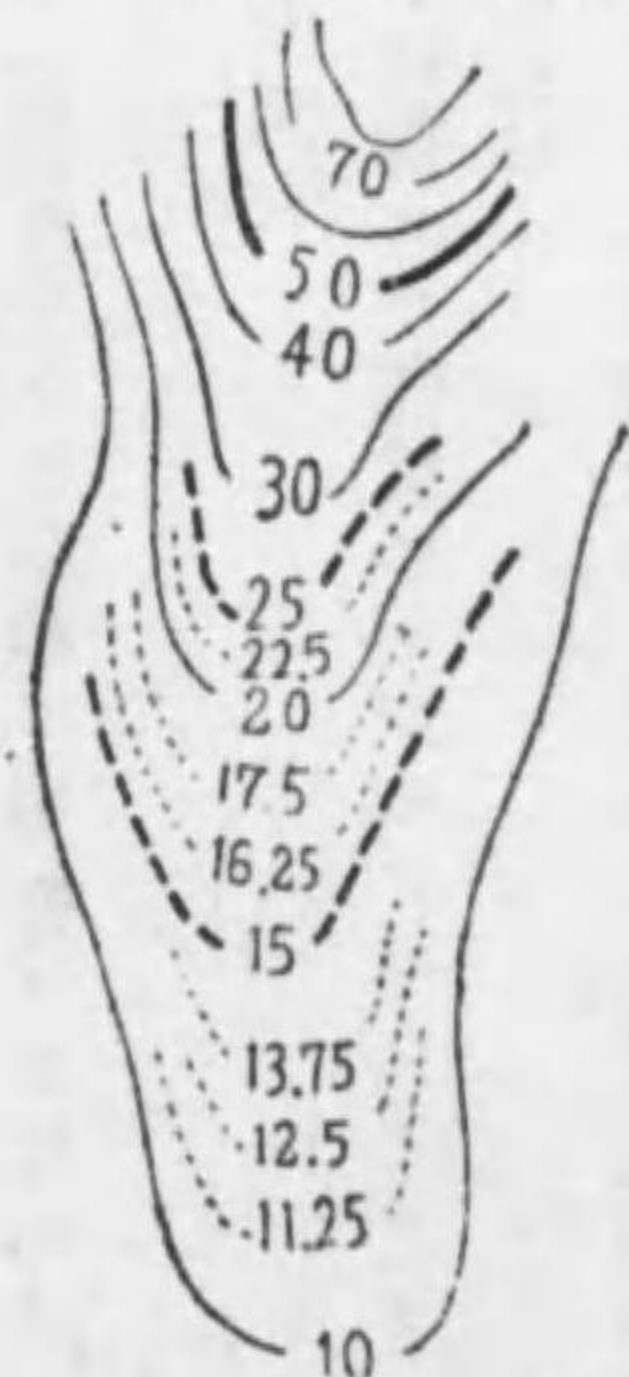
某點ニ於ケル最大傾斜線ノ投影ハ水平曲線ト直行スルモノナリ、故ニ第六十六圖其二ノ如ク水平曲線ノ切線 mn ノ如ク平行ナルトキハ其最大傾斜線ノ投影 mn ハ直線ナレドモ $PCQD$ ノ如ク平行ナラザルトキハ其最大傾斜線ノ投影 PQ ハ曲線ヲ爲ス。

二、水平曲線ノ間隔ハ地面ノ傾斜ノ緩急ニ從ヒ増減スルモノニシテ傾斜ノ急峻ナルニ從ヒ愈々相接近シ緩徐ナルニ從ヒ愈々相離隔ス。

水平曲線ノ記載法(第六十七圖)

- 一、水平曲線ノ記載法ニ四種アリ、首曲線、間曲線、助曲線、計曲線之ナリ。
- 二、首曲線ハ等距離ニ應ズル水平曲線ニシテ細キ實線ヲ用フ。
- 三、間曲線ハ一局部ノ地貌ヲ明示センガ爲、首曲線ノ中間ニ挿入シ等距離ノ半ニ應ズル水平曲線ニシテ細キ長點線ヲ用フ。
- 四、助曲線ハ間曲線ヲ用フルモ尙局部ノ地貌ヲ現示シ難キトキ之ヲ明示センガ爲更ニ其間ニ一乃至三條ヲ挿入シ等距離ノ四分ノ一若ハ八分ノ一ニ應ズルモノニシテ細キ點線ヲ用フ。
- 五、計曲線ハ水平曲線ノ讀算ヲ便ニセンガ爲等距離ノ五倍ニ相當スル首曲線ニ起リ五條毎ニ之ヲ太クセルモノナリ、即チ二萬五

圖 七 十 六 第
法 載 記 ノ 線 曲 平 水



線 曲 計
線 曲 首
線 曲 間
線 曲 助

千分ノ一ニアリテハ每五十米、五萬分ノ一ニアリテハ每百米ノ等距離ニ相應スルモノナリ。

其五 註記 (附表第十四)

- 一、註記ハ記號ヲ以テ指示シ能ハザル地圖ノ意義ヲ解釋スル爲緊要ナルモノニシテ之ヲ分チテ平面圖ノ註記及水準圖ノ註記トス。
- 二、平面圖ノ註記ニハ漢字及假名ヲ用フ、漢字ノ註記ハ其書體及字ノ大小ニ依リ又假名ノ註記ハ平假名及片假名ヲ用ヒ各々其所ヲ異ニス。
- 三、水準圖ノ註記ハ之ヲ標高ノ註記及比高ノ註記ニ分チ共ニ亞刺比亞數字ヲ用フ。
- 四、註記ノ良否ハ地圖ニ影響スルコト大ナルヲ以テ左ノ注意ヲ拂ヒテ註記ヲ爲ス。
 - 1、註記ハ正確ナルコト、之ガ爲地名物名ハ公文書ニ於テ現ニ使用スルモノ又ハ其地方ニ於テ廣ク稱呼スルモノヲ採用ス。
 - 2、註記ノ發見並讀解ノ容易ナルコト、之ガ爲註記ノ位置及文字ノ太サヲ適當ニシ、且字體ヲ正シクシ、要スレバ漢字ニ傍訓ヲ附ス。
 - 3、註記ハ圖ヲ錯雜不明ニ陷ラシメザルコト、註記ノ數ハ讀解上成ルベク多キヲ可トスルモ過多ナルトキハ却テ鮮明ヲ缺キ又過少ナルトキハ讀解ヲシテ十分ナラシムルヲ得

ズ、之ガ爲著名ナル碎部ニアリテハ勿論之ヲ註記シ縱ヒ著名ナラザルモ其位置ニ依リ用圖上要用ナルモノハ之ヲ註記シ重要ノ度劣ルモノハ記號或ハ副記號ニ依リ單ニ其種類ヲ知ラシム。

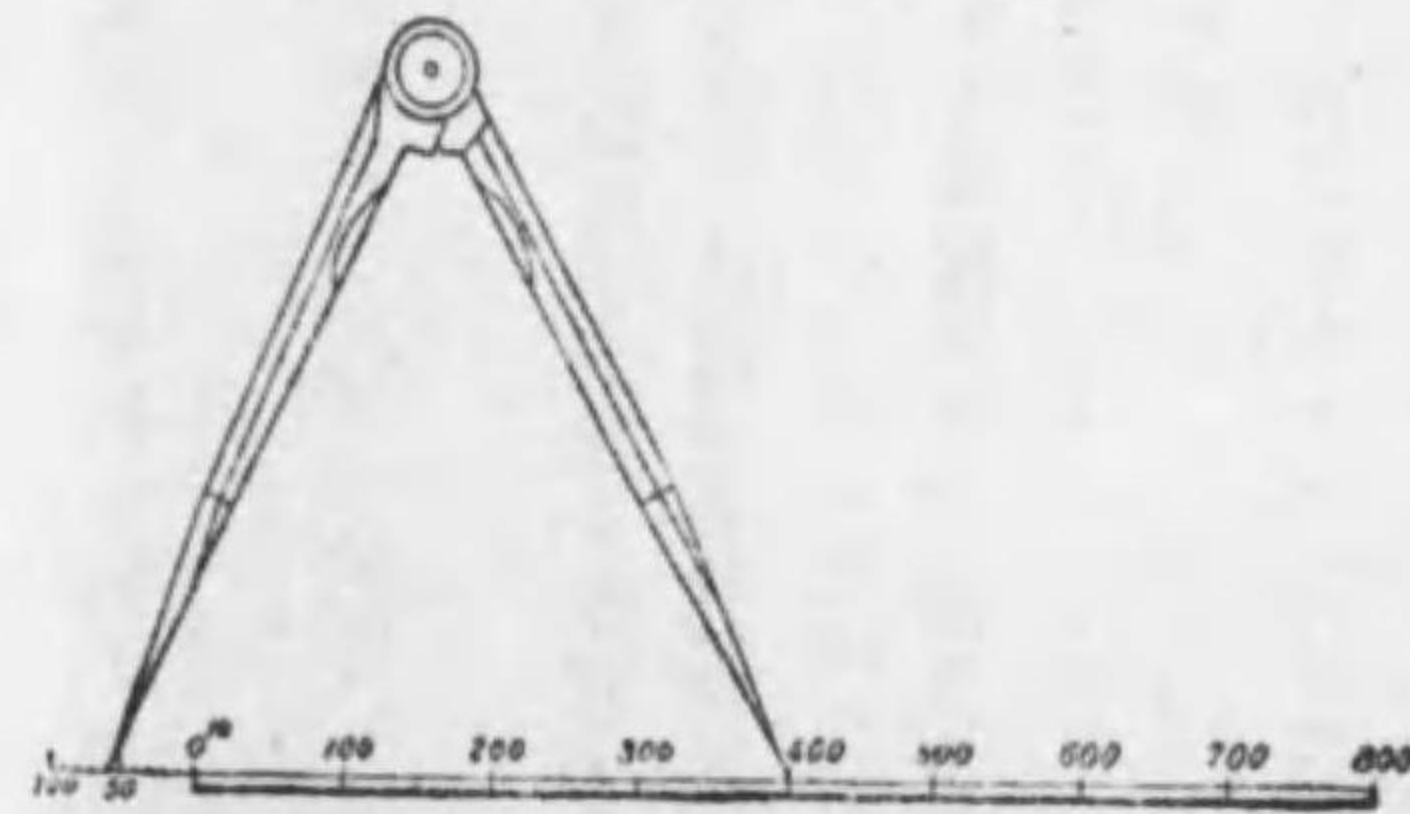
第三節 地圖ノ利用

其一 要 則

- 一、地圖ノ利用ハ虞汎ニ巨ルモ梯尺ト兩脚器トニ依リ、圖上距離ヲ測定シ曲線ノ狀態ニ依リ傾斜ノ緩急ヲ知り地類ノ記號ニ依リ陸蔽ノ程度ヲ考察シ或ハ地圖ヲ伸寫シ又ハ縮寫シ希望ノ用途ニ供スル等日常生活ニ利用スルコト多シ。
- 二、地圖ヲ利用スルニ當リテハ先其地圖ノ價值ヲ判定スルコト要緊ナリ、而シテ判定上注意スベキ事項左ノ如シ。
 - 1、精密ナル器械ニ依リ地形測量ヲ實施シ且現圖法適切ナルモノ。
 - 2、測量竝修正年月新シキモノ。
 - 3、印刷鮮明紙質良好渲彩適當ナルモノ。
- 其二 圖上ニ於ケル距離及面積ノ測定
 - 一、圖上ニ於テ某々地點ノ距離ヲ測定スルニハ物尺、兩脚器又ハ目測ニ依リテ測定ス、而

シテ距離ノ測定ニハ直線距離ノ測定ト道路(河川等)ニ沿フ距離測定トノ二種アリ。
 二、直線距離ノ測定法ハ兩脚器ヲ以テ圖上ニ點間ノ長サヲ計リ之ヲ梯尺ニ對照ス、其方
 法ハ圖上ニ於テ挾ミタル兩脚器ノ開キヲ變ズルコトナ
 ク第 十八圖ノ要領ニ依リ梯尺上ニ移ストキハ眞ノ距
 離ヲ得、圖ハ四百五十五米ヲ測定セシコトヲ示ス。
 三、路上距離ハ通常兩脚器或ハ紙片ヲ用ヒ道路ニ沿ヒ
 テ測定スルモノトス、若シ道路ノ景況水平ナラザルト
 キ要スレバ曲断面圖(第七十三圖)ヲ編成シ之ニ依リ
 テ路上ノ長サヲ測定シ其距離ヲ求ムルモノトス。
 四、圖上面積ノ測定ハ方眼ヲ用フルヲ便トス、之ヲ測
 ラントスレニハ通常一極平方ノ方眼ヲ用ヒ圖上ノ面積
 ヲ掩ヒ其完全ニ含マザルトコロハ更ニ小部分ニ區劃セ
 ル方眼ニ依リ細分シ其兩方眼數ヲ計算シテ測定ス之ガ
 爲透明紙上ニ方眼ヲ畫シ之ヲ圖上ニ掩覆シテ測定スレ
 バ便ナリ。

第 六 十 八 圖



五 千 分 一 之 梯 尺

其三 圖上ニ於ケル土地ノ標高及傾斜ノ測定

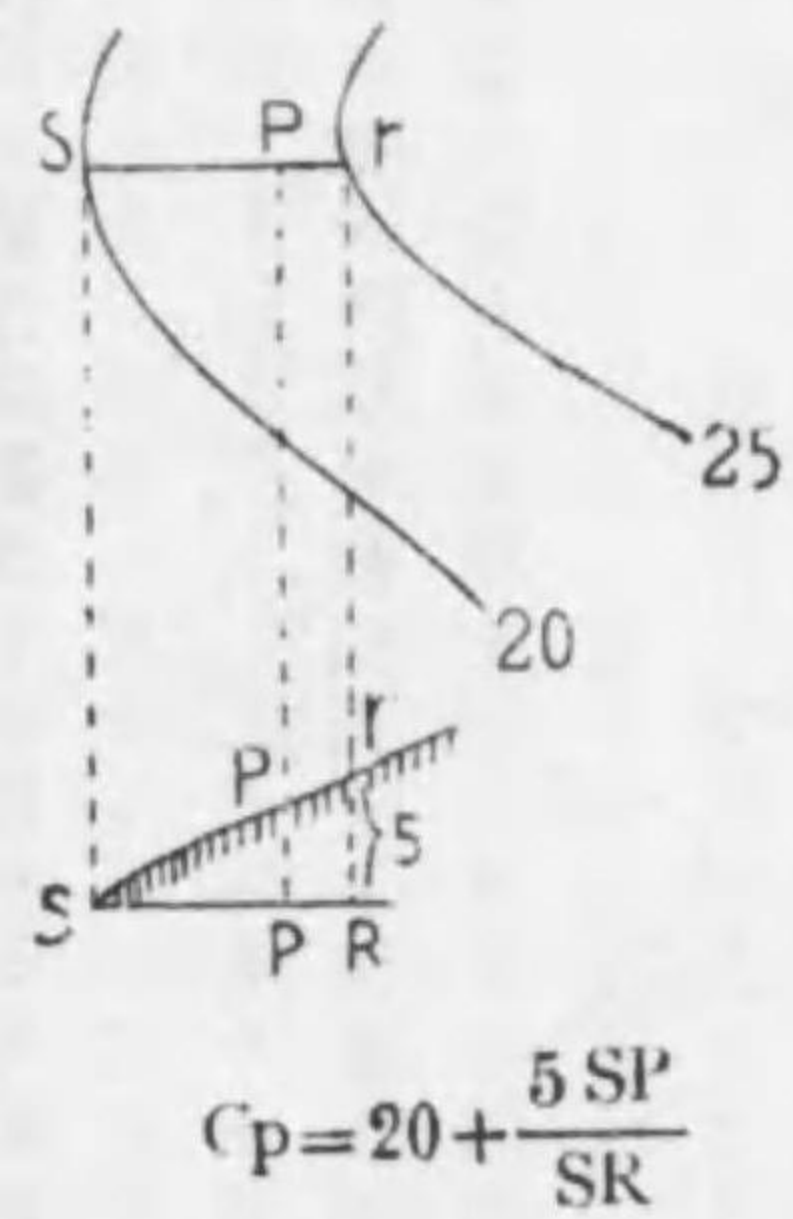
一、最大傾斜線ノ投影直線ナルトキ某點Pノ標高ヲ求メンニハ平面圖上ニ於テ此點ヲ通
 シテ兩曲線ノ間ニ最大傾斜線ヲ畫シ而シテ其長サヲrトス、P點ヨリSノ一端、例ヘバ
 Sニ至ル長サPSヲ測リ且眞等距離ヲ知ラバ左式ニ依リP點ノ標高CPヲ算出スルヲ得(第
 六十九圖)

二、土地ノ傾斜ニハ地線ノ傾斜及地面ノ傾斜ノ別アリ。

三、某點Pニ於ケル地面ノ傾斜ヲ求ムルニハ此點ヲ通ズル水平曲線ノ間隔即チ最大傾斜

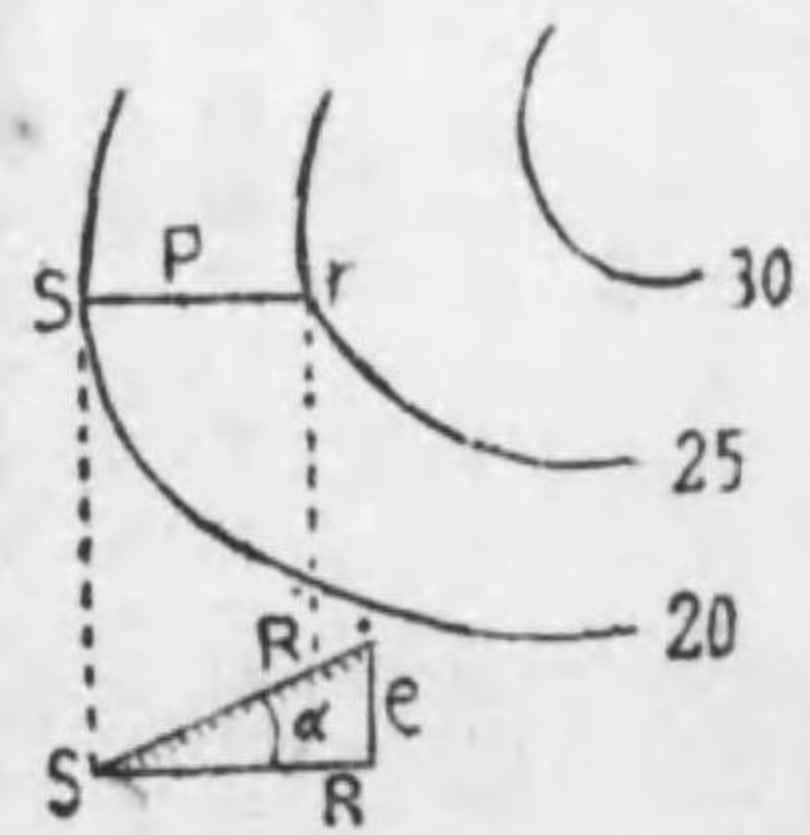
第 六 十 九 圖
地 點 標 高

測 圖

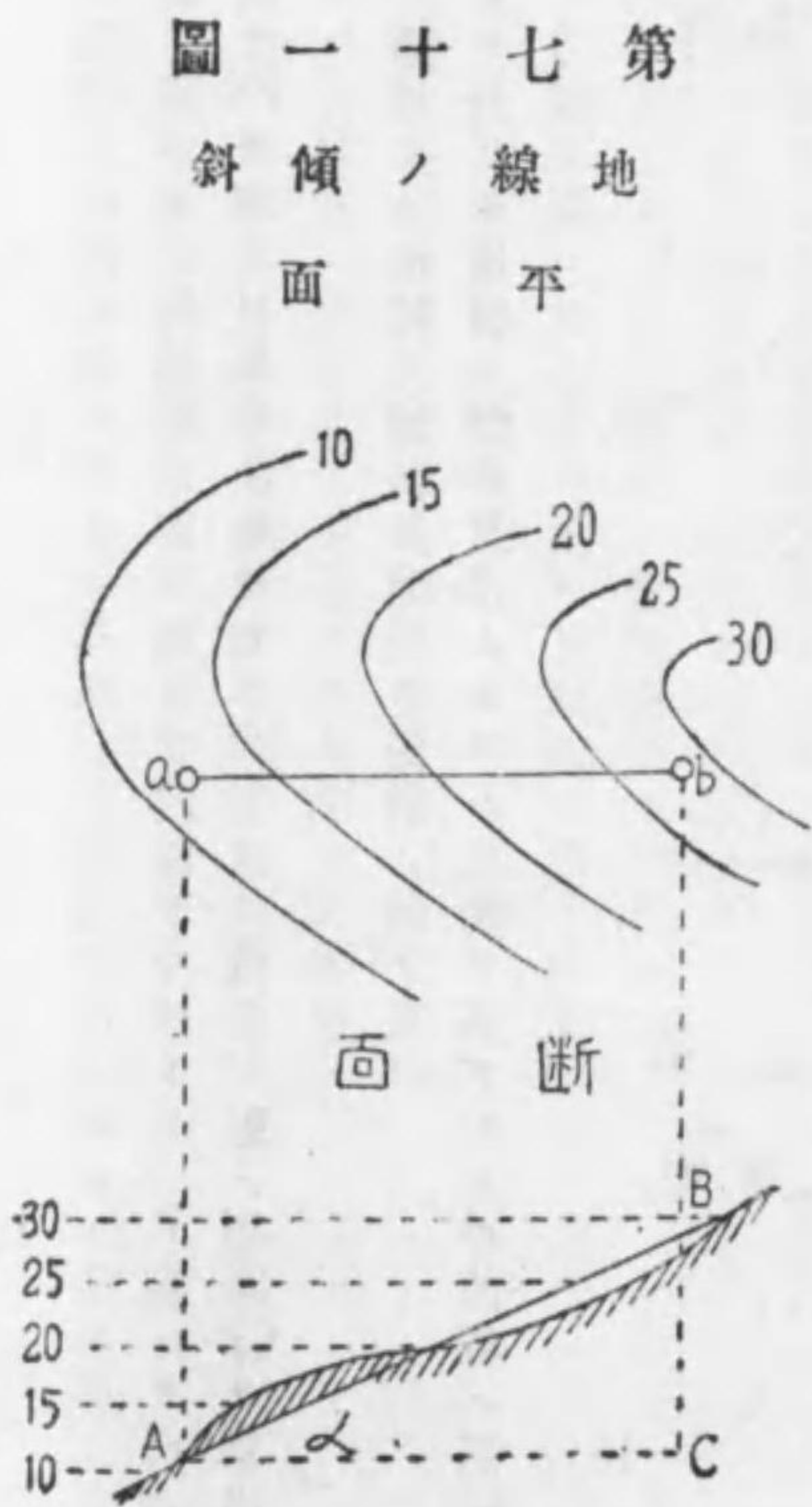


第 七 十 圖
地 面 傾 斜

(三五三)



線ノ圖上長度ヲ以テ圖上等距離ニテ除セシモノ即チe SR 又ハ傾斜角 α ヲ求ムルニアリ。
 (第七十圖)
 四、地線ノ傾斜(地上ニ沿ヘル任意)ヲ求ムルニハ某二點間ノ水平距離ヲ以テ其二點ノ標
 高差ヲ除セシモノ即チ $\frac{BC}{AC}$ 又傾斜角 α ヲ求ムルニ在リ。(第七十一圖)



第七十圖
 地線ノ傾斜
 平面

其四 地圖ト現地トノ對照

一、地圖ト現地ト對照スルニハ先ヅ左ノ方法ニ依リ地圖ノ方位ヲ現地ニ一致セシムル
 ヲ要ス。
 地圖ハ其上部ヲ北方位トスルヲ通常トシ、若シ然ラザルトキハ矢標ヲ以テ之ヲ示スガ
 故ニ磁針ヲ有スルトキハ其方位ニ依リ極メテ簡單ニ地圖ト現地ト正シク一致セシム
 ルコトヲ得。
 二、磁針ヲ有セザル場合ニ於テ自己ノ現位置ヲ圖上ニ確知スルトキハ先ヅ方位ヲ判定シ
 概略地圖ノ方位ヲ定メタル後圖上ニ於ケル道路、河川又ハ著名ナル物體ニ通ズル諸線ヲ
 地上之ニ應ズル方向ニ一致スルマテ地圖ヲ回轉ス、然ルトキハ地圖ハ正シク現地ニ一
 致ス。

三、自己ノ現位置ヲ圖上ニ正確ニ認ムルコト能ハザルモ概略ノ位置ヲ知ルトキハ地形ヲ
 周視シテ道路ノ屈曲、河川ノ方向、山、谷ノ配置又ハ森林、村落等ノ實況ヲ圖上ニ對照
 シ、地圖ヲ其方向ニ一致セシム、然ルトキハ地圖ハ正シク現地ニ一致ス。
 右ノ如ク地圖ノ方位ヲ決定セバ現地ニアル高地、住民地、線狀物體等ノ如キ重要ナル目
 標ニ著目シテ是等諸點ノ關係位置、距離、廣狹ヲ現地ト比較シ次テ土地ノ高低起伏ノ狀

態及傾斜等ノ景況ヲ精密ニ研究スルモノトス、而シテ此際圖上ニ於ケル地貌地物描畫ノ程度ニ注意シ殊ニ梯尺ニ應ジテ省略セル碎部ノ種類、大小等ヲ考究スルヲ要ス。

其五 寫 圖

一、地圖ヲ謄寫シ或ハ地圖ニ依リ要圖ノ調製ヲ爲スコト屢々アリ。

地圖ヲ謄寫スルニハ寫圖ノ梯尺原圖ト等一ナルト否ラザルトニ從ヒ其方法ヲ異ニスルモ通常先ヅ平面圖ヲ描寫シ次ニ水準圖ニ及ブモノトス、而シテ寫圖ノ梯尺原圖ヨリ大ナルトキハ之ヲ伸寫圖ト謂ヒ小ナルトキハ之ヲ縮寫圖ト謂フ(附表第十五、第十六)

二、梯尺ヲ變セザル寫圖ハ薄紙又ハ透明紙ヲ用ヒ或ハ硝子窓ニ附シテ透寫シ、又ハ粘紙(黒鉛等ヲ塗)複寫紙等ヲ圖紙上ニ置キ其上ニ現圖ヲ載セ細キ鋼鍼ヲ以テ原圖ノ重要ナル諸線ニ從ヒ之ヲ壓模シテ寫取シ或ハ等一ナル方眼ノ補助ニ依リ若ハ目測ニテ之ヲ模寫ス。

三、梯尺ヲ變ズル寫圖ハ梯尺ニ比例セル方眼ノ補助ニ依ルヲ可トス、又寫眞、模寫器、比例兩脚器等ヲ用フルヲ得バ容易ニ謄寫スルコトヲ得、時トシテ比例尺ニ依リ謄寫スルコトアリ。

四、方眼ニ依ル謄寫法ハ左ノ要領ニ依ルモノトス。

梯尺1mナル地圖ヲ梯尺1cmニテ描寫スルニハ原圖ノ圖廓トノ比ヲ梯尺分母ノ反比ニ準ジテ描畫シ、次ニ此兩圖廓ヲ等數ニ區分シテ方眼ヲ畫ス、通常五乃至二〇耗ヲ適度トス、而シテ兩圖ノ方眼ニハ其關係位置ヲ查出シ易カラシメンガ爲相應スル方眼ノ端末ニ同一ノ番號ヲ附シ然ル後謄寫ニ着手ス、即チ原圖上ノ某點ヲ寫取センニハ其點ヨリ方眼二邊ニ至ル長サヲ測定シ之ヲ寫圖上相應ズル方眼二邊ニ較量シ其位置ヲ決定ス又諸線ヲ寫サンニハ先ヅ其線ト方眼トノ交點ヲ寫取シ、次々所要ニ從ヒ方眼内部ノ若干點ヲ寫取ス、而シテ一般ノ形狀ヲ原圖ニ参照シ以テ其寫取ヲ全ウスルモノトス。而シテ謄寫ハ道路、鐵道及河川等先ヅ圖ノ大體ヲ決スルニ足ルベキ主要ナルモノヨリ始メ漸次小ナル地物ニ及スヲ要ス。但道路、鐵道等ヲ記號ニ依リ描畫スルニハ伸寫縮寫ノ如何ヲ問ハズ各梯尺ニ應ジ概略之ニ相當スル記號ノ幅ヲ與フル如クス、若シ縮寫圖ニシテ微小ニ過ギ之ヲ描畫スルコト能ハザルモノアルトキハ或ハ之ヲ省略シ或ハ其種類ニ依リテ集團スルモノトス。

其六 斷面圖ノ編成

一、斷面圖ハ地面ト垂直面ノ交會線ヲ現ハスモノニシテ此交會線ニ於ケル地點相互ノ關係位置ヲ明瞭ナラシムルニ用ヒラル、而シテ曲線式圖ハ斷面圖ヲ編成スル最モ適當ナル

二、圖上某二點間ノ直線ニ從ヒテ垂直ニ截斷スルモノヲ直斷面ト謂ヒ道路ノ屈曲ニ從フモノヲ曲斷面ト謂フ、直斷面ハ某方向ニ於ケル展望ノ良否死角ノ有無及掩蔽ノ良否等ヲ研究スルニ用ヒ曲斷面ハ道路、鐵道ノ構築計畫及路上距離ノ測定並傾斜ノ研究等ニ用フ。

三、斷面圖編成ニ際シ水平垂直ノ兩梯尺共ニ等一ナルトキハ之ヲ眞斷面ト謂ヒ、垂直梯尺水平梯尺ヨリモ大ナルトキハ之ヲ過高斷面ト稱シ之ニ反スルトキハ過低斷面ト稱ス、而シテ此終ノ二者ヲ更ニ又二梯尺ノ斷面ト名ヅク過高斷面ハ土地ノ起伏傾斜等微弱ナルトキ之ヲ一層明瞭ニ表ハサントスルニ用ヒ、又過低斷面ハ高低差著シク大ナルトキ單ニ一覽ニ便ナラシムルニ用フ。

曲線式直斷面圖ノ編成

第七十二圖ニ於テXYヲ希望スル方向即チ斷面跡トシ此斷面圖ヲ編成セントスルニハXYナル基線ヲ定メ、次ニ60 70 80等ナル距離ニ應ズル平行線ヲ畫シ、然ル後xy線上ニABCDEF等ニ等シクabc def等ナル距離ヲ量リbc def等ノ各點ヲ決定シ、此各點ヨリ垂線ヲ立テ之ト相應標高ナル水平線トノ交點b' c' d' e' f'等ヲ決定ス、茲ニ於テ起伏ノ狀態ニ從ミ曲線ヲ以テ此各交點ヲ連絡スルトキハ即チ求ムル所ノ斷面圖ヲ得ルナリ、若シ方眼

紙ヲ用レバ簡單ニ編成スルコトヲ得。

曲線式圖曲斷面圖ノ編成

曲斷面圖ノ編成法ハ直斷面圖編成ノ要領ニ準ズ。

即チ路上距離測定ノ方法ニ依リ展開セル斷面跡XY並距離ニ應ズル數多ノ平行線ヲ畫シxy線上ニ於テ各水平曲線トノ交點abcd等及其他必要ナルb' c' d'等ヲ定メ此各點ヨリ垂線ヲ立テ其線上ニ相應スル標高點ヲ求メ曲線ヲ以テ此等諸點ヲ連絡スルモノトス。

(第七十三圖)

第七十二圖 曲線式直斷面圖ノ編成

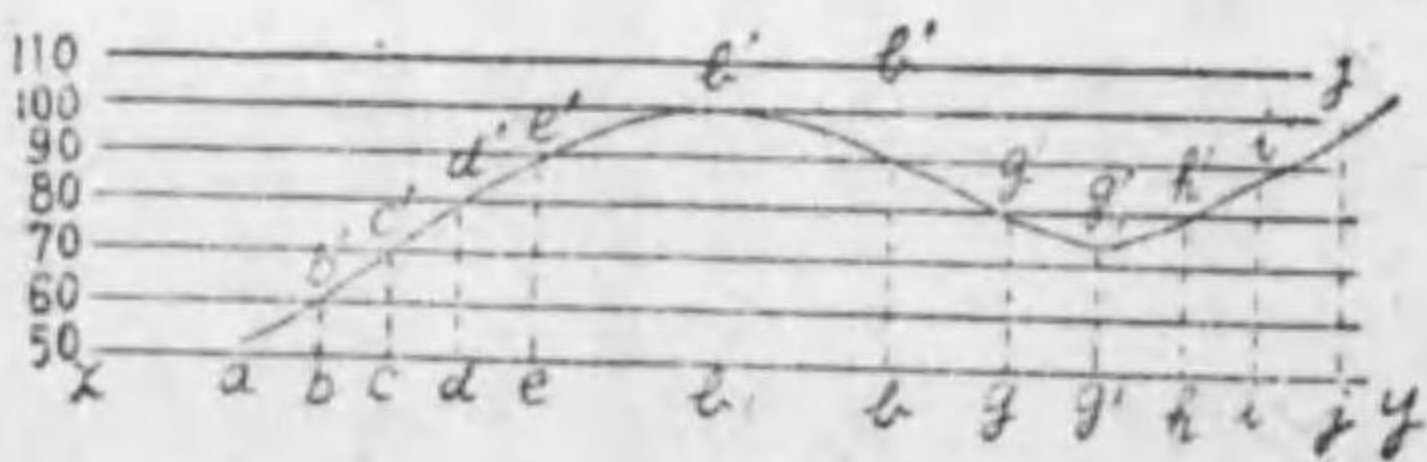
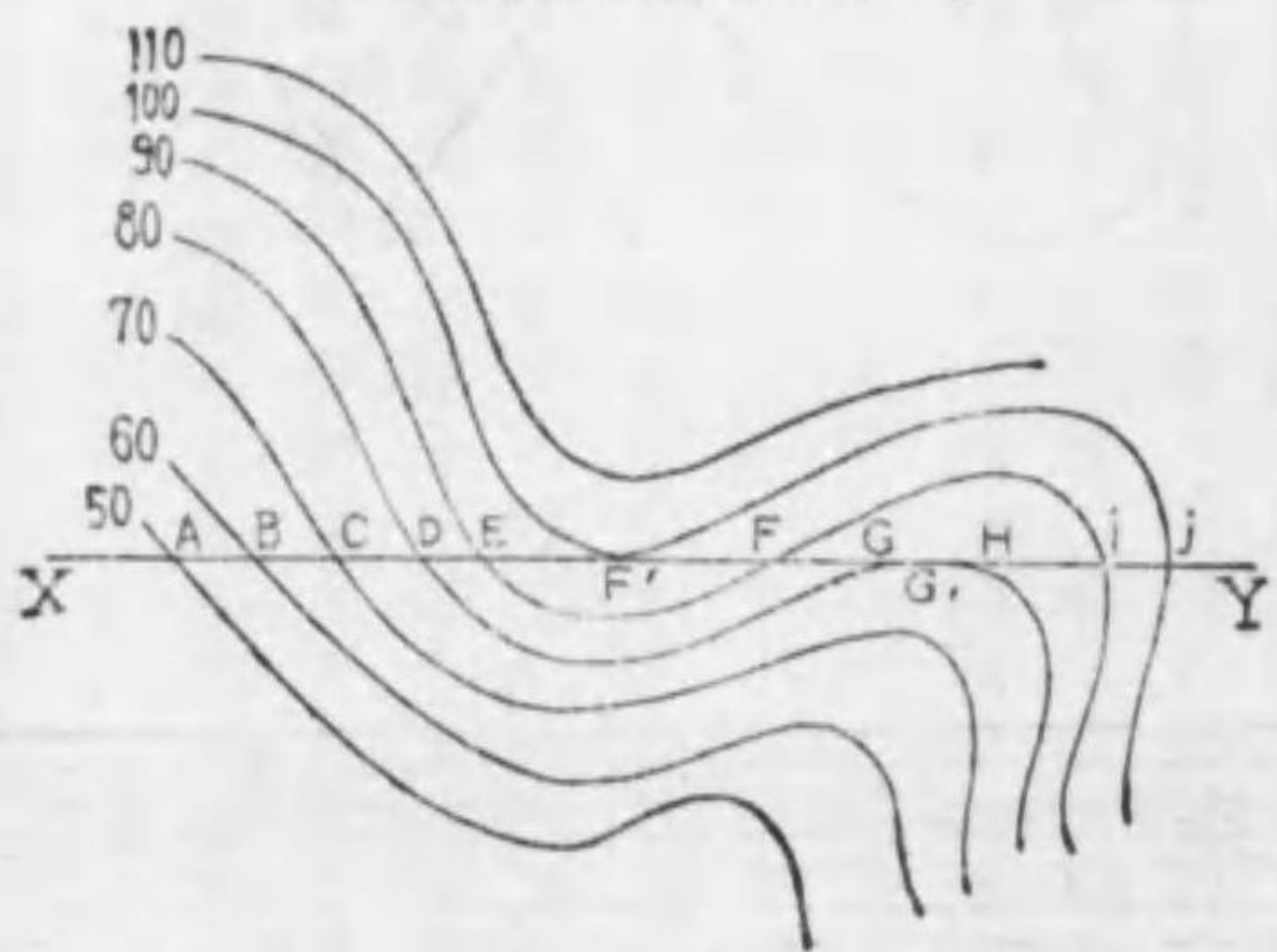
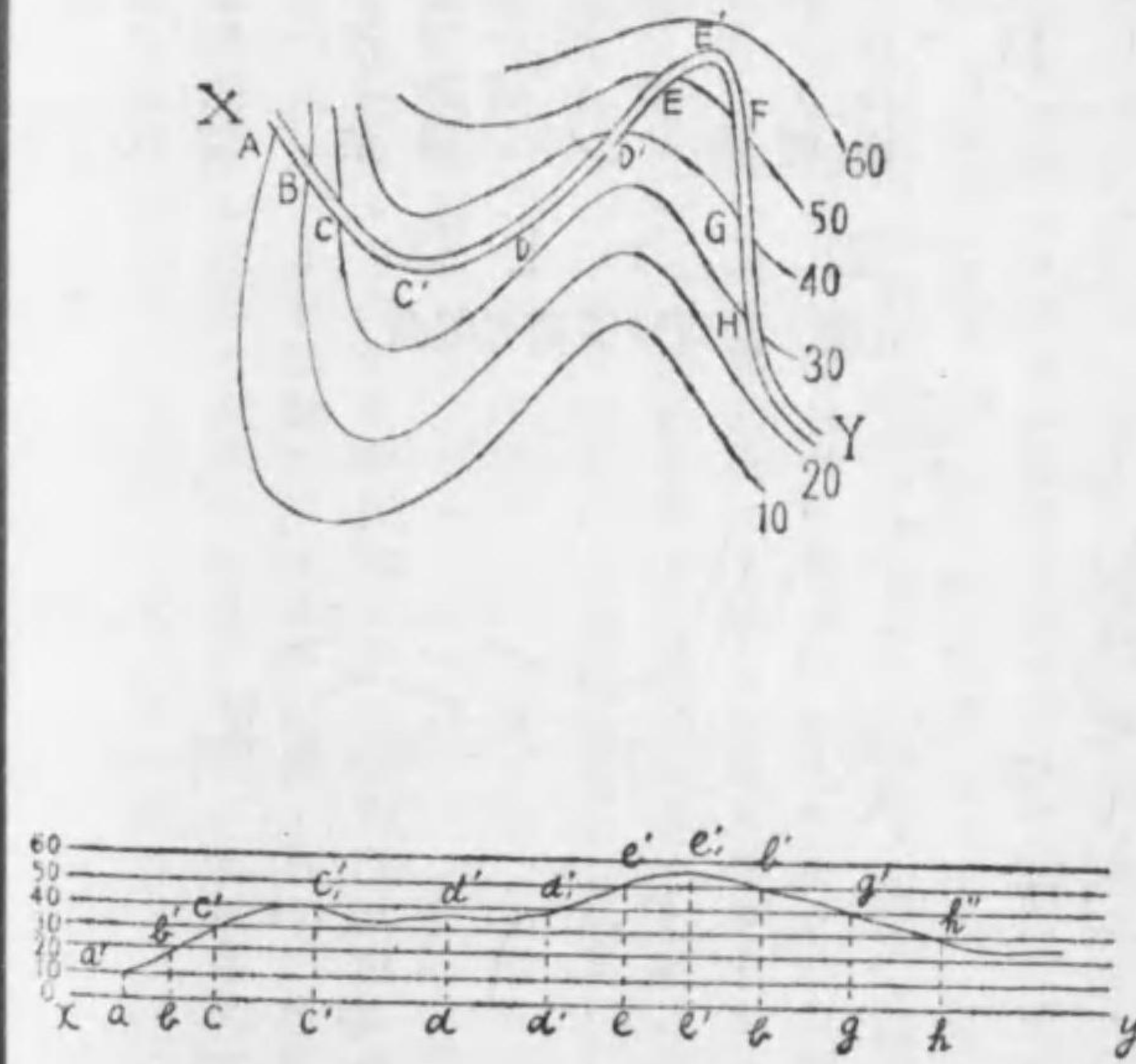


圖 三 十 七 第

成 編 ノ 圖 曲 斷 曲 圖 式 線 曲



測 圖

—(三六〇)—

其 七 要 圖 ノ 調 製 (附 表 第 十 七)


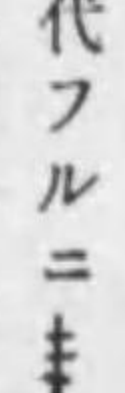
一、地圖ニ依リ要圖ヲ調製スルニハ其目的及製圖ノ爲ニ費シ得ル時間ノ多少ニ從ヒ必要ナル地貌地物ヲ明示シ得ルヲ度トシテ梯尺及描畫ノ精疎ヲ決定スルモノトス。

二、要圖調製ノ爲ニハ方眼紙、通信紙時トシテ手簿ノ紙片等ヲ用ヒ要圖ノ目的ニ應ジ必要ナル地貌、地物ヲ描示スルヲ以テ足レリトス。例ヘバ陣地占領要圖ノ如キモノニ在リテハ水平曲線ハ陣地附近ニ在リテハ稍々精確ナルヲ要スルモ其他ノ部分ニ在リテハ之ヲ省略スルモ妨ゲナキガ如ク、又村落ハ宿營要圖ノ如キモノニ在リテハ稍々精密ニ圖示スルヲ要スルモ然ラザルトキハ單ニ其大小、形狀ノ概要ヲ圖示スルニ止ムルガ如シ、而シテ通常鉛筆ヲ以テ明瞭ニ描畫ヲ完成シ光明不十分ノ時ニ於テモ讀解ヲ容易ナラシムルヲ要ス。若シ特ニ時機切迫シ描畫ノ時間僅少ナル場合ニ在リテハ必ズシモ梯尺ニ據ルヲ要セズ、距離及尺度ノ如キハ數字ヲ以テ註記スルヲ簡明トスルコトアリ、例ヘバ河流ノ某點ニ註記シテ幅何米ト書シ、又兩村落間ノ距離ヲ示スニ兩者間ヲ線或ハ片括弧ニテ連絡シ其側ニ何軒ト記スルガ如シ。

三、描畫ヲ行フニハ先ヅ原圖ニ依リ道路、鐵道、河川ノ屈曲部、交叉點或ハ高地ノ巔頂、地性線又ハ村落等ノ如キ要點ニ就キ彼我ノ距離及方向ヲ目測シテ之ヲ圖紙上ニ概定シ然

測 圖

—(三六一)—

ル後原圖ヲ目撃シツツ少許ノ屈曲ニ介意スルコトナク、一般ノ狀態ニ鑑ミテ之ガ概要ノ似形ヲ得ル如ク其關係諸點ヲ連絡スルヲ要ス、此際地形描畫ニ用フル符號ハ成ルベク原圖ノ圖式ニ依ルチ可トスルモ繁雜ノ符號例ヘバ鐵道ノ如キ  ニ代フルニ  ノ如キモノヲ以テシ水流池湖ハ淡キ藍色ヲ以テ畫クヲ可トス、凡テ要圖ニハ適當ノ位置ヲ選ビ矢標ヲ以テ方位ヲ示シ且梯尺、題號、署名、日時要スレバ調製者ノ所在地ヲ明記シ又規定以外ノ符號ヲ用ヒタルトキハ必ず其註解ヲ記載スベキモノトス。

第四節 略測圖

其 一 要 則

- 一、略測圖ハ簡易ナル測量器具即チ携帶圖板、圖板羅針及複粉尺ヲ用ヒ助手ヲ使用スルコトナク距離ハ專ラ步測、目測ニ依リ最モ迅速ニ一局部ヲ測圖スルモノナリ。
- 二、測圖ノ精粗ハ時機ト目的トニ依リ決定スルモノニシテ地貌ノ大體ト重要ナル地物ヲ現示スルニ止メ其本然ノ關係ヲ保持シ錯雜不明ニ陥ルコトナク且墨痕明瞭ナルヲ緊要トス、故ニ測圖一般ノ要領ヲ會得シ且目測及描畫ニ熟スルコト肝要ナリ、殊ニ眼目高及腕長ノ利用ニ習熟スルトキハ水準差若ハ距離ノ測定ヲ正確ナラシムルコトヲ得。
- 三、圖紙(方眼紙ヲ用フルチ便トス)ハ携帶圖板ニ展貼シ羅針ハ圖紙ノ上方ニシテ右若

ハ左側ニ固定シ復歩ノ梯尺ハ良質ノ紙ヲ以テ作り且複粉尺ノ一側ニ貼付シ置クヲ可トス。

四、眼目高ヲ利用シ第七十四圖ノ如キ要領ニ依リ水準差ヲ測定スルコトヲ得、即チ作業手ハ右腕ヲ前方ニ伸バシ其拇指頭ト眼目トヲ水平ナラシメテ視視ヲ行フモノトスハ目

圖 四 十 七 第

量測準水接直ルセ用利ヲ高目眼

測 圖

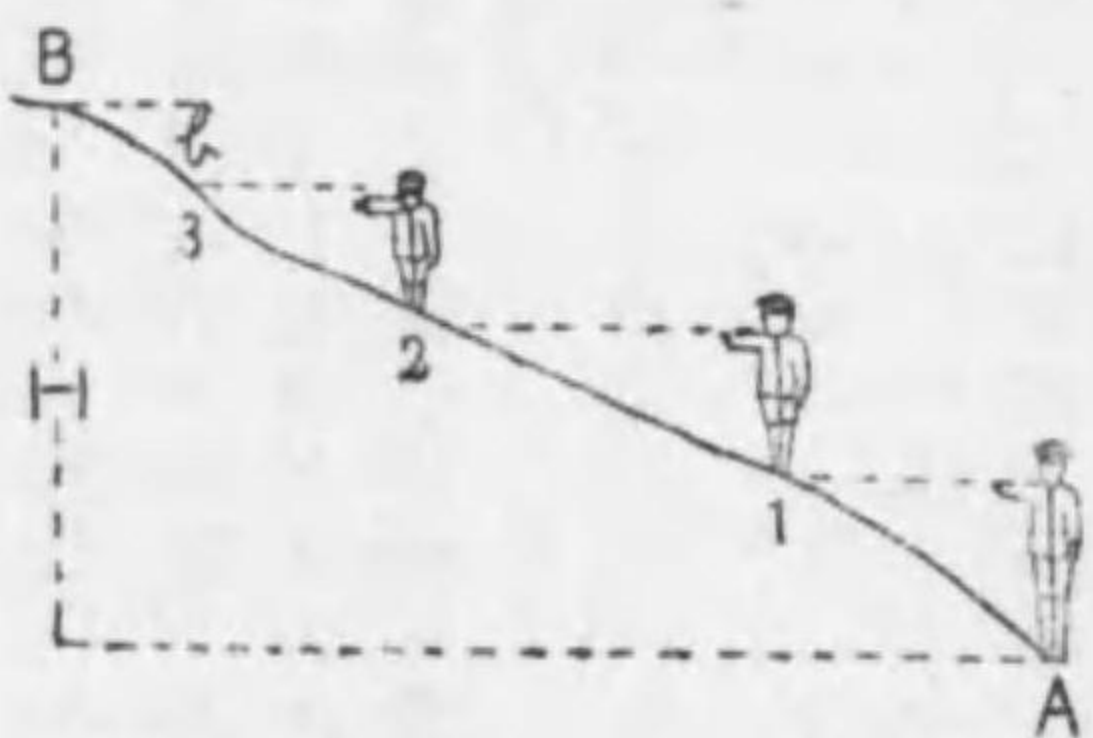
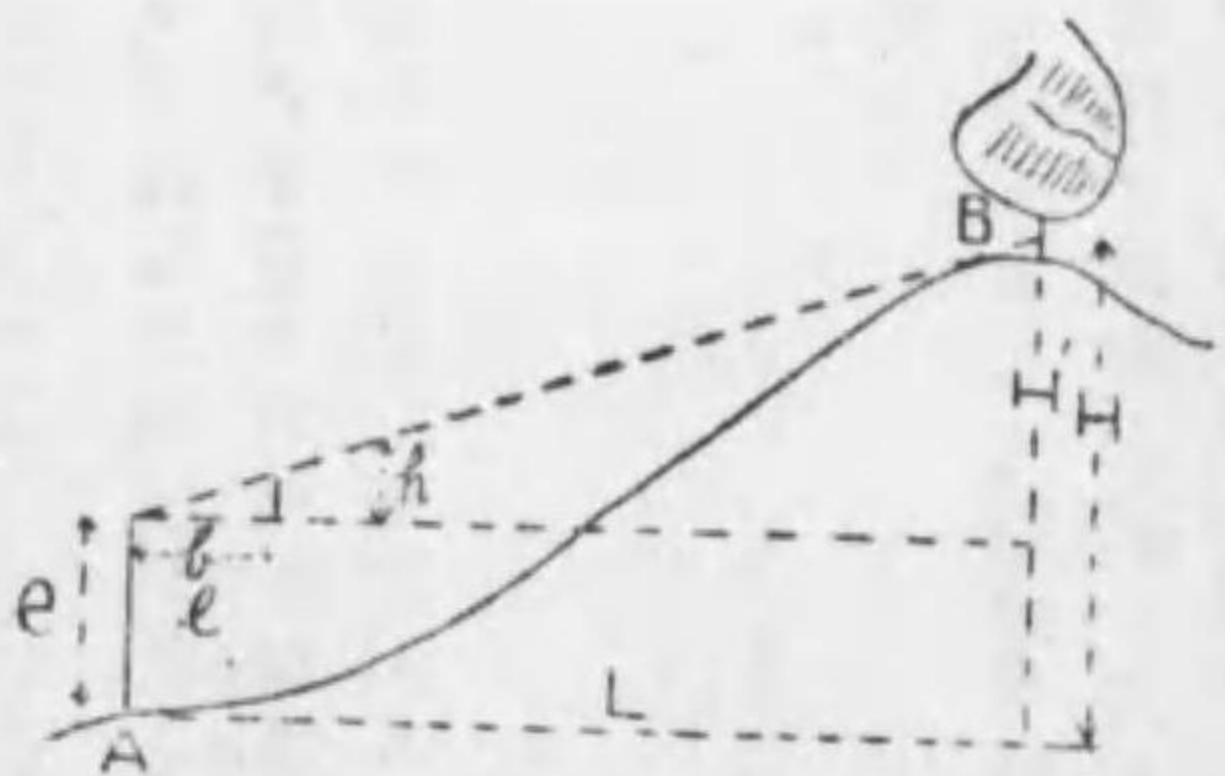


圖 五 十 七 第

量測準水接間ルセ用利ヲ長腕

—(三六三)—



測トス。

五、第七十五圖ニ於テA Bノ水準差Hハ其水平距離Lヲ知レバ腕長ヲ利用シテ之ヲ算出スルコトヲ得、之ガ爲測站Aニ位置シ右手ニ腕長bノ百分數ノ分畫ヲ刻セル鉛筆等ヲ垂直ニ保チ其零分畫ヲ眼目ト水平ナラシメ測點Bヲ視視シ分畫トヲ得タルモノトス、然ルトキ水準差Hハ次式ニ依リ算定スルヲ得。

$$H = H_1 + e = \frac{Lb}{100} + e$$

但シEハ眼目高トス。

六、眼目高及腕長ヲ利用スルニハ左ノ要件ニ習熟シアルヲ要ス。

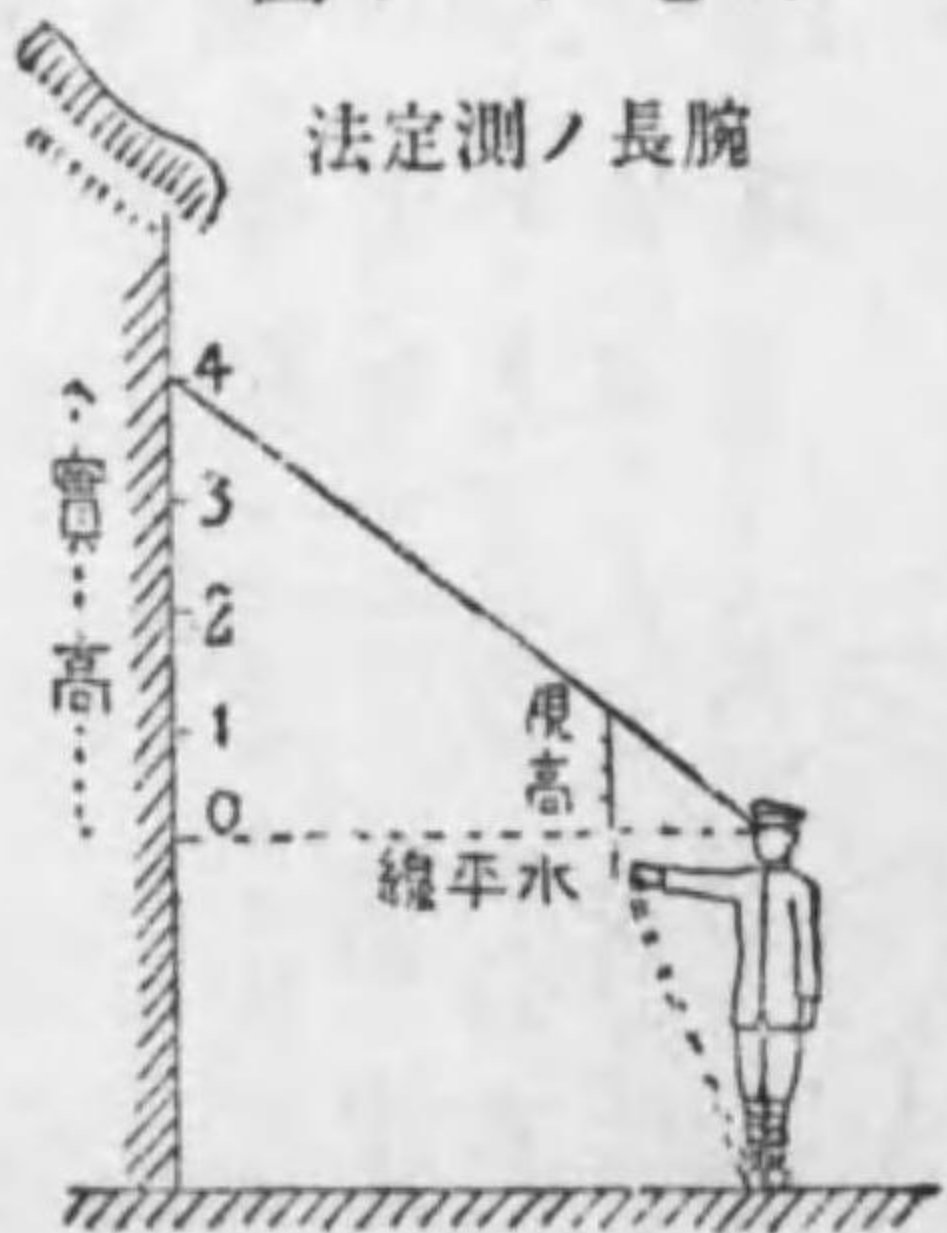
- 1、眼目ヨリ拇指頭ニ通ズル視線ハ水平ナルコト、之ヲ決定スルニハ水平地ニ於テ垂直物體ニ眼目高ヲ標シ其後方若干距離ニ直立シ兩眼ヲ閉チ右腕ヲ伸シ右眼ノ高サニ拇指ノ頭ヲ導キ次テ眼目ヲ開クトキ若此二點水平ナレバ指頭ト標點トハ一致スルモノトス、故ニ此操作ヲ復行シ以テ右ノ位置ヲ定ム若此際正シキ姿勢ニ於ケル腕ト足トノ間ノ長サニ相當スル細桿ヲ使用セバ一層確實ニ腕ノ位置ヲ求ムルヲ得。(第七十六圖)
- 2、腕長即チ眼目ト拇指トノ間隔ハ常ニ一定ナルコト。

之ヲ決定スルニハ先ヅ腕長ヲ測定スルヲ要ス、之ガ爲壁面ニ眼目高ヲ標示シ其上方ニ

一米間隔ナル四線ヲ畫キ覆粉尺ヲ取り四種ノ所ニ拇指ノ頭ヲ置キ而シテ四種ノ視高ヲシテ四米ノ實高ニ應ゼシムルマテ壁ヨリ漸次距離ス、然ルトキハ腕長ハ壁ニ至ル距離ノ $\frac{1}{100}$ ニ等シ(第七十六圖)尙視高及實高ヲ變ジテ數多ノ實驗ヲ行ヒ以テ其中數ヲ取り自己ノ腕長ヲ測定スルト共ニ終始之ヲ變ゼザル如ク練習スベキモノトス。

此際他人ヲシテ自己腕長ヲ測定セシムルヲ得バ頗ル簡單ナリトス。

第七十六圖



其二 目算測圖 (附表第十八)

- 一、目算測圖ハ簡單迅速ニ一地域ノ地形圖ヲ調製スル爲ニ用フル測圖法ニシテ、地形ノ成立及變化ヲ觀察シテ必要ノ程度ヲ判斷シ又梯尺ヲ顧慮シテ重要ナル細部ハ精密ニ其他ハ概測シ或ハ迅速ニ作業シ時機ニ適合セシムルヲ要ス。
- 二、目算測圖ハ時間ヲ節約スル爲測量スベキ土地ノ一地域毎ニ測圖ヲ完了シ一度經過セ

シ土地ハ再ビ踏マザル如ク作業スルコト特ニ緊要ナリ。

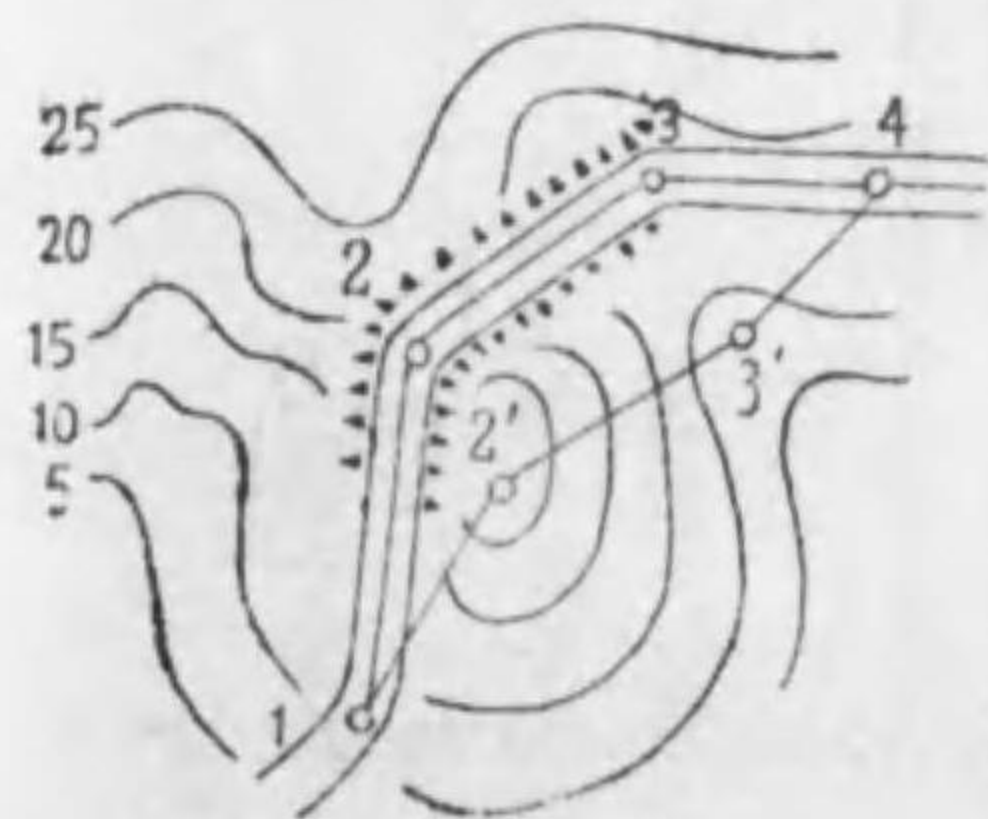
三、準備

1、目算測圖ヲ行フニハ測圖スマキ地域ヲ豫メ踏査シ、又ハ高所ニ登リテ地形ヲ觀察シ先ヅ基線ヲ決定ス。

2、基線ハ測量區域中最モ精密ニ現圖セントスル地區ニ選定スルヲ可トスルモ、歩測困難ナルカ又ハ基線上ノ測站ヨリ多數ノ目標點ヲ視視シ得ザルトキハ兩要求ニ適應スル地區ニ選定セザル可ラズ、例ヘバ前述ノ要求ニ適スル基線ヲ測量地ノ中央ニアル道路上ニ選定シ得バ可ナルモ、第七十七圖ノ如キ地形ニ在リテハ道路上ニ選定スルトキハ目標ヲ視視シ得ザルヲ以テ基線ハ1、2、3、4ニ選定セズシテ1、2、3、4トスルガ如シ。

3、基線ノ全長ハ通常測圖地長邊ノ約二分の一以上ナルヲ可トス、又各邊ハ成ルベク銳角ニ屈折セズ歩測容易、傾斜緩徐ニシテ其邊長ハ概ネ百乃至二百米ヲ可トシ短キニ失セザルヲ要ス。

第七十七圖 基線ノ選定



四、實施

1、基線及第一次目標點ノ測量

1、基線ヲ測定スルニハ先ヅ圖紙ノ方位ヲ定メ圖板羅針ニ依リ其羅針子午線ヲ圖上ニ描畫シ圖紙上適當ノ位置ニ第一點ヲ標示ス、次ニ第一點ヨリ出行シ距離ヲ步測シツツ第二點ニ至リ回轉シテ第一點ニ正對シ圖板ヲ標定ス然ル後複粉尺又ハ鉛筆ノ線ヲ其方向線ニ一致セシメ之ニ沿ヒ一線ヲ畫キ步測セル距離ヲ量取シテ圖上ニ基点ノ第一點ヲ標シ(之ガ爲複歩ノ梯尺ヲ利用スルヲ便トス)次ニ目測又ハ腕長ヲ利用シテ水準差ヲ測定シ以テ其標高ヲ決定ス逐次斯クノ如クシテ基線全部ヲ測量スルモノトス。

2、基線ノ測量ト同時ニ豫定セル測站ニ於テ著明ナル諸目標點ヲ視視シ二線ノ前方交會法ニ依リ之ヲ測定シ尙其隣附近ノ碎部ヲ描畫ス。

3、測站ニ於テ圖紙ノ方位ヲ定メ方向線ノ描畫法ノ要領左ノ如シ。

- (イ) 圖板ハ圖板羅針ニ依リ各測站ニ於テ常ニ同一ノ方向ヲ取ラシムルコト。
- (ロ) 左手ニテ圖板ヲ水平ニ支ヘ右手ニテ複粉尺ノ右線ノ一端ヲ圖上ノ既知點ニ沿ハシメ、其他端ヲシテ略々地上ノ視點ニ向ハシム。

- (ハ) 鉛筆ノ尖端(或ハ針)ヲ圖上ノ既知點ニ直立シ右手ノ拇指ト中指トノ指尖ニテ輕ク挾ミ食指ヲ其頂ニ當ツ。
- (ニ) 左眼ヲ閉テ右眼ヲ鉛筆ノ尖端ニ注ギ鉛筆ハ粉尺ノ前縁ヲ蔽ヒ同時ニ地上ノ視點ヲ掩フガ如ク徐力ニ粉尺ノ他端ヲ移動ス。
- (ホ) 羅針方位ノ正シキヲ認メ鉛筆ニテ粉尺ノ縁ニ沿ヒテ輕ク一線ヲ畫ス。
- (ヘ) 羅針ハ鐵氣ニ近ヅクレバ其指示不正ナルガ故ニ鐵道或ハ鐵橋等ノ附近ニ在リテハ羅針ニ依ル作業ナサズ、點ノ標定ニ依ルヲ可トス。

I、碎部測量

- 1、基線上ノ測量終了セバ基線ト第一次目標點トノ中間地區ノ碎部ヲ測量シ、次ニ目標點外側ノ碎部ニ及ボスモノナリ。
- 2、碎部測量ニ當リテハ道路ノ小屈曲、小谷ノ彎入竝土地ノ小起伏等ノ細部ニ眩惑セラル、コトナク地形ノ成立ニ考ヘ其輕重要否ヲ取捨判別シ一地區毎ニ道路、鐵道、河川等ノ著シキ屈折點、村落、森林等ノ尖端、地性線上ノ主要點 (展望良好ナル高地ハ特ニ可ナリ)ヲ決定シ此等ヲ基準トシテ先ヅ一般ノ地形ヲ圖示シ次ニ小局部ニ及シ以テ全體ノ似形ヲ描畫スルモノトス。

一般ニ爾後ノ作業ハ一圖根點ヲ決定スル毎ニ其附近ノ碎部測量ヲ完成シ 逐次他ノ圖根點ニ移リ漸次測圖ヲ擴張ス。

- 3、圖ハ通常鉛筆ヲ用ヒ鮮明正確ニ之ヲ描畫スルヲ要ス又方位ノ指示ハ矢標ニ依リ其尖端ニNノ字ヲ記シ梯尺ハ適宜ノ所ニ1Xト書ス。

其三 路上測圖(附表第十九)

- 一、路上測圖ハ道路及其附近ノ地形ヲ主トシテ道路上ヨリ測量スルモノニシテ、現圖スベキ道路兩側ノ幅員、測圖ノ方法並精粗ハ測圖ノ目的及狀況ニ依リ定ムルモノトス、故ニ急速ヲ要スル場合ニ在リテハ馬上又ハ車上ニ於テ施行スルコトアリ。
- 二、路上測圖ヲ施行スルニハ先ヅ測圖スベキ道路ノ方向ヲ顧慮シテ出行點ヲ圖紙ノ上端ニ近ク標記シ方位ヲ決定シテ圖紙上ニ描示シ、該點ニ於テ其附近ノ碎部ノ描畫及註記ヲ了リタル後出行點ヲ發シ爾後目算測圖ニ於ケル基線測量ノ要領ニ準シテ測量シツツ到着點ニ達スルモノナリ、而シテ測量ノ爲、停止スベキ地點ハ道路ノ小屈曲等ニ介意セズ、主トシテ交叉點、大屈折點等ニシテ地貌地物ノ描畫ニ適當ナル地點ヲ選ブヲ要ス、又道路左右ノ碎部ハ目測シ或ハ腕長ヲ適用シ或ハ二方向ニ依ル交會法ニ依リ主要ナル點ヲ決定シ其全體ノ似形ヲ描畫スルモノトス。

行進路ノ方向ハ成ルベク圖紙ノ中央ニ在ラシメ以テ調査事項等ノ註記ニ便セシムルヲ要ス、故ニ道路屈曲ノ度甚シクシテ圖紙外ニ超出スル處アルトキハ更ニ圖紙上ニ新出行點ヲ定メ圖上ノ羅針子午線モ亦之ニ應ジ新ニ其方向ヲ定メ以テ進路ヲシテ成ルベク圖紙ノ中央ニ在ラシムルヲ可トス、然ルトキハ符號ヲ附シ其接續部ヲ標示スルモノトス。

三、測圖ヲ施行スルト同時ニ其目的ニ應ジ緊要ナル道路、河川並道路上及其兩側ノ地貌地物ニ關シ必要ナル事項ヲ調査シ圖上ニ註記シ要スレバ寫景圖或ハ断面圖ヲ附ス。

四、測圖完成後ノ記載事項ハ目算測圖ニ準ズ。

第五節 寫景圖(附表第二十、第二十一)

要 領

- 一、寫景圖ハ一定ノ位置ヨリ視界内ノ地形ヲ觀望シ其眼目ニ映シタル實景ヲ圖紙上ニ描寫スルモノナリ。
- 二、寫景圖ノ精粗ハ狀況ニ應ジ差異アリト雖、美術畫ノ如ク技巧ヲ要セズ、専ラ戰術上價値アル地貌、地物ノ形態並其關係位置ヲ現示シ軍事上ノ用途ニ供スル如ク之ヲ定ムルモノトス故ニ主要ナラザル地物ハ之ヲ省略シ軍事上必要ナルモノニシテ圖示シ得ザルモノハ註記、記號ヲ用ヒテ其缺ヲ補フ等概ネ要圖調製ノ要領ニ從ヒ簡單明瞭ニ描寫スルヲ要ス。

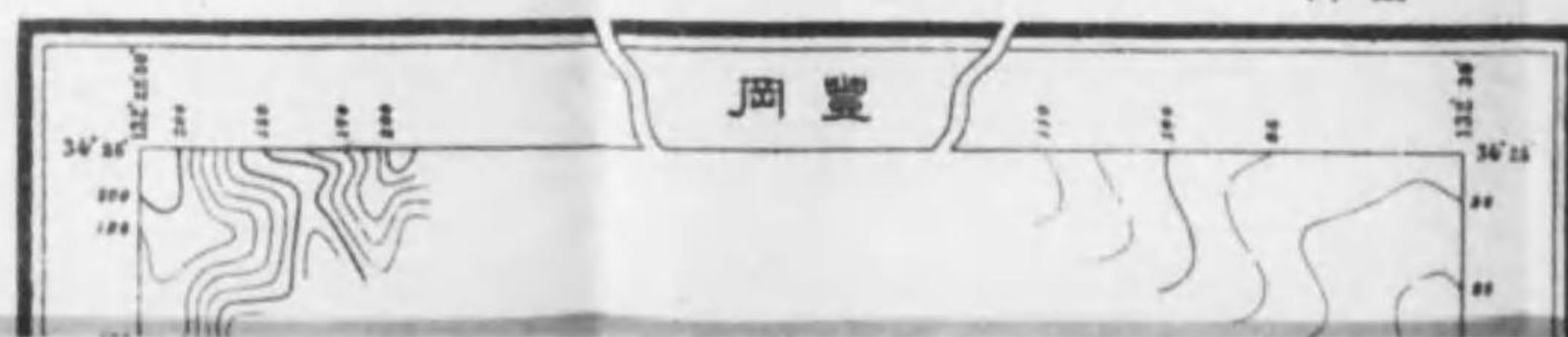
例圖圖一分千五万二



廣島

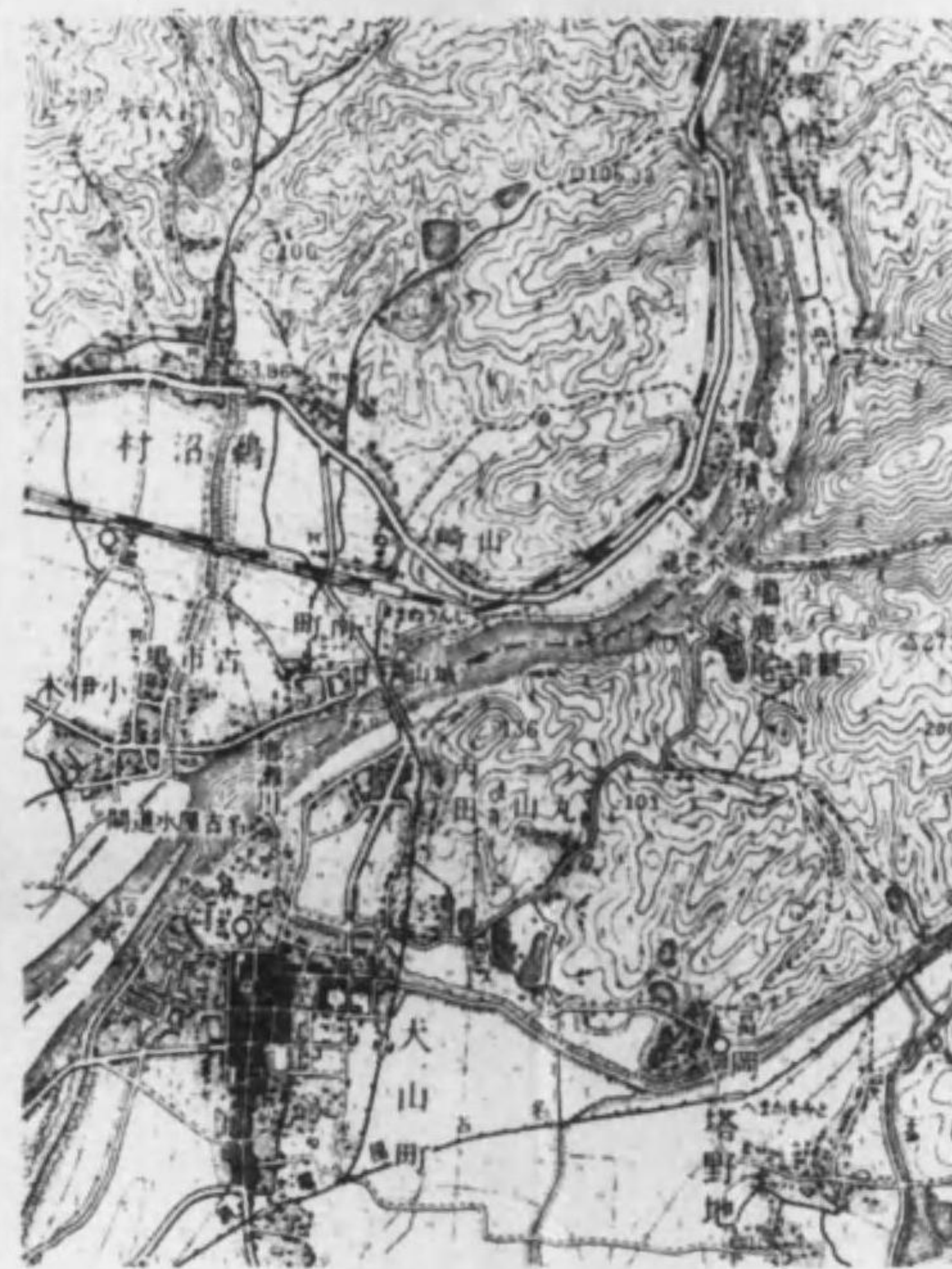
飾整

備考
發行地
大正何年



二万五千
名古屋

例圖圖一分万五



線曲平水

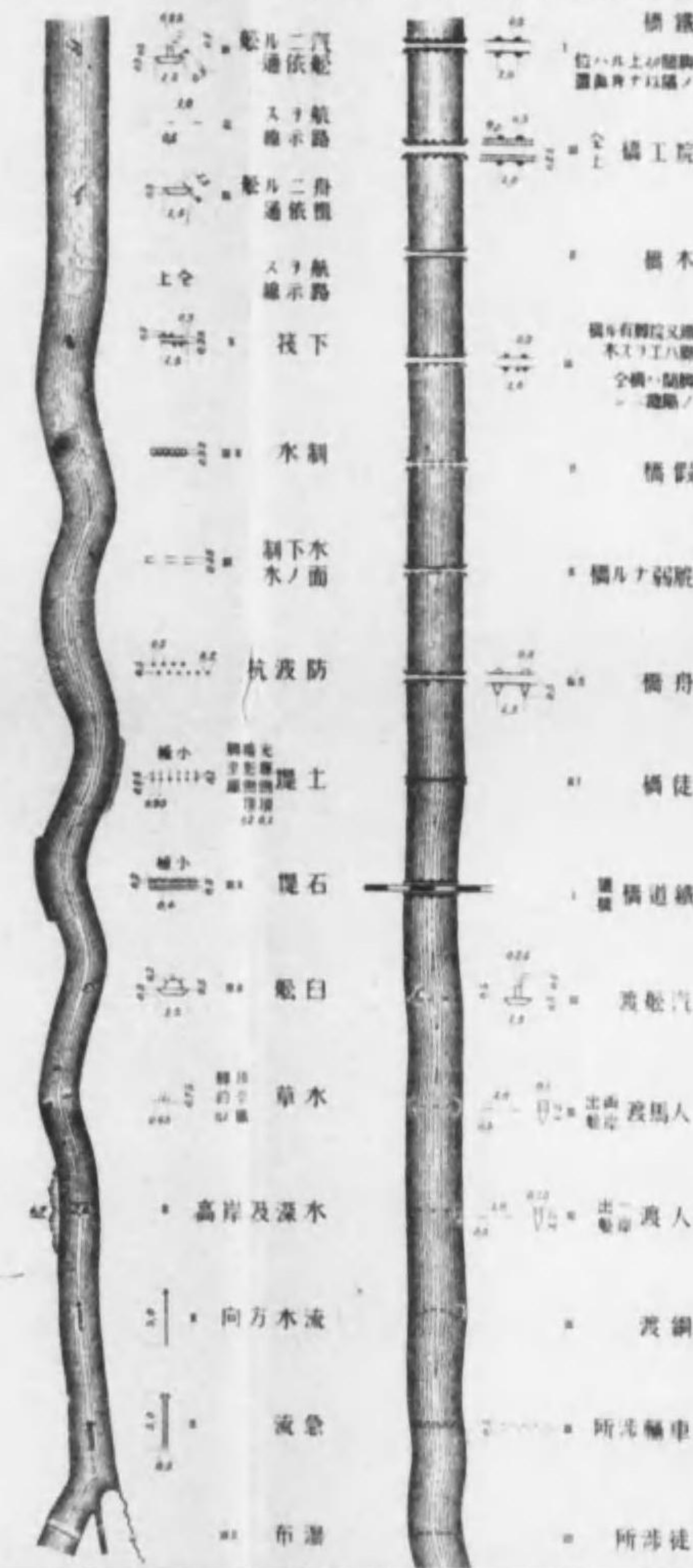


一分万	一分千五	一分万五	水	水平曲線	水	水平曲線
米五二	米〇五	米〇一	線曲計	線曲計	線曲計	線曲計
米五〇	米〇〇	米〇二	線曲首	線曲首	線曲首	線曲首
米五〇	米〇〇	米〇二	線曲間	線曲間	線曲間	線曲間
米五〇	米〇〇	米〇二	線曲助	線曲助	線曲助	線曲助

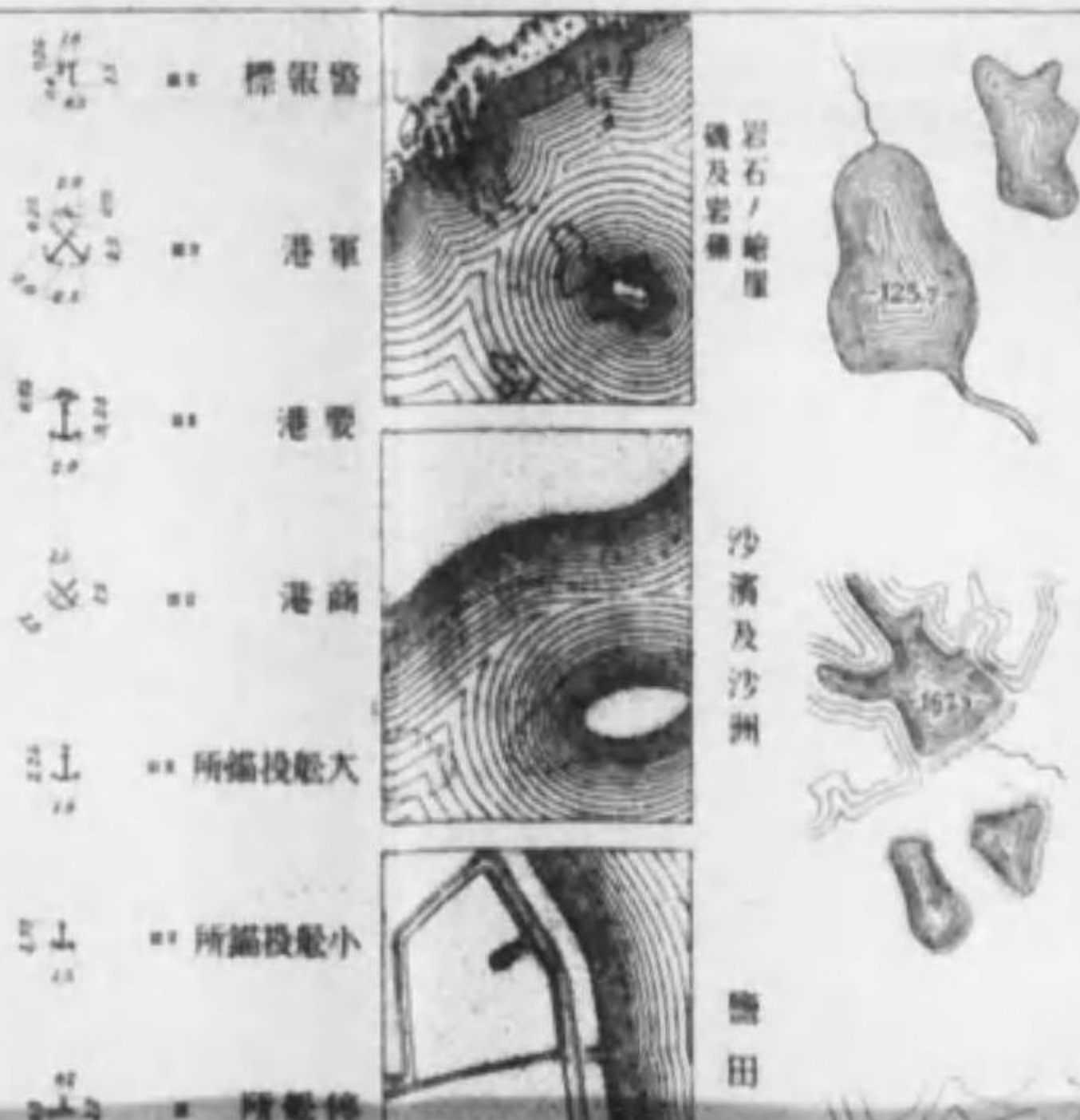
例記註



體物ルス屬ニ川河



體物ルス屬ニ之及部海



樹林	竹林	竹林	竹林
樹林	竹林	竹林	竹林
樹林	竹林	竹林	竹林
樹林	竹林	竹林	竹林

川河



地形變

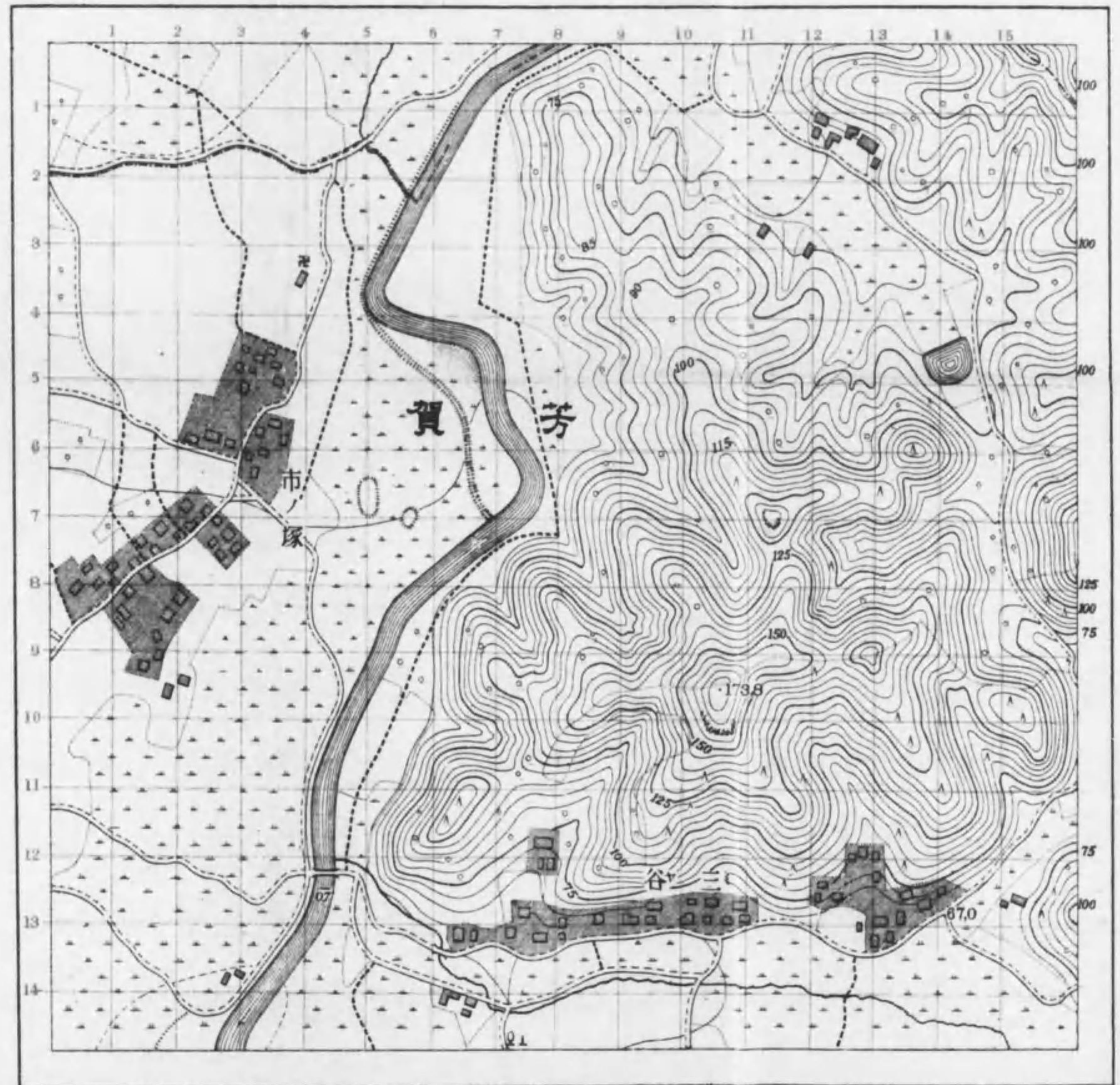


水諸

體物ルス屬ニ之及渠溝



圖寫伸



尺梯之一分萬一

米五離距等

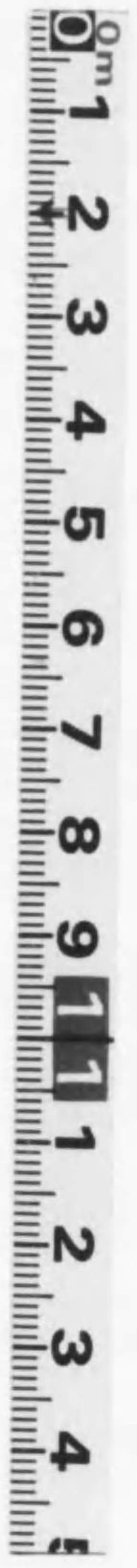


圖原

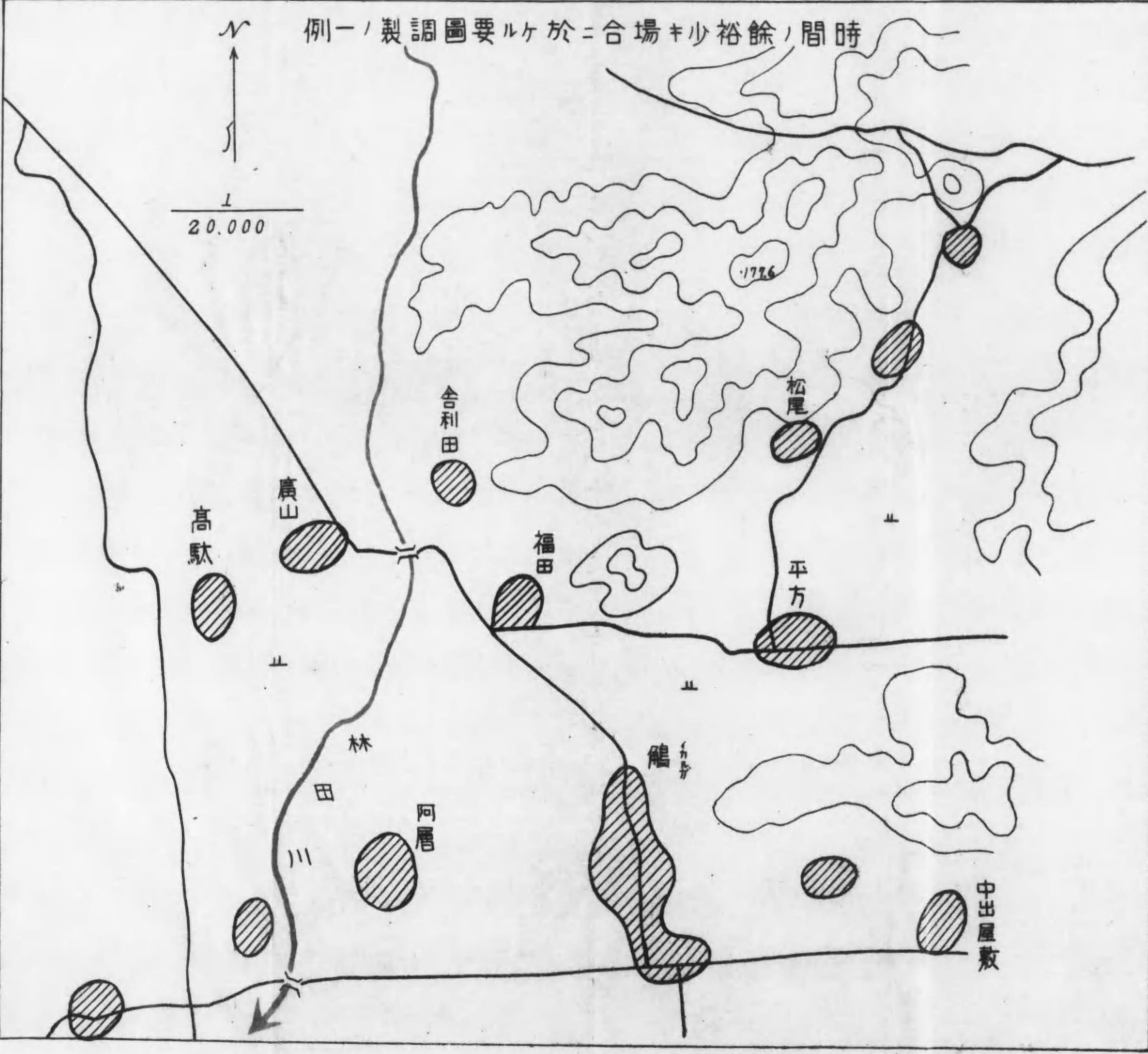


一分千五萬二

米十離距等

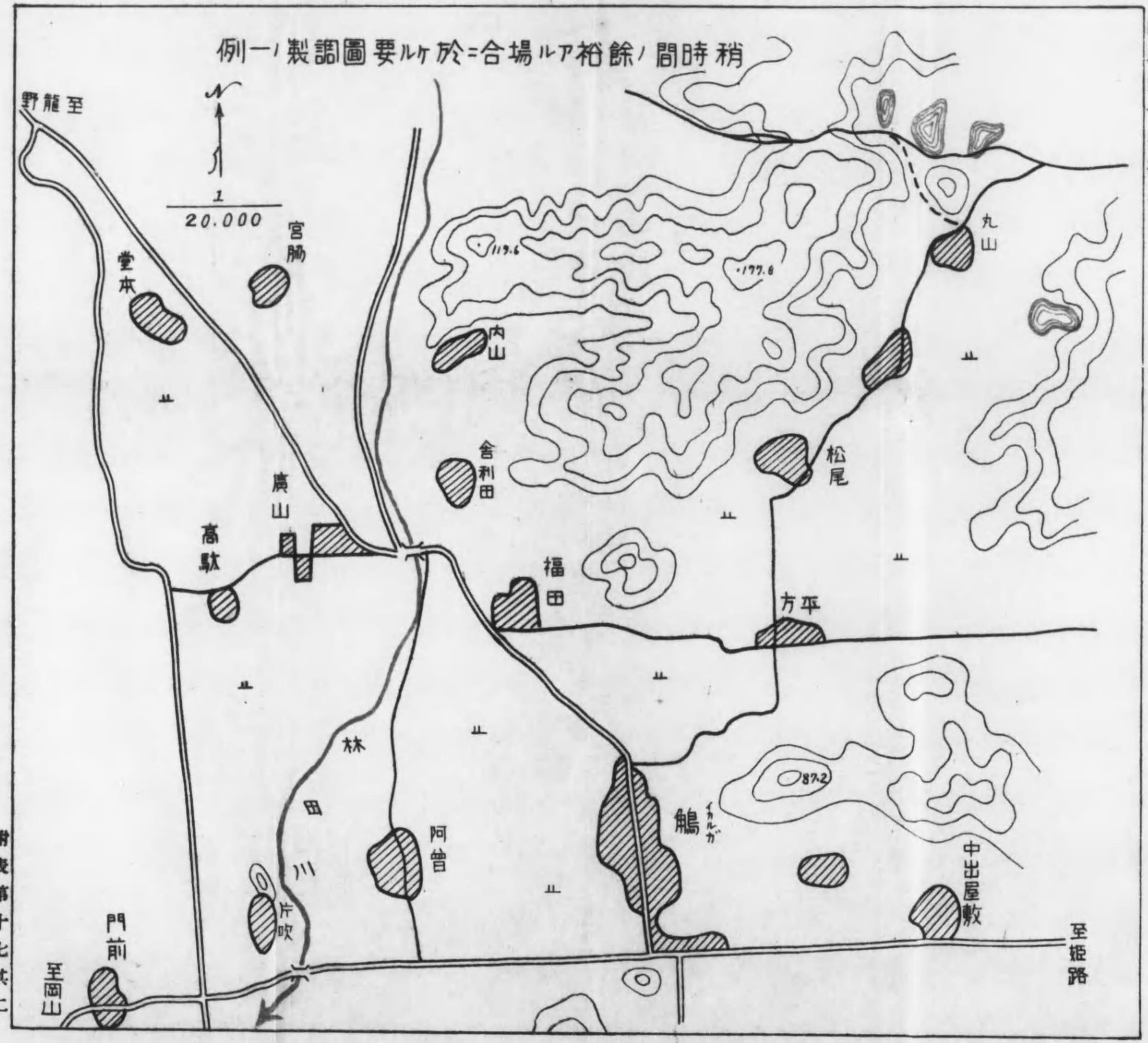


附表第十七其一

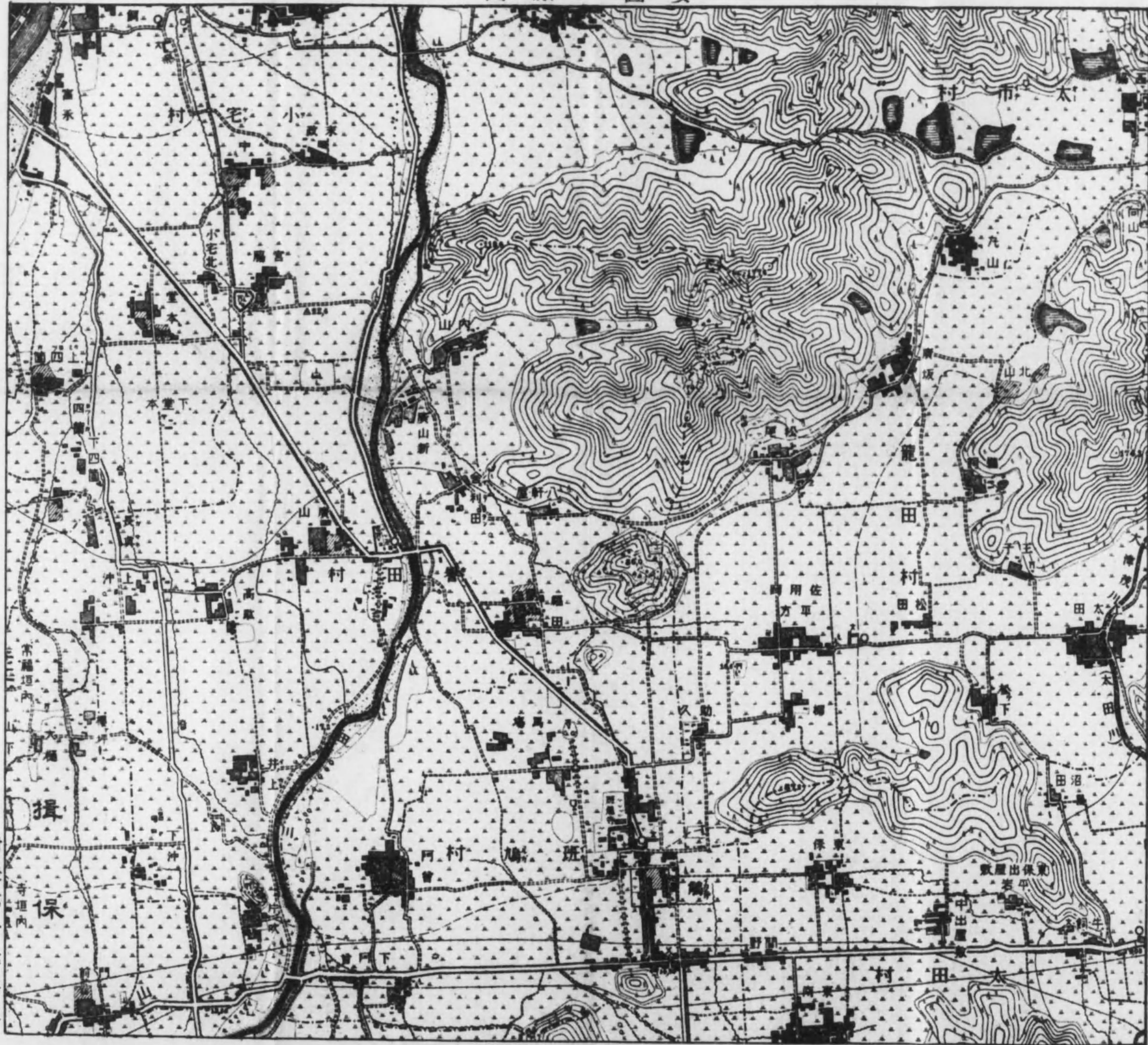


附表第十七其一

例一、製調圖要ルケ於=合場ルア裕餘ノ間時稍



圖原ノ圖要

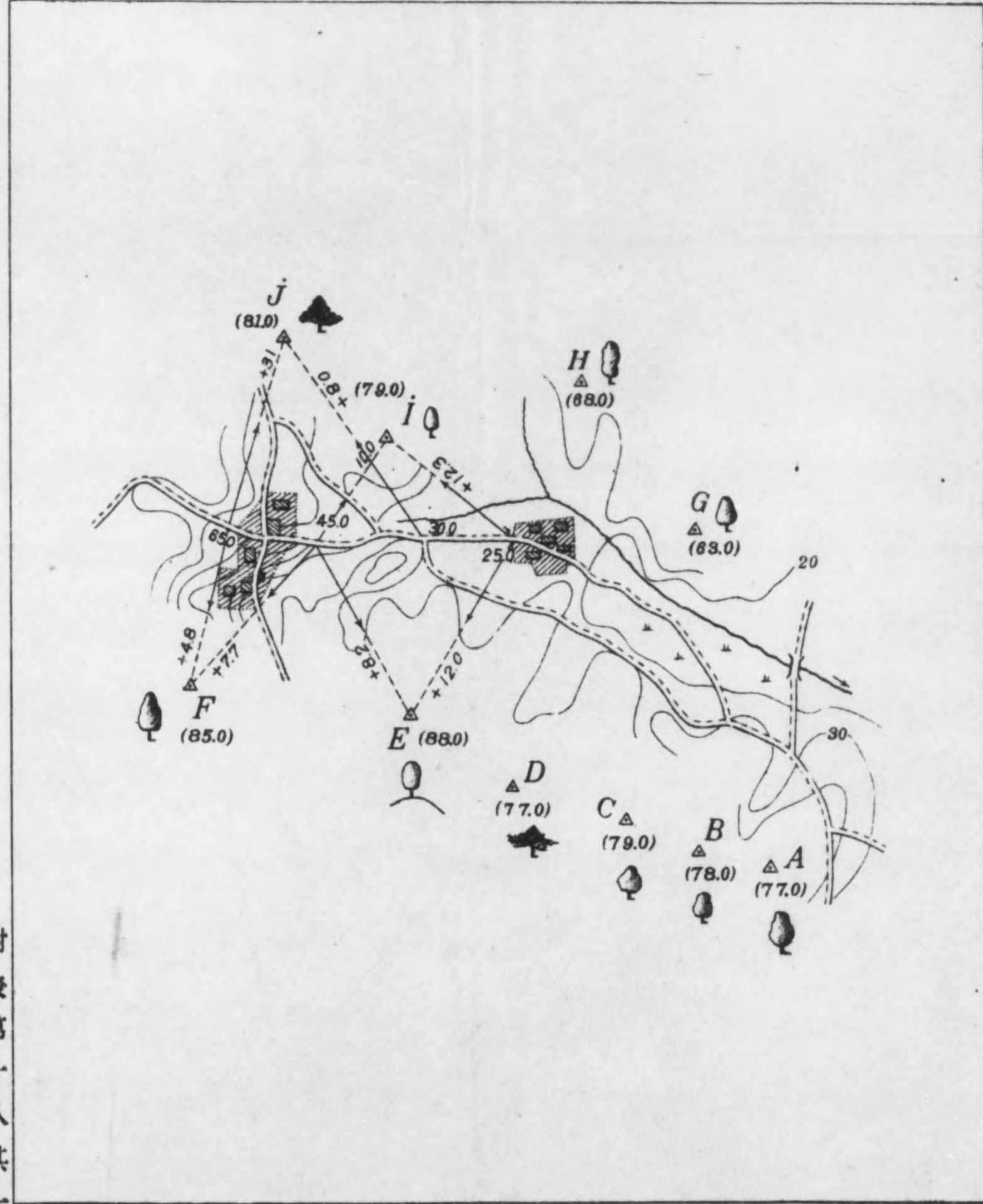


附表第十七其三

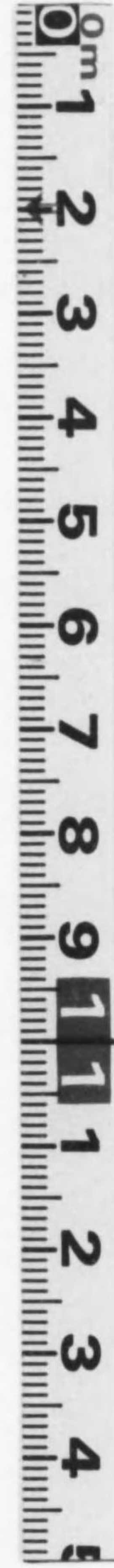
附表第十七其三

(量測線基) 圖 測 算 目

附表第十八其一

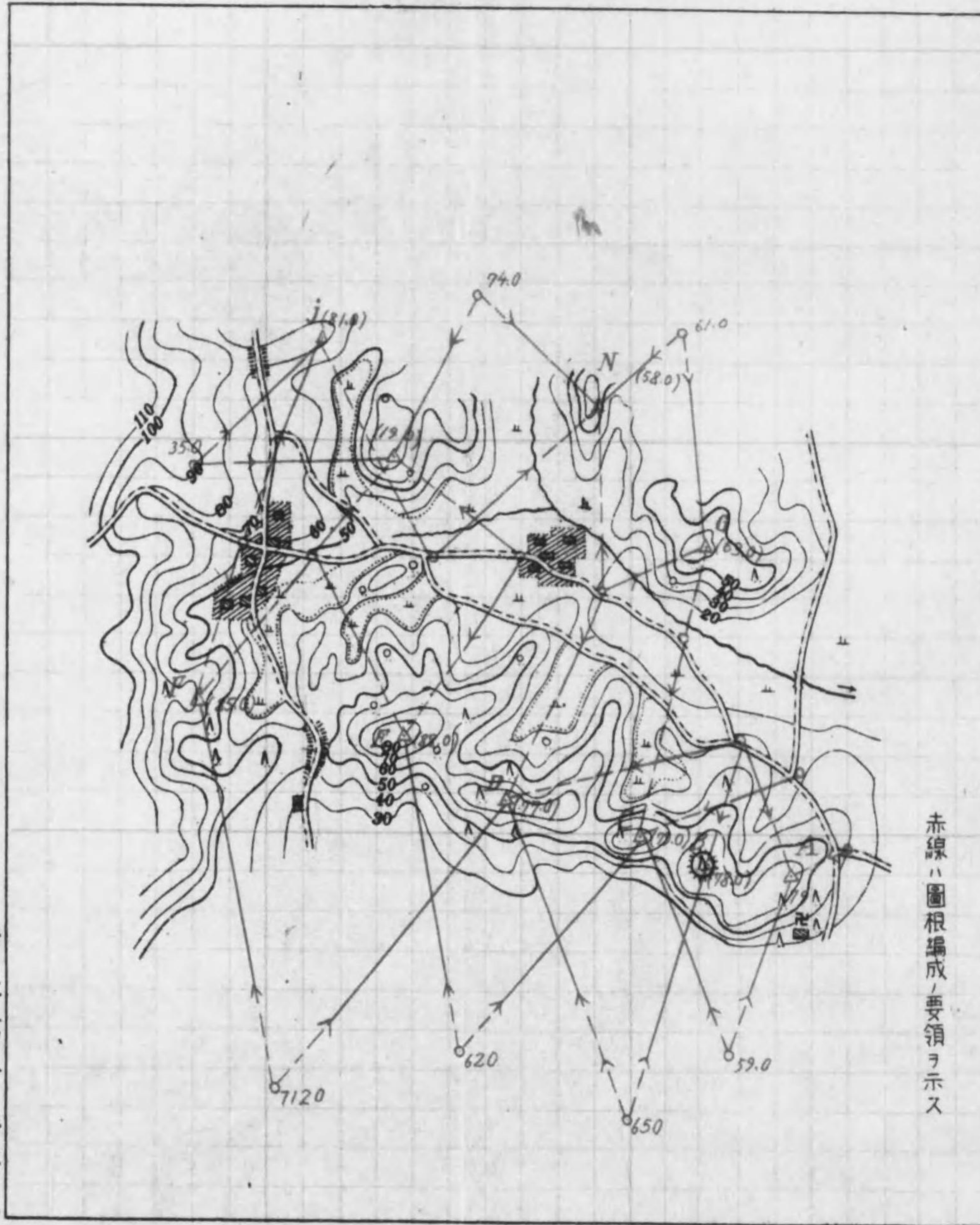


附表第十八其一



(張廣、圖測)圖 測 算 目

附表第十八共二



赤線ハ圖根編成ノ要領ヲ示ス

附表第十八共二

(臺灣、關東)圖 測算目

圖素之圖測算目近附村形概

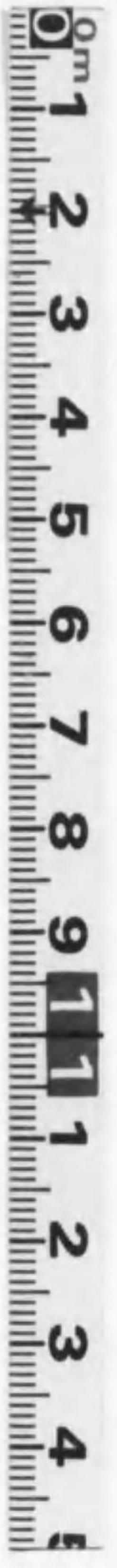
附表第十八共三



附表第十八共三

1
20000

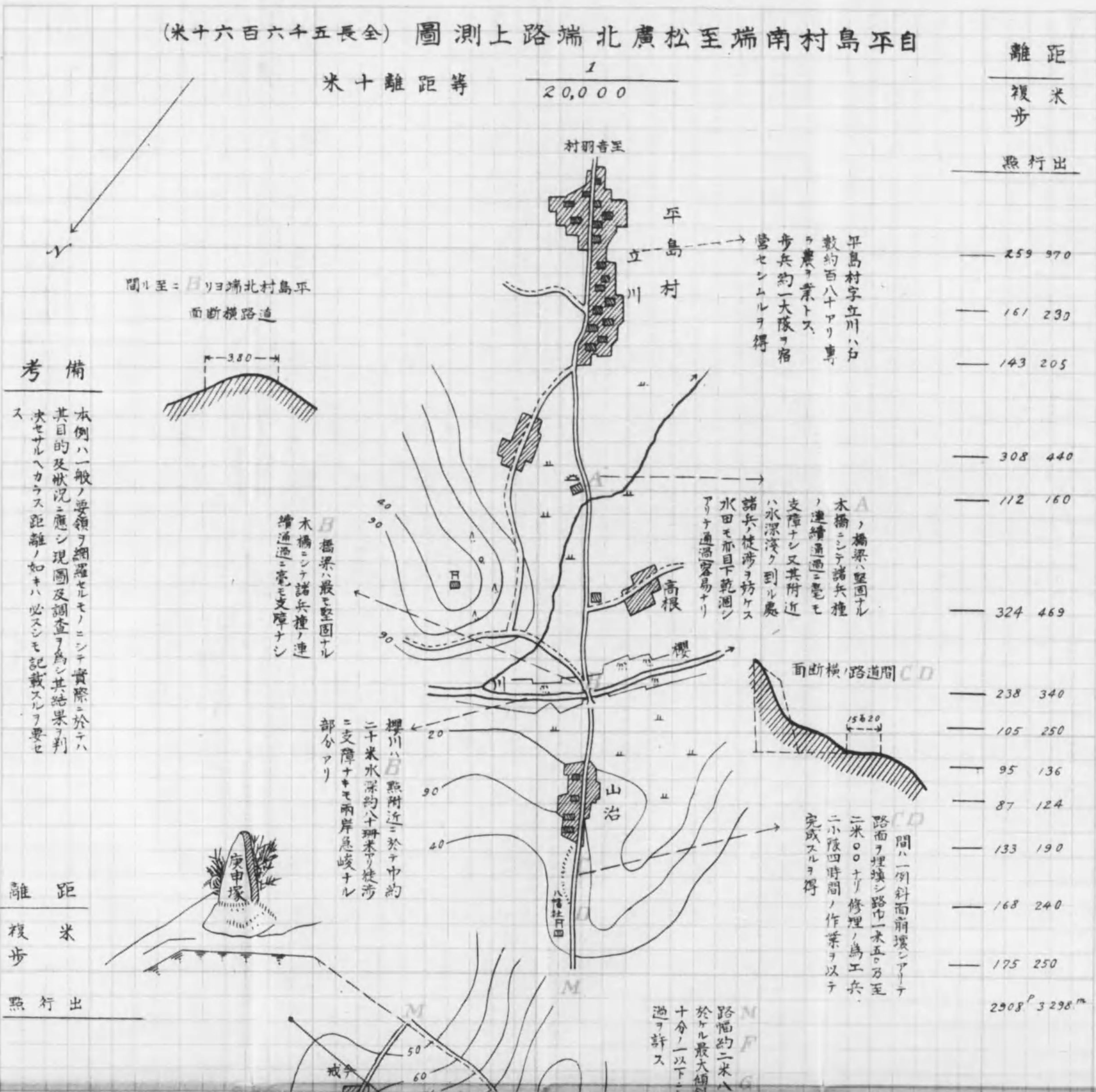
米十離距等



(米十六百六千五長全) 圖測上路端北廣松至端南村島平自

米十離距等 1/20,000

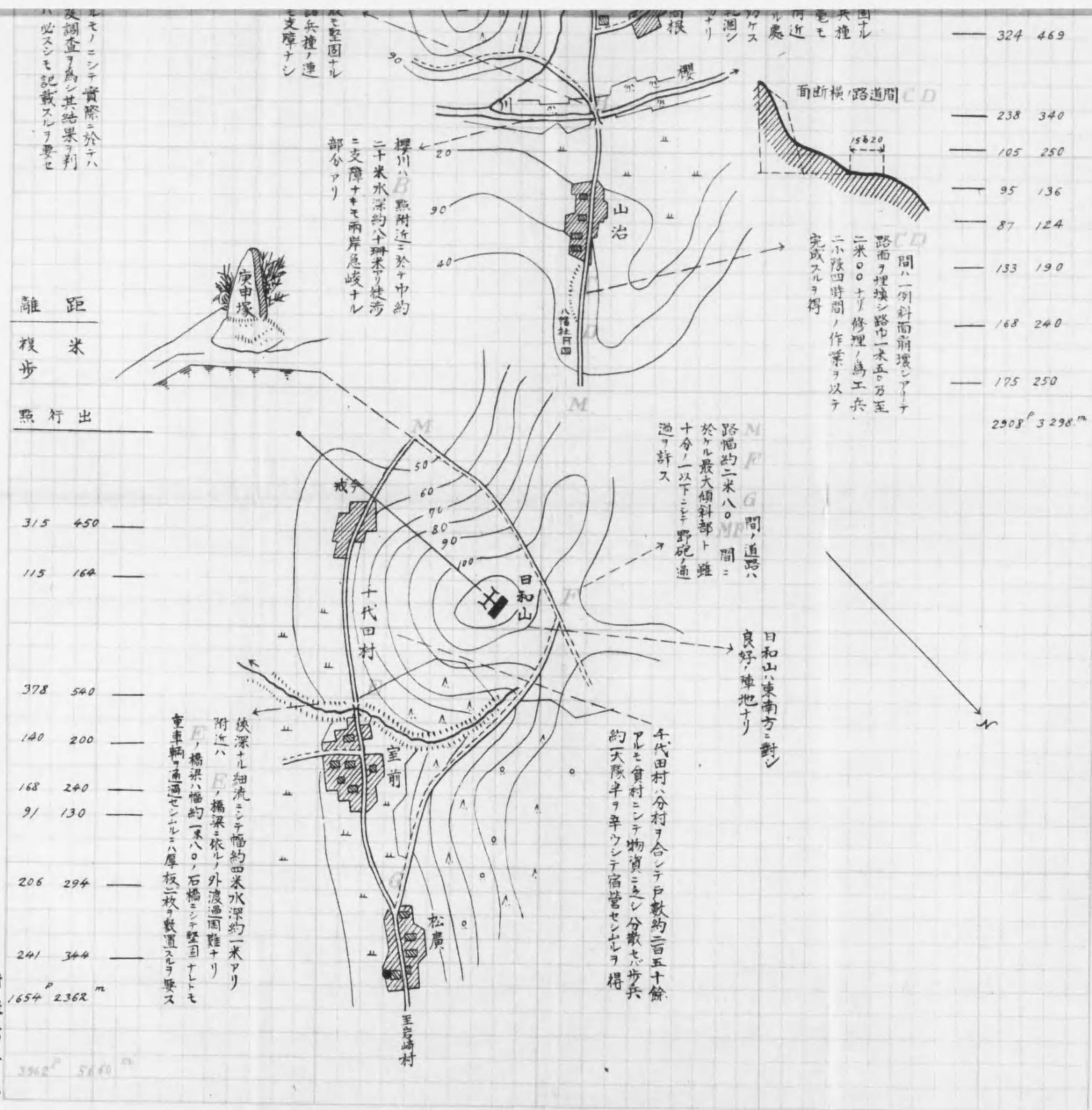
離距
複米
歩
點行出



考 備

本例ハ一般ノ要領ヲ網羅セルモノニシテ實際ニ於テハ
其目的及狀況ニ應シ現圖及調査ヲ爲シ其結果ヲ判
決セサルヘカラス距離ノ如キハ必スシモ記載スルヲ要セ
ス

離 距
複 米
歩
點 行 出



ルモノニシテ實際ニ於テハ
及調査ヲ爲シ其結果ヲ判
ハ必スシモ記載スルヲ要セ

兵糧ノ運
支障ナシ

櫻川ハB點附近ニ於テ中約
二十米水深約八十厘米リ徒歩
ニ支障ナシモ兩岸急峻ナル
部分アリ

間ハ一例斜面前崩壊シテ
路面ヲ埋填シ路巾一米五〇乃至
二米〇〇ナリ修理ノ爲工兵
二小隊四時間ノ作業ヲ以テ
完成スルヲ得

路幅約二米八〇間、道路ハ
於ケル最大傾斜部ト雖
十分一以下ニシテ野砲ノ通
過ヲ許ス

日和山ハ東南方ニ對シ
良好陣地ナリ

十代田村ハ分村ヲ合シテ戸數約二百五十餘
アルニ貧村ニシテ物資ニ乏シ分散セテ歩兵
約一隊半ヲ辛ウシテ宿營セシムルヲ得

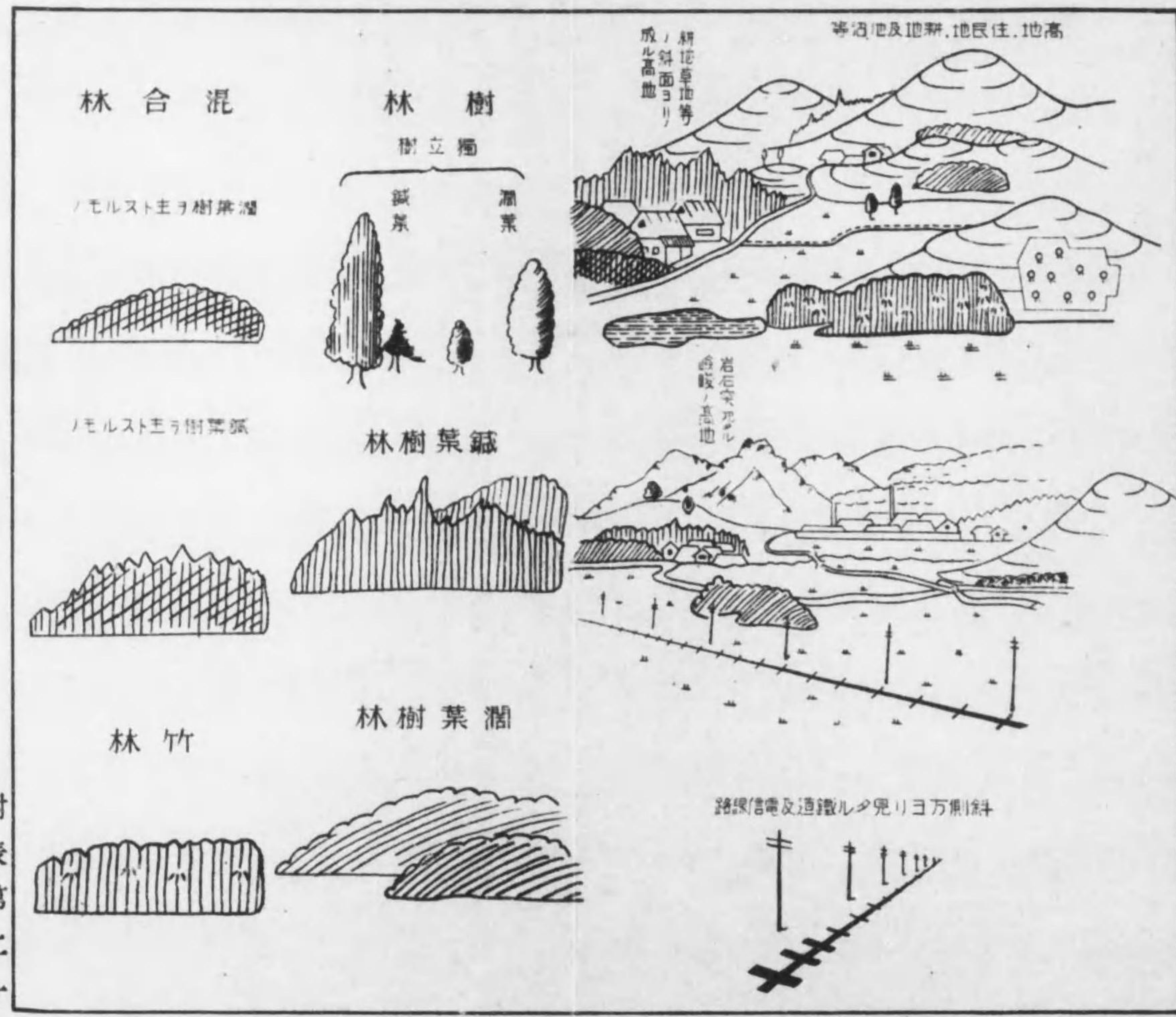
狭深ナル細流ニシテ幅約四米水深約一米アリ
附近ハ、橋梁ニ依ルノ外渡過困難ナリ
、橋梁ハ幅約一米八〇ノ石橋ニシテ堅固ナレトモ
重車輛ヲ通過セシムルニハ厚板ニ枚ヲ敷置スルヲ要ス

離 距
複 米
歩
點 行 出

315	450
115	164
378	540
140	200
168	240
91	130
206	294
241	344
1654	2362 ^m
3362	5860 ^m

附表第十九

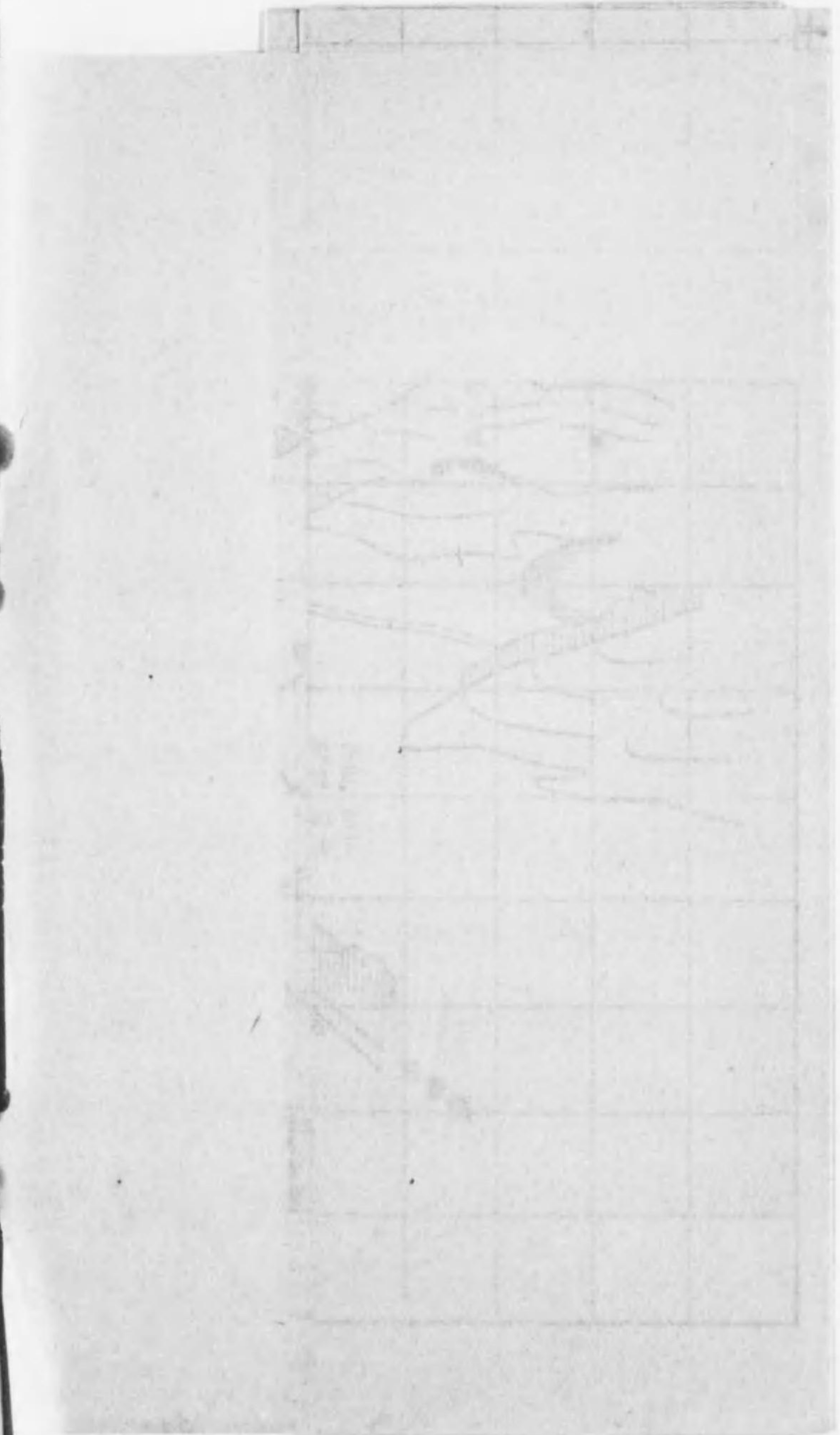
—	324	469
—	238	340
—	105	250
—	95	136
—	87	124
—	133	190
—	168	240
—	175	250
—	2908 ^p	3298 ^m



附表第二十

附表第二十





第六節 方位ノ判定

其一 磁針ニ依ル法

一、磁針ノ藍尖端ハ常ニ北方ヲ指示ス故ニ之ニ依リ容易ニ方位ヲ判定シ得ベシ。
二、磁針ハ所在ニ磁氣、鐵等アル時ハ局所偏倚ヲ生ズ故ニ其使用ニ方リテハ注意ヲ要ス。

其二 太陽ニ依ル法

一、太陽ハ正午ニ於テ概ネ南方ニ在リ午前六時頃概ネ東方ニ午後六時頃概ネ西方ニ在リ故ニ其他ニ於テモ時刻ヲ知ルトキハ太陽ノ位置ニ依リ方位ヲ概知スルコトヲ得ベシ。
二、時計ヲ用ヒ太陽ニ依リ方位ヲ判定スルニハ正シキ地方時ヲ示ス時計ヲ水平ニ保テ其中心ニ細針ノ如キモノヲ直立シ其影ヲ時計ト十二時ニ應ズル半徑トニテ爲ス角ノ平分線ニ一致セシム然ルトキハ十二時ノ方向ハ概ネ北方ヲ指示ス。

其三 月ニ依ル法

月ハ新月ノ日(太陰日第一日)ノ略、正午及満月ノ日(太陰日第十五日)ノ略、正午ニ於テ子午線ヲ通過ス今地球ヲ固定シ太陽及月ヲ運動スルモノト假想セバ月ノ運動ハ太陽ノ運動ニ連ルルコト太陽日一日ニ付約五十二分ニシテ新月ヨリ満月ニ移ル日數十四日間ニハ十二時間トナル。

測

圖

故ニ某子午線ヲ正午ニ通過シタル新月ハ十四日後ノ正午ニハ未ダ該子午線ニ達セズ、其日ノ正午ニ再ビ同一子午線ヲ通過スル頃満月ナリ故ニ假リニ子午線經過時刻一時間ヲ遅ルル月ノ盈缺ヲ推定スルニ其中程ニテ約十二分ノ一ニ相當スルコトヲ知ル。
 此ノ如ク月ノ盈缺ヲ見テ其日ニ於ケル月ノ子午線經過時ヲ求メ現在測定時トノ關係ニ依リ南北ノ方位ヲ推知スルコトヲ得、即チ月ノ上弦ノ場合ニ於テハ其光部(下弦ノ場合ニ依ガ十二分ノ七ナルトキハ其日ニ於ケル月ノ子午線經過時ハ午後七時(午前)ナルコト明カナリ、而シテ現在ニ於ケル時刻午後十時(四時)ナルトキハ月ハ略々西南(南)ニ位置スルヲ知ル故ニ之ニ依リテ南北ヲ推定スルコト容易ナリ。

其四 星ニ依ル法

暗夜ニ在リテハ星ニ依リ方位ヲ判定スルコトヲ得、特ニ北極星ニ依リ方位ヲ定ムルヲ確ナリトス、而シテ北極星ト大熊星、女帝星トノ關係左ノ如シ。



其五 微候ニ依ル法

微候ニ依リテハ其判定不確實ヲ免ガレザルモ前記諸法ヲ許サザル場合ニ利用スルコト多シ、即道標、石碑等ニハ多ク北側ニ苔ヲ生シ切株ノ木理(年輪)ハ北側一般ニ緻密ナリ、其他樹枝ハ南方ニ向ヒ繁茂シアル等之等微細ナル微候ニ依リ概略ノ方位ヲ判定シ得ルモノトス。

第十一章 其他

第一節 兵器ノ取扱保存並手入法

其一要旨

- 一、兵器ハ古來武士ノ魂トシテ我が國民ノ尊重愛護セシトコロナリ、故ニ之ガ尊重愛護ノ念ヲ高メ益々尙武心ヲ發揮シ以テ精神ノ修養ニ資スルヲ要ス。
- 二、學校供用兵器ノ大部ハ國軍ノ總豫備兵器トシテ國家有事ノ際重要ナル用途ヲ有スルモノナルヲ以テ之ガ保存ヲ良好ナラシムコト特ニ緊要ナリ。
- 三、兵器保存ノ要旨ハ常ニ適當ナル保護ヲ加ヘ其機能ヲ保全シ以テ兵器ノ命數ヲ持續セシムルニ在リ、之レガ爲其構造機能ヲ熟知シ且取扱手入法ヲ勵行シ故障破損ノ原因ヲ豫防スルコト肝要ナリ。
- 四、本節ハ主トシテ三八式歩兵銃及三十年式銃劍並ニ其ノ屬品ニ就テ記述セルヲ以テ他ノ兵器ヲ使用スルモノハ本節ニ準ジテ實施スルヲ要ス。

其二 三八式歩兵銃及屬品

一、構造機能ノ概要

1、三八式歩兵銃ハ明治三十八年日露戰役中ニ制定セラレタル我軍ノ光輝アル小銃ニシテ構造及名稱第七十八圖第七十九圖ノ如シ。

2、三八式歩兵銃ノ口径、寸度、重量、射程、速度等左ノ如シ。

口径 六耗五

五連發式

全長 {一米二七六
一米六五九

(銃劍ヲ除キ)
(銃劍ヲ附ス)

重量 {三、九五〇瓦
四、三九〇瓦

(銃劍ヲ除キ)
(銃劍ヲ附ス)

射程 約四〇〇〇米 (照尺度ハ二、四〇〇米)

速度 七四七米 (銃口前二五米ニ於ケル秒速)

3、銃尾機關ノ作用。

發射ニ於ケル銃尾機關ノ作用左ノ如シ。

(イ) 遊底ヲ開キ挿彈子ニ挿容セル五個ノ彈藥筒ヲ彈倉内ニ壓入スルヤ其彈藥筒ハ受筒飯上ニ重疊シ(右側ニ三發左側ニ二發)彈倉口ノ前縁ニ依リ支阻セラル。

(ロ) 遊底ヲ前進スルトキハ圓筒頭部ニテ挿彈子ノ下端ヲ壓シ之ヲ跳脱セシメ、最上層ニ在ル彈藥筒ノ底部ヲ壓シ漸次彈倉ヨリ推出シテ藥室ニ進入セシム、此ノ際彈藥筒

兵器

- ノ起縁部ハ抽筒子爪ニ鉤スルモノトス。
- (ハ) 遊底ヲ全ク閉テ引鐵ヲ後方ニ壓スレバ逆鉤筒ハ低下スルヲ以テ擊莖ノ擊發段ハ筒ヨリ脱シテ前進シ雷管ヲ衝撃ス。
- 遊底ノ引鐵不充分ナルトキハ遊莖筒頭ト遊莖筒溝ト合一セザルニ因リ引鐵ヲ壓スルコト能ハズ以テ危害ヲ豫防ス。
- (ニ) 槓桿ヲ起シ遊底ヲ後退スレバ蹴子ノ脚ハ圓筒駐退榫ニ依リテ外方ニ壓セララルルヲ以テ蹴子頭ハ圓筒駐退榫ノ溝内ニ進入シ抽筒子ノ抽出シ來リタリ空莖莖ヲ右側方ニ抛出シ遊底駐子ニ駐止ス。
- (ホ) 更ニ遊底ヲ前ニセバ彈倉内ノ上昇シタル第二彈藥筒ハ其ノ底部ヲ壓セラレテ第一彈藥筒ト同作用ニ因リ裝填セラル若彈倉内ノ彈藥筒ヲ射盡セバ受筒飯ハ上昇シテ圓筒頭部ヲ支駐シ遊底ノ前進ヲ妨ゲ射手ニ彈倉ノ空虚ナルコトヲ知ラシム。
- 3、遊底閉鎖後擊莖駐脚ヲ前方ニ壓シ四十五度右旋回セシメ、其ノ壓迫ヲ緩ムルトキハ底側ノ筒ハ尾筒後方延長部溝ノ圓削部ニ鉤シ以テ遊底ヲ開クコト能ハザラシム、又擊莖ノ擊發段ハ擊莖駐脚ノ旋回ニ伴ヒ逆鉤筒ニ隣接スル尾筒ノ階段ニ鉤シテ逆鉤トノ連繫ヲ絶テ以テ安全裝置ヲ成形ス。

二、普通分解及結合

普通分解トハ遊底及彈倉附隨品(受筒飯、彈倉發條、彈倉底飯)ノ分解並槓杖及負革ヲ

離脱スルコトヲ謂フ。

1、遊底ノ分解及結合方法左ノ如シ。

(イ) 離脱ハ左ノ順序方法ニ依ル。

(a) 銃ヲ臺上ニ置キ銃口ヲ上ニ銃口ヲ前ニシ成ルベク床尾ヲ體ニ托シ左手ニテ銃把ヲ下ヨリ握リ其ノ拇指ヲ銃ノ左側ニ位置セシメ右手ニテ槓桿ヲ起シテ遊底ヲ遊底駐子ニ鉤スル迄後退セシメ右手ヲ放ツ。

(b) 左手ニテ遊底駐止ヲ充分外方ニ開キ右手ニテ遊底覆ノ上ヨリ拇指ヲ槓桿ノ左方ニ他ノ四指ヲ右方ニシ遊底ノ後部ヲ握リ抽出ノ際擊莖駐脚ノ筒ニテ床鼻ヲ損セザル爲指頭ヲ淺ク其ノ下部ニ位置セシメタル後除ニ後方ニ抽出ス。

(ロ) 分解ハ左ノ順序方法ニ依ル但シ「c」「ハ」「a」ニ先チ之ヲ行フコトヲ得。

(a) 圓筒頭部ヲ下方ニシテ左手ニ遊底ノ中央部ヲ握リ右手ノ掌ヲ擊莖駐脚ノ後面ニ當テテ之ヲ握リ壓迫シテ充分右方ニ旋回シタル後徐ニ壓迫ヲ緩メ擊莖駐脚ヲ離脱ス、但シ此ノ際圓筒後部ヲ低下スルトキハ擊莖墜落スルコトアルヲ以テ注意スベ

シ。

(b) 擊莖ヲ圓筒ヨリ、擊莖發條ヲ擊莖ヨリ離脱ス。

(c) 圓筒頭部ヲ前方ニ槓桿ヲ右方ニシテ左手ヲ以テ圓筒後部ヲ握リ、其拇指ヲ槓桿ニ掛ケ右手ヲ以テ下ヨリ抽筒子ノ中央部ヲ圓筒ト共ニ強ク握リ四指ノ附根ヲ抽筒子右側ニ當テ圓筒ヲ左方ニ充分旋回シテ抽筒子ノ鈎部(爪ノ直後)ヲ圓筒ノ溝ヨリ脱シ抽筒子ヲ上方ニシテ左手ニテ圓筒後部ヲ握リ右手ニテ圓筒ノ中央部ヲ下ヨリ握リ其ノ兩拇指ニテ抽筒子ノ後縁及背ノ段部ヲ前方ニ押シテ抽筒子ヲ離脱スベシ。

(ハ) 結合ハ左ノ順序方法ニ依ル、但シ「a」「b」「c」ノ後ニ於テ行フコトヲ得。

(a) 抽筒子駐環ノ鈎部ヲ圓筒ノ瓦斯漏孔ノ直後ニ位置セシメ、圓筒頭部ヲ上方ニ槓桿ヲ左方ニシテ左手ノ指ヲ以テ圓筒ト共ニ駐環ヲ撮ミ右手ニテ抽筒子ノ裏面溝ノ廣キ部分ニ駐環ノ鈎部ヲ裝シ左手ニテ圓筒ト共ニ抽筒子ノ發條部ヲ握リ、右手ノ拇指頭ヲ以テ抽筒子ノ頭部ヲ外方ニ開キ之ヲ壓下シテ抽筒子ヲ駐環ニ裝着シタル後右手ニテ圓筒後部ヲ握リ之ヲ右ニ旋回シテ駐環上ニ位置セシムベシ。

(b) 擊莖内ニ發條ヲ裝シ擊莖ヲ圓筒ニ裝入シ其ノ擊發段ヲ圓筒ノ割割半圓部(淺キ

個所)ニ位置セシムベシ。

(c) 圓筒頭部ヲ下方ニ槓桿ヲ右方ニシテ左手ニテ圓筒ノ中央部ヲ握リ右手ヲ擊莖駐脚ノ後面ニ當テテ之ヲ握リ其ノ軸ノ凸筋ヲ圓筒後部割割狀底(深キ箇所)ニ向ハシメ充分壓迫挿入シ(挿入シ能ハザルトキハ少シク左右ニ動カシ挿入スベシ)左へ充分旋回シタル後擊莖駐脚ノ壓迫ヲ緩ム、但シ結合ノ際擊莖駐脚ノ旋回及壓迫不十分ナル爲擊莖ノ擊發段ヲ圓筒割割狀底ニ落下シ擊莖駐脚ノ耳筋槓桿ト反對側或ハ直角(騎銃ニ在リテハ百三十五度或ハ四十五度)ニ位置スルニ至ルトキハ左ノ方法ノ一ニ依リ正式ノ結合ニ復セシムベシ。

(い) 擊莖駐脚ノ耳筋槓桿ト反對側(騎銃ニ在リテハ百三十五度)ニ位置スルモノハ左手ヲ以テ圓筒ノ中央部ヲ右手ニテ擊莖駐脚ヲ握リテ之ヲ壓シ擊莖ノ擊發段ヲ割割狀部ノ斜面ニ沿ヒ後退スル如クシ、擊莖駐脚ヲ右ニ旋回シ(此旋回ニ依リ擊發段ヲ割割半圓部ニ移シ得ルモノハ以下ノ操作ヲ要セズ)其ノ旋回停止シタルトキハ更ニ擊莖駐脚ヲ少シク急ニ壓迫スベシ、然ルトキハ擊發段ハ再ビ割割狀底ニ落下シ擊莖、擊莖駐脚、擊莖發條ハ結合セラレテ一體ト成リ其ノ運動自由ト成ルヲ以テ擊發段ヲ割割半圓部ニ移シ擊莖駐脚ヲ少シク左ニ旋回スベシ。

シ。

(ろ) 擊莖駐脚ノ耳筒槓桿ト直角(騎銃ニ在リテハ四十五度)ニ位置スルモノハ擊莖駐脚ノ耳筒槓桿ト反對側ニ位置スル場合ノ方決テ準用シ 擊莖駐脚ヲ右ニ旋回シ(若シ旋回困難ナルトキハ左手ノ拇指ニテ擊莖擊發段ノ旋回ヲ扶クルモノトス)其ノ儘擊發段ヲ剝割半圓部ニ移シ結合ヲ行フベシ。

(ニ) 装着ハ左ノ順序方法ニ依ル。

(a) 遊底ヲ離脱スルトキハ同様に銃ヲ位置セシメ抽筒子ヲ正シク右側駐退柵上ニ位置セシムベシ。

(b) 遊底覆ヲ圓筒ニ裝シ槓桿ヲ槓桿室左方方形部ニ位置セシムベシ。

(c) 右手ヲ以テ遊底覆ノ上ヨリ遊底後部ヲ握リ拇指ト食指トニテ遊底覆ヲ圓筒ト平行ニ支持スベシ。

(d) 左手ヲトヨリ圓筒ニ添へ圓筒頭部ヲ少シク尾筒ニ裝入シ、且遊底覆前端ノ左爪ヲ其拇指ノ扶ヲ以テ尾筒後端ノ左準溝ニ約二三耗吻合セシメ、右手ニテ遊底覆ヲ少シク右ニ旋回シテ其ノ右爪ヲ圓筒ノ準溝ニ吻合セシムベシ。

(e) 遊底覆ノ兩爪、尾筒ノ準溝ニ吻合シ(其吻合シアルモノハ遊底覆ノ内面ト尾筒

上面トハ略々相接スルモノトス)アルコトヲ確認シタル後徐ニ遊底駐子ヲ外方ニ開クヲ可トス但シ爪ノ吻合不十分ナルトキハ、遊底ヲ挿入スルニ當リ尾筒部ノ右側銃床ヲ引ズルコトアルヲ以テ注意スベシ。

(f) 右手ニ槓桿ヲ握リ左手ニテ少シク受筒飯ヲ壓下シタル後、遊底ヲ徐ニ挿入シ槓桿ヲ右方ニ倒スベシ。

(g) 引鐵ヲ引キテ擊莖ヲ前進セシムベシ。

2、彈倉附隨品ノ分解、結合

彈倉附隨品ノ分解及結合左ノ如シ。

イ、離脱スルニハ銃身上ニシテ、銃ヲ臺上ニ置キ左手ヲ彈倉底飯ノ下ニ添へ右手ノ拇指ヲ以テ彈倉駐子桿ヲ壓スベシ。

ロ、分解スルニハ彈倉底飯ニ接スル風曲部ヲ少シク扛起シ發條ヲ徐ニ抽出シ同一要領ニ依リ發條ヲ受筒飯ヨリ抽脱スベシ。

ハ、結合スルニハ彈倉發條ノ下部ヲ有スル端ヲ受筒飯ニ装着シ他端ニ彈倉底飯ニ装着スベシ。

ニ、装着スルニハ銃ノ左側ヲ臺上ニ托シ右手ニテ彈倉底飯ヲ握リ受筒飯ヲ彈倉内ニ入レ

彈倉底飯前端ノ爪部ヲ用心鐵ノ溝ニ吻合セシメタル後、彈倉底飯ノ後部ヲ壓迫シテ彈倉駐子ニ鈎セシムベシ。

3、柵杖ノ離脱及装着

柵杖ノ離脱及装着法左ノ如シ。

イ、離脱スルニハ銃ヲ立テ左手ニテ上帶ノ下際部ヲ握リ其指ヲ以テ上帶發條ノ上部ヲ強ク壓シ右手ニテ柵杖ヲ垂直ニ抽出スベシ。

ロ、装着スルニハ左手ニテ上帶發條ヲ壓迫シ右手ニテ柵杖ヲ徐ニ裝入シ、發條ノ壓迫ヲ緩メ柵杖ヲ僅ニ上方ニ引キテ發條ニ鈎セシムベシ。

但シ裝入ノ際柵杖ヲ銃床ノ柵杖室底ニ劇突セシメザル如ク注意スベシ。

4、頁革ノ離脱及装着法左ノ如シ。

イ、離脱ハ左ノ順序方法ニ依ル。

(イ) 銃身ヲ下方ニシ銃ヲ臺上ニ置キ(騎銃ニ在リテハ左側ヲ上方ニス)遊環革ヲ床尾

鞣鐵ノ方向ニ移シ鞣鐵ノ管部ヲ頁革ヨリ抽出スベシ。

遊環革及鞣鐵ヲ頁革ヨリ離脱スベシ。

鼓鉤頭部ヲ頁革ヨリ抽出シ鼓鉤ヲ頁革ヨリ離脱スベシ。

ロ、装着ハ左ノ順序方法ニ依ル。

(イ) 頁革ヲ離脱シタルトキト同様ニ銃ヲ置キ頁革ノ表面ヲ上ニシ其ノ一端ヲ鼓鉤ニテ

頁革ニ装着スベシ。

(ロ) 鞣鐵ノ管部ヲ頁革ノ裏面ト同様ニ同側ニ之ヲ頁革ニ挿入スベシ。

遊環革ノ縫著セル側ヲ頁革ノ裏面ト同側ニシテ之ヲ頁革ニ挿入スベシ。

頁革ヲ床尾鞣鐵及遊環革ニ通シ其ノ端ヲ床尾ノ方向ニ向ケ鞣鐵ニ挿入スベシ。

鞣鐵ノ管部ヲ頁革ノ孔ニ通シ遊環革ヲ鞣鐵ニ近ヅケ結合ヲ確實ニスベシ。

三、手入法一般ノ要領

1、手入ノ要旨ハ保存ヲ害スル塵埃、汚垢等ノ附著ヲ去リ、又脂油ヲ塗施シ發錆、磨損

及變質等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ。

2、手入ニ關スル注意事項左ノ如シ。

(イ) 砂塵ノ附著シタルトキハ之ヲ除去シタル後ニ在ラザレバ、拭摩スベカラズ又砂塵

ノ附着シタル洗管、布片等ヲ使用スベカラズ。

(ロ) 著色若ハ塗料ヲ施シアル部分ヲ強摩シ、又白色ヲ呈スル部分ヲ研磨シテ光輝ヲ發

セシムベカラズ、

- (ハ) 錆ヲ除去スルニ金剛砂、磨研布、粘土、砂、磨粉等ヲ用ヒ又革具ヲ手入スルニ酸類ヲ使用スベカラズ。
- (ニ) 鐵具塗料ヲ施シアル部分ヲ除ク)ヲ拭淨シタルトキハ、直ニ塗油シ其ノ發錆ヲ豫防スベシ。又塗油ハ全面ニ治及セシムベシ。
- (ホ) 銅製品、青銅製品、鑿業製品及塗料ヲ施シアル部分ノ手入ハ布片ニテ拭淨ン塗油セザルモノトス。
- (ヘ) 腔中、藥室及擊莖頭室等ハ手入困難ナルヲ以テ特ニ注意スベシ。
- 小銃ノ藥室ヲ檢スルニハ銃口及銃尾ノ兩方ヨリ視視スルヲ要ス、
- (ト) 使用スル軍刀、劍及銃ノ外部ノ塗油多量ニ失スルトキハ塵埃ノ附着ヲ増加スルヲ以テ其ノ塗油ハ成ルベク僅少ナルヲ可トス。
- (チ) 銃口部ノ磨損ハ命中精度ヲ害スルヲ以テ欄杖、洗管、洗矢等ヲ以テ此ノ部ヲ磨擦セシメザルコトニ注意スベシ。
- (リ) 革具ハ適當ナル脂油ノ供給(護膜引刀帶ハ塗油セザルモノトス)ニ依リ消耗セル脂油ヲ補ヒ其ノ變質及損廢ヲ防止スベシ。

革具ハ手入ヲ怠リ一度變質、損廢セシムルトキハ其ノ回復困難ナルヲ以テ嚴密ナル

注意ヲ要ス。

- (ヌ) 革具ニ發黴スルトキハ革質ヲ漸次ニ荒廢セシメ、遂ニ使用ニ堪エザルニ至ルヲ以テ弊黴ヲ認メタルトキハ之ヲ拭淨スベシ。又黴ノ附着豫防トシテハ屢々拭淨スベシ。殊ニ温潤季ニ當リテハ特ニ注意シ塗油モ其ノ量及回数ヲ減少スルヲ可トス。
- (ル) 革具ハ其ノ用途及種類ニ從ヒ塗油ノ度ヲ異ニス、乃チ褐色堅革ヨリ成ル部分ハ塗油ヲ少量ニシテ變形ヲ豫防シ、褐色多脂牛革ヨリ成ル部分ハ稍々多量ニ塗油スベシ。然レドモ過度ナルトキハ革質著シク柔軟ト成リ伸長スルヲ以テ注意ヲ要ス、又革質ハ年月ヲ經ルニ從ヒ硬化シ易キモノナルヲ以テ漸次ニ塗油ノ度ヲ増加スベシ。
- (ヲ) 革具ニ脂油ヲ施スニハ主トシテ革ノ表皮ヨリ含油布片ヲ以テ少量ヅツ數度ニ等齊ニ給スベシ。
- (ワ) 革具ニ塗油シタルトキハ贅油ヲ殘留セシメザル如ク拭込ムベシ。殊ニ縫線部ニ於ケル贅油ノ殘留ハ縫線ノ變廢ヲ來タシ、破綻ヲ惹起スルヲ以テ注意スベシ。
- (カ) 寒冷季ニ革具ニ塗油スルニハ、脂油ニ微温ヲ與ヘ吸收ヲ容易ナラシムルヲ可トス又寒氣甚シキトキハ革面ニ脂油滲出シテ結晶狀ヲ爲スコトアルモ之ヲ拭淨スベカラズ。

3、手入ニ使用スベキ脂油ノ種類、用途及使用區分左ノ如シ。

種類	用途	使用區分
格納用礦油	防錆用	永ク使用セザル鐵部
ワセリン		一時使用セザル鐵部
常用礦油		常用品ノ鐵部
石油、揮發油、 硼砂溶液、	洗滌用	污垢ノ附着セル鐵部及木部
亞麻仁油		劍ノ柄木、小銃ノ銃床及木被拳銃ノ銃把
鯨油、牛脂 ノ複合脂	塗布用	革具

四、普通手入

普通手入ヲ分ケテ日常手入、射撃前ノ手入、射撃後ノ手入トシ日常手入ヲ分チテ毎日行フ手入、一週間ニ少クモ一回行フ手入及使用後行フ手入トス。

日常手入

1、毎日行フ手入左ノ如シ。

(イ) 銃ハ遊底及其他ノ部品ヲ離脱スルコトナク、鐵部ヲ布片ニテ輕ク拭ヒ、舊油ヲ拭淨シタル後僅ニ含油セル布片ヲ以テ塗油シ、又銃床及木被ヲ乾キタル布片ヲ以テ拭ヒ塵埃ヲ拭淨スベシ。

2、(ロ) 革具ハ刷毛又ハ、布片ヲ以テ塵埃ヲ拭淨スベシ。

3、遊底、彈倉附隨品(受筒飯、彈倉發條、彈倉底飯)及欄杖ヲ離脱シテ一週間ニ少クモ一回行フ手入左ノ如シ。

(イ) 銃身ヲ上ニ銃口ヲ前ニシ用心鐵ノ前面ヲ臺ノ縁端ニ接着セシメ、成ルベク水平ニ銃ヲ臺上ニ托シ保心筒ヲ尾筒ニ裝シタル後布片ヲ纏繞シタル洗矢ヲ保心筒ニ通シ腔中ニ挿入シ、除ニ之ヲ進退シ舊油ヲ拭淨シタル後保心筒ヲ除キ藥室ニ吻合スル如ク布片ヲ洗矢ニ纏繞シ、之ヲ藥室ニ挿入シ旋回シテ舊油ヲ拭淨シタル後洗矢ニ布片ヲ纏ヒ腔中及藥室ニ塗油スベシ、但シ旋回洗矢ヲ使用セザルトキハ其ノ旋回ニ抵抗セザル如ク洗矢ヲ支持スベシ、然ラザレバ充分綫底ヲ拭淨シ能ハザルノミナラズ、洗矢ヲ損ズルコトアルベシ。

兵器

フモノトス。

銃尾ヨリ銃口附近ノ附着物ヲ除去スルコト困難ナルトキハ銃口ヨリ手入スルヲ得、但シ銃口部ニ手入用具ヲ觸接セシメザル如ク銃口部ニ於テ欄杖ヲ布片ニテ保持スベシ。

(ロ) 銃身ノ後端及尾筒内部ハ藥室掃除器ニ布片ヲ纏ヒ、舊油ヲ拭淨シタル後塗油スベシ。

(ハ) 欄杖、遊底(各部品ヲ分解ス)彈倉附隨品(各部品ヲ分解ス)ハ舊油ヲ拭淨シタル後塗油スベシ。

(ニ) 表尺、表尺ハ舊油ヲ拭淨シタル後含油布片ヲ以テ稍々多量ニ塗油シ、遊標ヲ徐ニ上下シ次ニ布片ニテ表尺、表尺ヲ輕ク拭フベシ。

(ホ) 革具ハ塵埃ヲ拭淨シタル後僅ニ含油セル布片ヲ以テ數回拭摩スベシ。但シ彈藥盒前蓋ノ蓋革及各盒ノ表革、裏革、隔板ハ其ノ塗油ヲ少クスベシ。

3、日常使用(射撃セル場合ヲ除ク)後行フ手入ハ「1」ニ依ルノ外左ノ如シ。
(イ) 銃ハ遊底ヲ離脱シ遊底、腔中、藥室及尾筒内部ヲ拭淨シタル後含油布片ヲ以テ塗油スベシ。又甚シク塵埃ヲ蒙リ或ハ雨雪等ニ際會シタルトキハ「3」ニ準シ手入ヲ行

フベシ。

(ロ) 革具ニ汚垢又ハ泥土ノ附着シタルモノハ僅ニ含水セル布片ヲ以テ拭淨シタル後含油布片ニテ稍々多量ニ塗油スベシ。

(ハ) 革具ノ濕潤シタルモノハ乾キタル布片ヲ以テ拭ヒタル後空氣ノ流通良キ場所ニ於テ陰乾シ其ノ全ク乾キ終ラザルニ先子稍々多量ニ塗油シ、其ノ吸收スルヲ待テ輕ク拭摩スベシ。決シテ日光ノ直射又ハ火氣ニテ乾燥スベカラズ。

(ニ) 革具ヲ炎天ノ際連日使用シタルトキハ稍々多量ニ塗油スベシ。

射撃前後ノ手入

1、射撃前ニ於テハ腔中、藥室ヲ丁寧ニ拭淨シ含油布片ヲ以テ塗油スベシ。

2、射撃後ノ手入ハ「1」ヲ準用スルノ外左ノ如シ。

但シ發錆ノ防止並附着塵埃ノ除去ヲ容易ナラシメンガ爲、射撃後直ニ之ヲ行フ可トス、若直ニ之ヲ行フコト能ハザルトキハ腔中、藥室ニ稍々多量ニ塗油シ置クベシ。

(イ) 腔中、藥室ヲ拭淨スルニハ洗滌用油ヲ浸シタル布片ヲ以テシ、且之ヲ屢々取換ヘ布片ニ燻流或ハ汚物ノ附着セザルニ至リタル後乾キタル布片ニテ洗滌用油ヲ除去シ稍々多量ニ塗油スベシ。

(ロ) 腔中及藥室ニ附着セル燼渣ハ一回ノ手入ニ於テ完全ニ除去スルコト困難ナルヲ以テ翌日更ニ手入ヲ行ヒ、爾後布片ニ汚物ノ全ク附着セザルニ至ル迄日々行フモノトス。

(ハ) 圓筒内部、擊莖頭部及尾筒ノ駐退榫室ハ叮嚀ニ拭淨スベシ。

(ニ) 遊底ノ各部品及尾筒内部ハ拭淨後稍々多量ニ塗油スベシ。

五、取扱上ノ注意

1、照星ノ損傷及照尺ノ變歪ハ銃ノ命中精度ヲ害スルヲ以テ、取扱上特ニ注意シ他物ニ衝突セシメザル如クスベシ。

2、銃ヲ地上ニ置クコトハ之ヲ避クルヲ可トス。若已ムヲ得ザル場合ニ於テ横臥セシムルトキハ銃ノ左側ヲ下ニスベシ。

銃口、照星、照尺及遊底部ハ他ニ觸レシムベカラズ。

3、銃ヲ顛倒シ或ハ衝突スルコトハ銃ノ命中精度ヲ害スルヲ以テ戒慎セザルベカラズ。

4、銃ヲ使用セザルトキハ、銃口蓋ヲ裝シ木、紙、布片等ヲ以テ假栓ヲ爲スベカラズ。

5、銃ヲ物體ニ依托スルトキハ、其ノ顛倒セザルコトヲ確認シタル後ニ於テスベシ又照星ヲ直接物體ニ觸接セシムベカラズ。

6、銃ヲ重疊シ或ハ一人ニテ三挺以上ノ銃ヲ携行スベカラズ。但シ二挺ノ銃ヲ携行スルトキハ、衝突セシメザルコトニ注意スベシ。

7、銃ニ他ノ物品ヲ懸吊スベカラズ、又背囊其他ノ携帶品ニ觸レテ損傷セザル様注意スベシ。

8、銃身ト銃床トノ接際ニ大ナル遊隙ヲ存スルモノニ在リテハ、硬脂ヲ同部ニ附着シ置クヲ要ス。

9、銃腔中ニ土砂ノ浸入シタルトキハ速ニ之ヲ拭淨スルヲ要ス。若之ヲ拭淨スルコトナク射撃ヲ行フトキハ腔中ヲ損傷スルノ害アルモノトス。

10、銃ヲ使用セザルトキハ、擊莖發條ノ張力ヲ衰損セシメザル爲擊莖ヲ發射セシ位置ニ置クベシ。又遊標ヲ最底ノ位置ニ移シ表尺銀ハ臥倒シ置クモノトス。

11、遊底ヲ開クニハ空藥莖ヲ蹴出シ得ルヲ度トシ、又遊底ヲ閉鎖スルニハ充分槓桿ヲ倒臥スベシ。

12、彈藥ヲ藥室ニ裝入スルニハ先ヅ彈藥ヲ彈倉内ニ裝填シ、遊底ヲ前進セシメ藥室ニ裝入スルモノトス、若最初ヨリ藥室ニ裝入シテ遊底ヲ閉鎖スルトキハ、抽筒子ノ保存ニ害アルモノトス。

- 13、空撃及擬製彈ヲ用フル撃發操作ハ必要ノ場合ノ外行フベカラズ。
- 14、安全裝置ヲ施スニハ掌ニテ擊莖駐脚ヲ充分壓迫シタル後其ノ停止スル迄右方ニ旋回スベシ。若其旋回不充分ナルトキハ擊莖駐脚ハ直ニ發射ノ位置ニ戻回シ或ハ遊底ノ動搖ニ依リテ戻回スルコトアルベシ。
- 15、欄杖ヲ以テ又銃スルニハ顛倒セザル如ク深ク交叉スルヲ要ス、又其交叉ヲ解クニハ欄杖ヲ屈撓セザル如ク注意スベシ。

其三 三十年式銃劍

一、構造機能ノ概要

- 1、銃劍ハ左ノ三部ヨリ成ル
- 劍身
- 劍柄
- 鞘
- 2、劍身ハ刀形ヲ成シ其ノ兩面ニ彫溝ヲ刻ス其ノ全長四百耗ナリ。
- 3、劍柄ハ柄頭ニ駐梁溝ヲ穿チ又駐筈室ヲ設ク、駐筈ハ其ノ一端ニ駐筈頭ヲ鑿著シ中間ニ駐筈發條アリ以テ銃劍著脫ノ作用ヲ爲ス。

柄身ノ兩側ニハ柄木ヲ添ヘ二個ノ駐螺ニテ之ヲ緊定ス。

鏢ハ二個ノ鏢駐釘ニ依リテ劍身ニ固着ス其ノ一端ノ溝ハ銃劍裝着ノ際銃口ニ嵌入セシメ他ノ一端ハ彎鉤ヲ成形シ又銃ノ用ニ供ス。

- 4、鞘ハ鋼板ヲ以テ製シ黑色ニ鍍染シ鈎環、上、下部彈鎖子、鯉口及鑑ヲ附ス。上部彈鎖子ノ上縁ハ鯉口ニ鑿著ス、鈎環駐螺ニ依リ鞘ニ附着ス、上部彈鎖子ハ劍身ノ自然ニ抽出スルヲ防ギ下部彈鎖子ハ劍尖ノ動搖ヲ止ムルモノトス。
- 5、銃劍ノ屬品ハ劍差及帶革ニシテ劍差ハ帶革ニ貫通セシメ銃劍ヲ吊下スルニ用フ。

二、普通手入

- 1、毎日常手入左ノ如シ。
- (イ) 劍ハ其ノ外部ヲ布片ニテ輕ク拭ヒタル後鐵部ニハ僅ニ含油セル布片ヲ以テ塗油スベシ。
- (ロ) 革具ハ刷毛又ハ布片ニテ塵埃ヲ拭淨スベシ。
- 2、一週間ニ少クモ一回行フ手入左ノ如シ。
- (イ) 劍身ハ舊油ヲ拭淨シタル後塗油スベシ。
- 3、使用後ノ手入 狀況ニヨリ「1」「2」ヲ準用ス

(ハ) 劍ノ駐梁溝ハ布片ヲ纏ヒタル竹又木片ヲ以テ舊油ヲ拭淨シタル後塗油スベシ。
 劍ノ駐筒ニハ數滴ノ常用蠟油ヲ駐梁溝ヨリ注入シ駐筒頭ヲ數回壓迫シテ油ヲ内部ニ普及セシメ其ノ餘瀝ヲ拭淨スベシ。

其四 三十年式歩兵銃ノ分解及結合

一、遊底ノ分解及結合左ノ如シ。

遊底ヲ離脱スルニハ銃ヲ臺上ニ置キ銃身ヲ上ニ銃口ヲ前ニシ左手ニテ銃把ヲ握リ、其拇指ヲ以テ遊底駐子頭ヲ壓シ右手ニテ槓桿ヲ起シ遊底ヲ低トセシメザル様注意シテ徐ニ抽出スベシ、若此際遊底ヲ低トスルトキハ床鼻ニ衝突シ損傷スルコトアリ。

二、分解ハ左ノ順序方法ニ依ル。

1、左手ニ圓筒ヲ握リ其ノ頭部ヲ上ニシ右手ニテ抽筒子及蹴子頭ヲ撮ミ遊頭ヲ九十度旋回シテ蹴子ヲ槓桿ノ方側ニ位置セシメ遊頭ヲ圓筒ヨリ徐ニ抽出シ抽筒子及蹴子ヲ遊頭ヨリ離脱ス。

2、擊鐵ノ擊發彈ヲ剝割端狀底ニ移シタル後擊莖尖部ヲ小銃分解器ニ裝シ左手ニテ少シク圓筒ヲ壓下シ右手ノ拇指ト食指トニテ擊莖駐螺ヲ撮ミ發條ヲ強ク壓迫シツツ戻回シ其螺絲部ヲ擊鐵ヨリ脱シ圓筒ヲ充分壓下シ擊莖駐螺ヲ分離シテ擊莖ヨリ離脱シタル後

圓筒ノ壓迫ヲ緩メ、之ヲ小銃分解器ヨリ脱ス、若小銃分解器ヲ用フルコト能ハザルトキハ右手ノ拇指ト食指トニテ擊莖駐螺頭ヲ撮ミ發條ヲ強ク壓迫シツツ戻回シ、之ヲ擊鐵ヨリ脱シ銃ヲ垂直ニ立テ(臺ニ托スルヲ可トス)銃身ヲ左方ニシ圓筒ヲ左手ニ握リ槓桿ヲ右方トシ其ノ食指ヲ槓桿脚ニ掛ケ擊莖尖部ヲ槓杖頭ニ裝シ右手ニテ圓筒頭部ヲ銃身ト共ニ握リ圓筒ヲ銃身ト平行セシメ、兩手ニテ徐ニ圓筒ヲ壓下シ圓筒ノ壓迫ヲ左手ニ保チ擊莖駐螺ヲ脱落セシメザル様注意シ右手ニテ之ヲ分離シテ擊莖ヨリ離脱シ右手ニテ再ビ圓筒頭部ヲ握リ徐ニ兩手ノ壓迫ヲ緩メ圓筒ヲ左起シタル後右手ニテ銃ヲ保持シ左手ニテ擊莖ノ脱落ヲ防ギ之ヲ槓杖ヨリ離脱スベシ、但シ圓筒ヲ壓迫シ或ハ之ヲ緩ムルニ留リ之ヲ偏倚スルトキハ擊莖尖部ヲ屈曲スルヲ以テ注意スルヲ要ス。

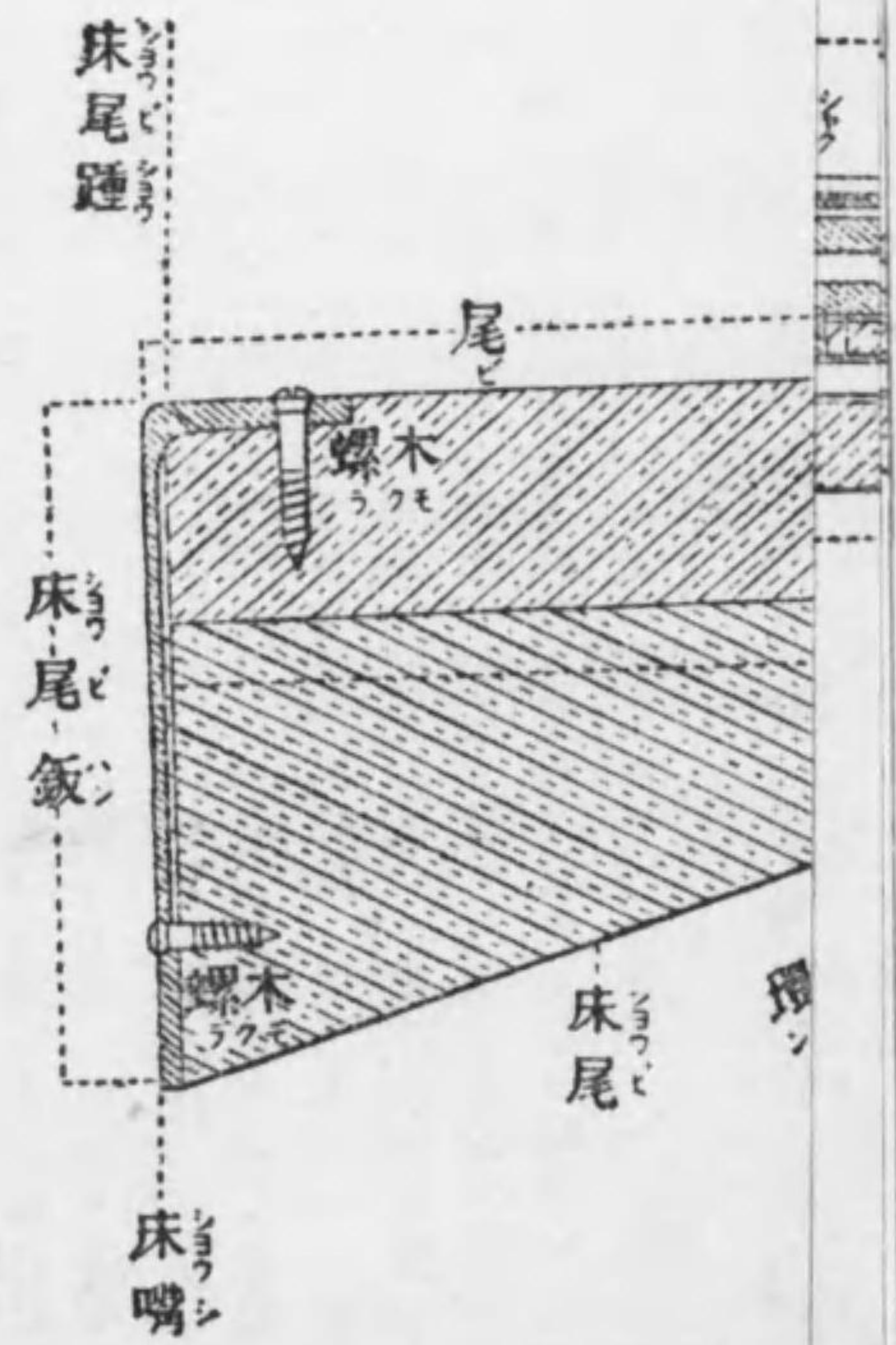
3、擊莖、擊莖發條、擊鐵及副鐵ヲ圓筒ヨリ離脱スベシ。

又擊莖ヲ圓筒ヨリ離脱スルニ當リ擊莖ノ露部圓筒内ニ鈎スルトキハ擊莖ヲ動搖シツツ之ヲ脱スベシ。

三、結合ハ左ノ順序方法ニ依ル。

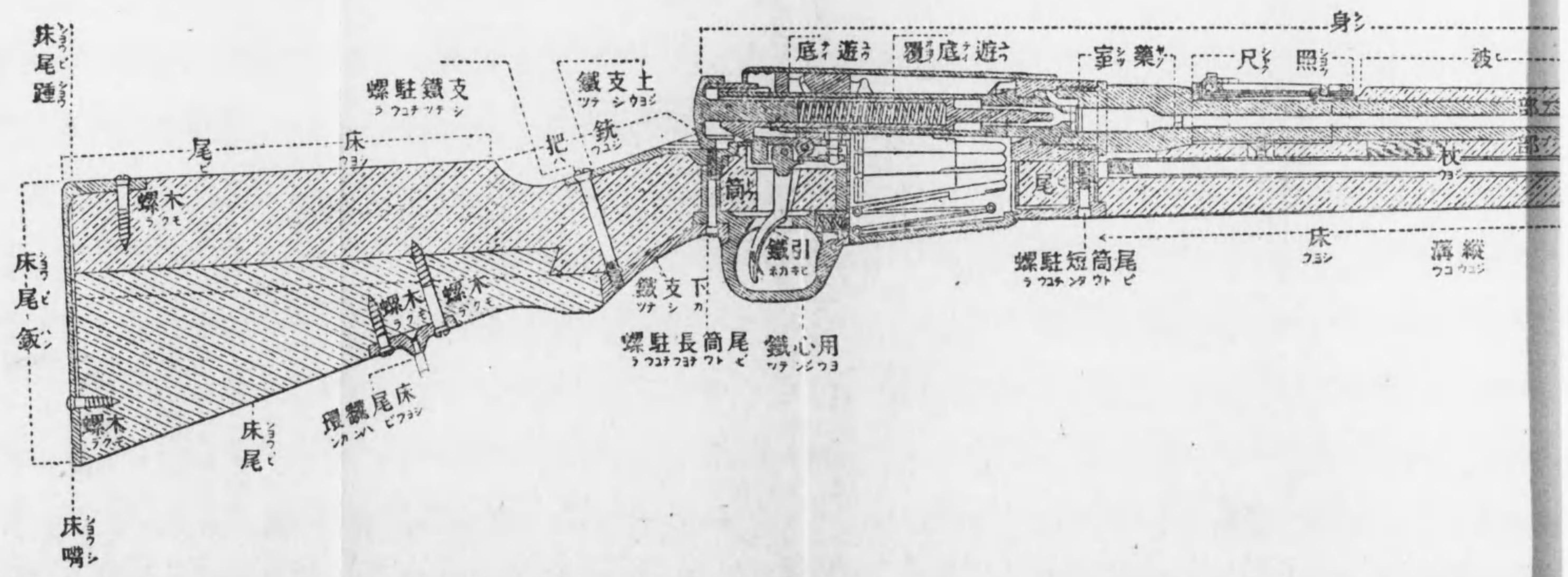
1、擊鐵ノ擊發段ヲ圓筒ノ剝割端狀底ニ位置スル如ク裝入シタル後、副鐵ノ鈎部ヲ槓桿ト反對側ニ在ル如ク副鐵ヲ圓筒ニ挿入(此際擊鐵ト副鐵トノ刻印ハ相對向スルモノト

- ス)シタル後擊莖及擊莖發條ヲ圓筒ニ挿入スベシ。
- 2、擊莖尖部ヲ小銃分解器ニ裝シ左手ニテ圓筒ヲ充分壓下シ右手ニテ擊莖駐螺ヲ擊莖ニ結合シ圓筒ノ壓迫ヲ緩メタル後、更ニ少シク之ヲ壓迫シ右手ノ拇指ト食指トニテ擊莖駐螺頭ヲ撮ミ發條ヲ副鐵ノ溝ニ吻合セシムベシ、若シ小銃分解器ヲ用フルコト能ハザルトキハ銃ヲ垂直ニ立テ(臺ニ托スルヲ可トス)銃身ヲ左方ニシ擊莖尖部ヲ欄杖頭ニ裝シ左手ニテ圓筒ヲ握リ欄杖ヲ右方トシ其中指ヲ欄杖脚ニ掛ケ右手ニテ圓筒頭部ヲ銃身ト共ニ握リ圓筒ヲ銃身ト平行セシメ兩手ニテ徐ニ圓筒ヲ壓下シ之ヲ左手ニテ保持シ其食指ノ扶ニ依リ右手ニテ擊莖駐螺ヲ擊莖ニ結合シ徐ニ圓筒ノ壓迫ヲ緩メ之ヲ欄杖ヨリ脱シタル後右手ノ拇指ト食指トニテ擊莖駐螺頭ヲ撮ミ發條ヲ強ク壓迫シツツ擊莖駐螺ヲ擊鐵ニ螺著ス、但シ圓筒ヲ壓迫シ或ハ之ヲ緩ムルニ當リ偏倚スルトキハ擊莖尖部ヲ屈曲スルヲ以テ注意スルヲ要ス。
- 3、鐵子及抽筒子ヲ遊頭ニ裝著シ之ヲ落下セザル様支持シ遊頭脚部ノ筒ヲ圓筒ニ裝入シタル後旋回シテ鐵子ヲ左側駐退楯上ニ位置セシムベシ。
- 四、遊底ノ裝着ハ左ノ順序方法ニ依ル。
- 1、遊底ヲ離脱シタルトキト同様ニ銃ヲ位置セシメ擊鐵ノ擊發段ヲ圓筒ノ刻割蝸狀底ヨ



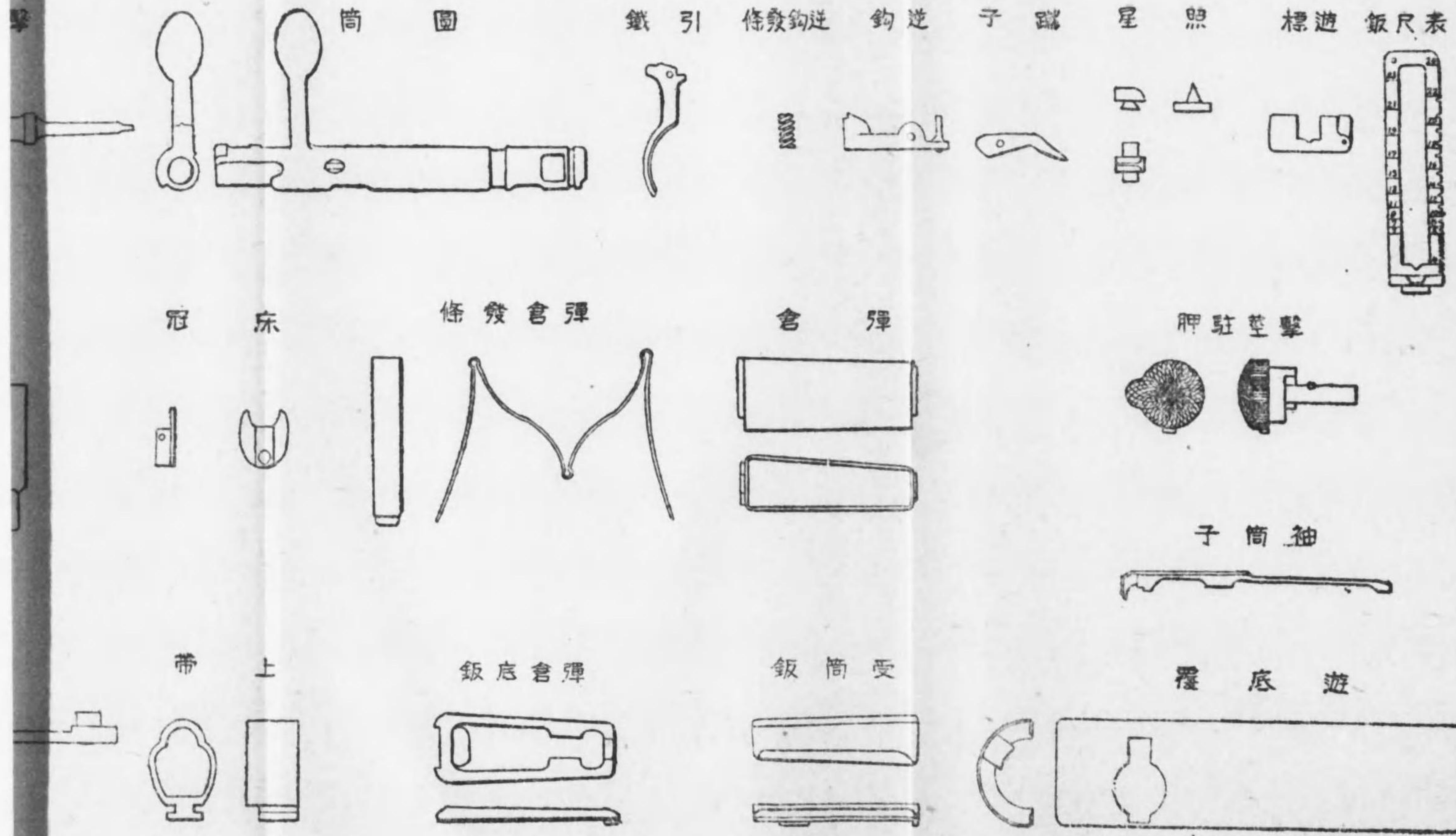
第七十八圖

圖八十七第
圖銃兵步式八

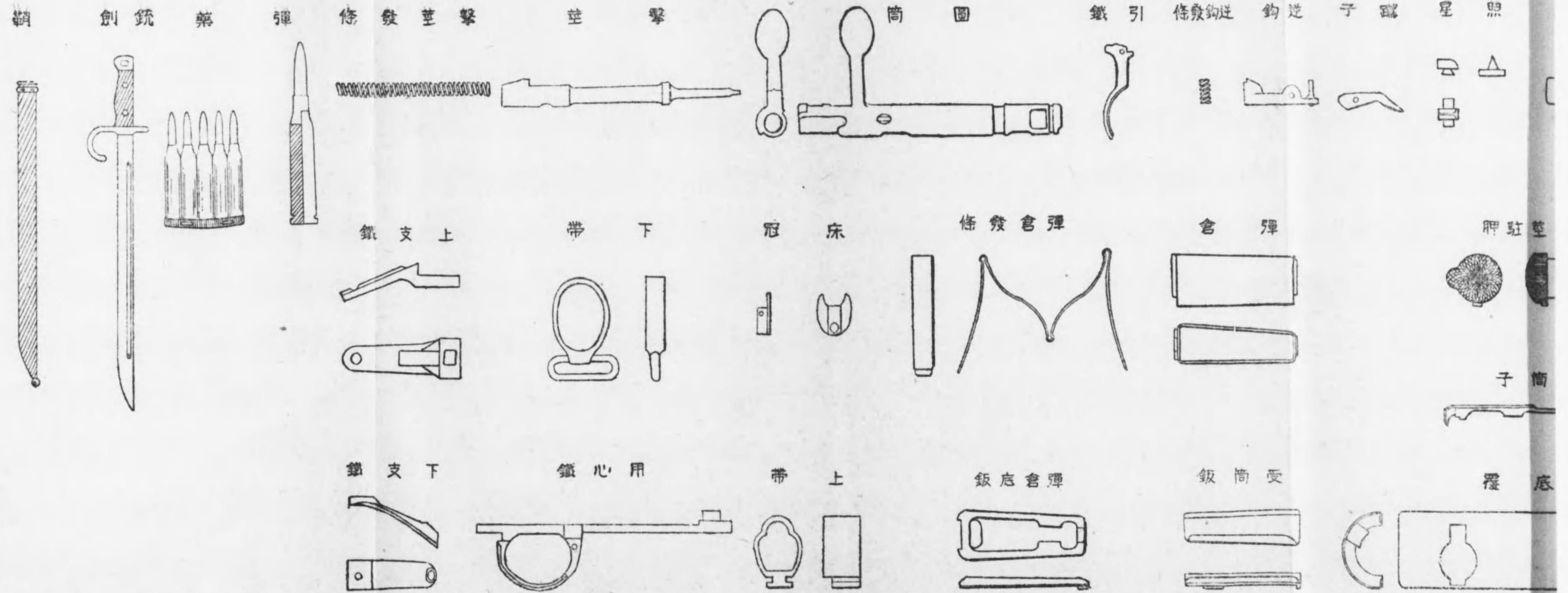


第七十八圖

圖九十七第
 劍銃式年十三•品屬銃兵步式八三



圖九十七第
圖包實·劍銃式年十三·品屬銃兵步式八三



第七十九圖

リ刻割半圓部ニ移シ副鐵ノ鉤部ヲ槓桿ト直角ニ位置セシムベシ。

2、鐵子ハ正シク左方駐退樹ニ位置セシムベシ。

3、右手ニ槓桿ヲ握リ左手ニテ少シク受筒飯ヲ壓シタル後遊底ヲ徐ニ前進セシメ槓桿ヲ右方ニ倒スベシ。

4、引鐵ヲ引キテ擊莖ヲ前進セシムベシ。

第二節 衛生法及救急法

其一要旨

衛生法救急法教育ノ目的ハ常ニ健康ヲ保持シ且急病外傷ニ對シ應急處置ヲ講ジ得ル能力ヲ養成スルニ在リ。

其二衛生法

一、傳染病ノ種類

1、虎列刺ハ熱ナク腹痛セズシテ劇シク下痢嘔吐ヲナシ後ニハ吐物モ大便モ米ヲ淘ギタル汁ノ如クナリ身體急ニ衰ヘ目窪ミ聲嘎レ手足冷エ腓腸攣リ痛ム等ノ症狀ヲ起ス者アリ斯ノ如キ者ハ危険ナリ。

2、赤痢ハ下腹劇シク痛ミテ下痢シ下シタル後忽チ又腹絞リテ下サントス。大便ハ次第

衛生

- ニ分量少クナリ後ニハ糊ノ如キ粘キモノニ血ヲ雜フ。
- 3、鵬室扶私ハ高熱久シク續キ精神鈍クナリ譫言ヲ言ヒ身體次第ニ弱ル。
「バラチフス」モ亦之ニ似タル症狀ヲ呈ス。
- 4、「ペスト」ノ病源、皮膚ノ創傷ヨリ入ルトキハ鼠蹊又ハ腋窩等ニ腫物ヲ生ジ高熱ヲ起シ精神鈍リ酔ヒタル人ノ如クナル、呼吸ニテ病源ヲ吸ヒ込ミタルトキハ病、肺ニツキ咳嗽アリテ痰ニ血ヲ混ヘ同ジク重キ容體トナル。
「ペスト」ノ病原ハ病者ノ腫物膿、痰、咳嗽ノ飛沫、大小便、病アル鼠ノ糞尿、死シタル鼠ニ附キタル蚤等ノ中ニ在リ。
- 5、發疹室扶私ハ疹ヲ生ジ熱高ク重キ容體ヲ現ハス病ナリ。
此ノ病ハ狭キ家屋ニ密居セル不潔ナル人々ニ流行スルコト多シ虱、南京蟲ハ此ノ病ヲ媒介スルモノト認メラル。
- 6、流行性腦脊髄炎ハ劇シキ頭痛アリテ項、攣リ熱高ク精神鈍クナル重キ病ナリ、其病原ハ初メ咽ニ著キテ後ニ腦ニ入ル之ヲ防グニハ痰唾ノ飛沫ヲ吸ヒ込マザルコト、室内ニテ塵ヲ起サザルコト屢々咳嗽スルコト等ヲ必要トス。
- 7、以上ノ外痘瘡(抱瘡)猖紅熱實扶的里ヲ加ヘタル十種ノ病ハ法律ニテ定メタル傳染

病ナリ。

- 8、流行性感胃ハ急ニ熱出テ頭、腰、關節痛ミ咳嗽アリ、肺炎ヲ起シ易ク起セバ重キ容體トナル。
此ノ病ハ咳嗽ノ飛沫ヲ吸ヒ込ムコトニ依リテ傳染ス、故ニ其流行ノ時ニハ口鼻覆ヲ用ヒ屢々咳嗽ヲナスベシ。
- 9、肺結核ニナリタルトキハ色蒼クナリ體重減ジ咳嗽出テ後ニ痰ニ血ヲ混ヘ又ハ血ノミヲ咯ク又熱アリテ寢汗出ヅルコトアリ肺結核ハ早ク治療ヲ加フレバ決シテ不治ノ病ニアラズ。
- 10、麻刺里亞(瘧)ハ毎日又ハ日ヲ隔テ凡ソ同ジ時刻ニ身體震ヒ熱ヲ發スル病ナリ此ノ病ハ患者ノ血ヲ吸ヒタル蚊ニ整サルルトキ傳染ス。
- 二、其他注意スベキ病
胸膜炎ハ胸部ニ刺痛ヲ覺エ倦怠、咳嗽、微熱アリ頭重、頭痛、食慾不振ヲ訴フ病況進行スルトキハ高熱アリ心悸亢進シ呼吸促迫ス、經過不長ニシテ肺結核トナル者アリ。
- 三、寒季ノ注意。
1、手足ヲ不潔ニシ又濡レタル儘寒サニ曝ストキハ凍傷ニ罹リ易シ、被服殊ニ靴下手袋

ノ濡レタルトキ、垢ツキタルトキ等ハ凍傷ニ罹リ易シ、靴小サキトキハ足ノ血行ヲ害シ凍傷ニ罹リ易シ。

2、寒キ時ノ休憩ニハ敏速活潑ナル體操ヲ行ヒ特ニ耳、鼻、手等ヲ擦リ足踏スベシ。

凍傷豫防ニハ樟腦、軟膏ヲ運動前又ハ入浴後ニ擦リ込ムヲ可トス。

3、極寒ノ地ニアリテハ暫時ノ外出ニテ耳、鼻、手、足等ニ急ニ激シキ凍傷ヲ被ルコトアリ。

其他放尿ノ後袴ノ釦ヲ釦ムルヲ忘レテ陰部ニ凍傷ヲ受ケ、又ハ濡レタル手ニテ金屬ニ觸レ凍リ著キテ傷ヲ受クルガ如キコトアリ。

極寒ノ地ニテ急ニ凍傷ノ起ルトキハ蠟ノ如ク蒼白クナリ知覺ヲ失フ、斯カルトキハ直ニ火ニテ煖ムルコトナク、先ヅ雪又ハ冷水ニ浸シタル布片ニテ其部ノ赤クナルマテ摩擦シ後能ク拭フベシ。

4、乗馬ヲ長時間行フトキハ身體ノ運動足ラザルヲ以テ凍傷ニ罹リ易シ、故ニ被服ヲ厚クシ大ナル靴ヲ選ブ等ノ注意ヲ要ス、又場合ニ依リテハ下馬シテ體操ヲ行ヒ或ハ歩行スルヲ可トス。

5、寒地ニテ凍死スルハ氣温低キガ爲ノミニアラズ、風アリテ體温ヲ奪フガ爲ナルコト

多シ、故ニ風ヲ遮ル處ヲ求ムヘシ。空腹、睡眠不足ノトキハ凍ヘ易シ、又酒ヲ飲ミタル者ハ一時温暖ヲ覺ユルモ却テ凍ヘ易シ。

6、身體倦レ精神鈍クナリ歩行踏キ睡ヲ貪ル等ハ凍死ノ前兆ナリ。

7、雪中ニ露營スルトキハ雪ヲ握リテ地面ヲ露ハスベシ、雪ハ踏ミ固ムルモ人ノ體温ニテ融ケ衣服ヲ潤ス虞アリ、握リタル雪ハ周圍ニ積ミ堤ヲ設ケテ風ヲ遮リ、入口ハ風ニ反スル側ニ設クベシ、又雪中ヲ歩行スルトキハ日光ノ反射強キ爲眼ヲ害スルコトアリカメテ雪ヲ視ツメザルヲ可トス。

四、夏季ノ注意。

1、暑時^{エッピヤウ}喝病ノ起ルハ日射烈シク氣温高キ爲ノミナラズ、空氣潤ヒ風ナキガ爲ナルコト多シ、此ノ如キ場合ニ劇動ヲ要スルトキハ特ニ喝病ノ豫防ニ注意スベシ。

2、喝病ハ初メ烈シク汗出テ後ニハ却テ汗止リ口喝キ頭痛ミ、目眩ミ、額赤クナリ元氣衰ヘ歩行踏キ呼バドモ答ヘズ終ニハ卒倒スルニ至ル、又全身痙攣起リ或ハ狂人ノ如ク躁クモノアリ重キトキハ暫時ニシテ死ス。

3、空腹ナルトキハ喝病ニ罹リ易シ、故ニ長途ノ遠足或ハ登山等激動前ニハ努メテ食事

ヲ攝ルベシ。

病後衰弱セル者、睡眠足ラザル者、食慾進マザル者、飲酒セル者、運動ニ慣レザル者等ハ、嘔病ニ罹リ易シ。

4、登山或ハ長途遠足等激動ノ初メハ、用意セル湯茶ハ成ルベク節約シテ用フルヲ可トス、飲ムコト多ケレバ益々渴ヲ覺ユルニ至ル、湯茶ヲ用ヒ盡シ已ムヲ得ズシテ生水ヲ飲ムヲ要スルトキハ良水ヲ選ミテ飲ムベシ。

水道ノ水、山間ノ泉水等ハ多クハ安全ナレドモ、村落耕地ヲ流ルル水、池沼等ノ溜溜水ハ傳染病原ヲ含ム虞アリ。

井水ハ周圍ノ排水良ク、漏水ナク附近ニ傳染患者ナキトキ飲ムコトヲ得ベシ。

5、發汗烈シキトキハ「ホツク」釦ヲ脱シ、又屢々帽ヲ脱ギテ汗ヲ拭ヒ後安靜ニ憩フヲ可トス。

休憩時ニハ荷物ヲ却シ頭、上肢、胸特ニ呼吸體操ヲ行ヒ、清キ水アルトキハ額ヲ洗ヒ頭、胸ヲ拭フベシ。

休憩長キ時ハ體操ヲ行ヒタル後少シニテモ眠リテ疲勞ヲ恢復スルコトニカムベシ。

其三 救急法

一、創傷

創傷ハ小ナリト雖、之ヲ放置スルトキハ塵埃附着シ或ハ塵埃ト共ニ細菌侵入シテ化膿シ又丹毒破傷風等恐ルベキ病氣ヲ惹起スルノ因ヲナス。

又些々タル創傷ヨリ多量ノ出血ヲ見ルトキハ創癒弛緩スルノミナラズ、貧血症ヲ起スコトアリ、故ニ創傷ハ速ニ處置ヲナスヲ要ス。

創ノ處置

1、創傷ノ處置ハ醫師ノ行フモノナリト雖醫師ナキ場合ハ、應急ノ處置ヲナサザルベカラズ、應急ノ處置ハ消毒シタル繃帶ヲ以テス。

2、指ニハ細菌著キ居ルガ故ニ消毒セザル指ヲ創ニ觸ルルハ害アリ。

3、其他紙手拭等モ亦細菌ノ著キ居ルコトアルヲ以テ、創ニ觸レシムベカラズ。

創ヲ拭ヒ又ハ洗ヒ淨メントスルトキハ却テ之ガ爲ニ細菌ヲ創ニ入ラシムルノ虞アリ。

故ニ拭ヒ洗フコトナク其儘假繃帶ヲ施スヲ可トス。

繃帶法

1、假繃帶ヲ行フニハ消毒シタル「ガーゼ」ヲ指ニテ撮ミ物ニ觸レヌヤウ「ガーゼ」ヲ開キ指ノ觸レザル處ヲ創ニ當テ殘レル「ガーゼ」ヲ其上ニ重ネ第八十圖其一、其二、其三ノ

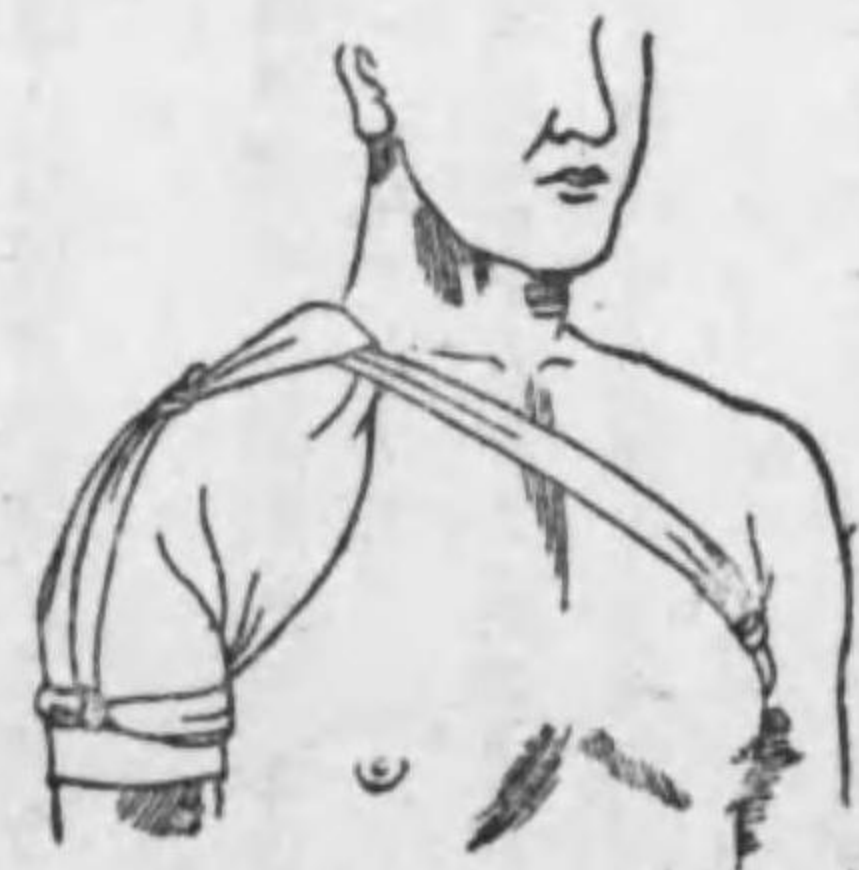
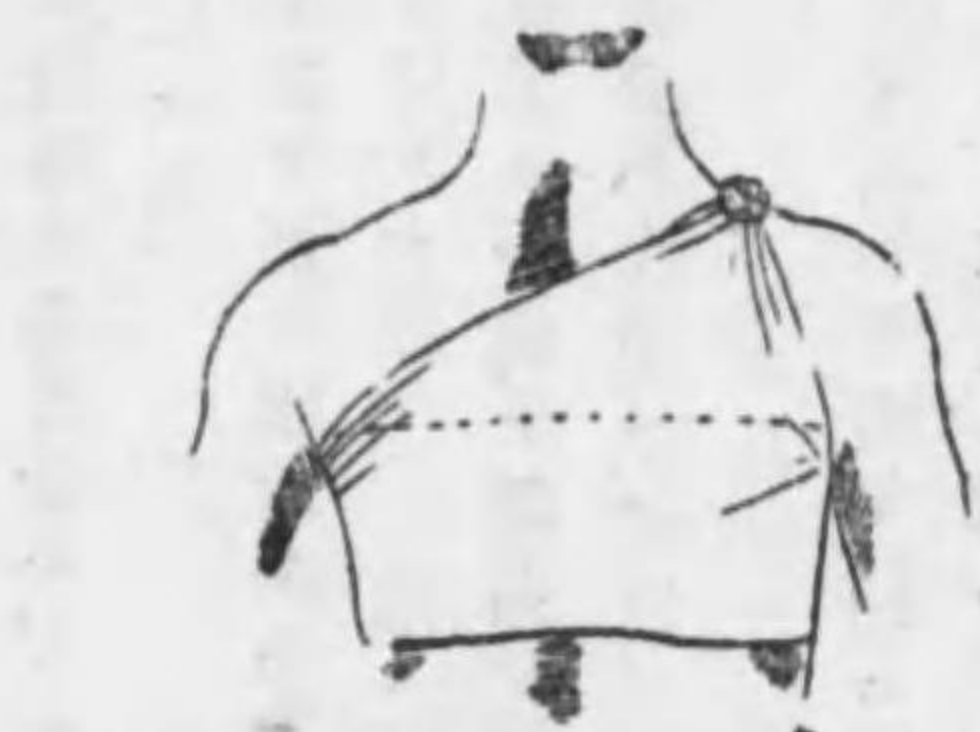
如ク繙帶ス。

第八十圖
(一 共)



(二 共)

(三 共)



消毒シタル「ガーゼ」ノ外ニ沃土丁幾、酒精、脱脂綿等アラバ脱脂綿「ガーゼ」ヲ酒精ニテ濕ホシ先ヅ手指ヲ消毒シタル後、別ノ脱脂綿「ガーゼ」ヲ酒精ニテ濕シ創ノ周圍ヲ清潔ニ拭ヒ沃土丁幾ヲ以テ創ヲ良ク消毒シ消毒「ガーゼ」ノ指ニ觸レザル所ヲ創ニ當テ、假繙帶ヲ施シ醫師ノ手當ヲ受クルヲ可トス。

2、消毒シタル繙帶材料沃土丁幾酒精脱脂綿等ナク、且急ヲ要スルトキハ已ムヲ得ズ手拭手巾又ハ布片等ヲ折り疊ミ創ニ當テタル後手拭手巾等ヲ以テ卷キ速ニ醫師ノ手當ヲ受クベシ。

止血法

- 1、血ハ心臟ヨリ動脈ニ通シ次第ニ小サキ動脈ノ枝ニ入りテ全身ヲ循リ、靜脈ニ合シテ心臟ニ歸ル。
動脈淺キ處ニアルトキハ指ニテ脈ヲ觸ル、是ノ所ヲ脈處ト云フ。
- 2、上肢又ハ下肢ヨリ血出ヅルトキハ骨ノ折レ居ラヌ限り其部ヲ高クスベシ。
- 3、血甚シク迸リ出ヅルトキハ危険ナリ速ニ創ヨリ心臟ニ近キ脈處ヲ骨ニ向ケ壓シテ血ヲ止ムベシ。
- 4、脈處ノ壓シ方ハ左ノ如シ。

衛生

圖一十八第 (イ)



指ヨリ血出ヅルトキハ指ノ根ノ兩側ニ拇指ト示指トヲ當テ強ク壓スベシ。(第八十一圖)

—(四〇六)—

圖二十八第
合場フ行テ血止ノ人他



圖三十八第
合場フ行テ血止ヲ自



(第八

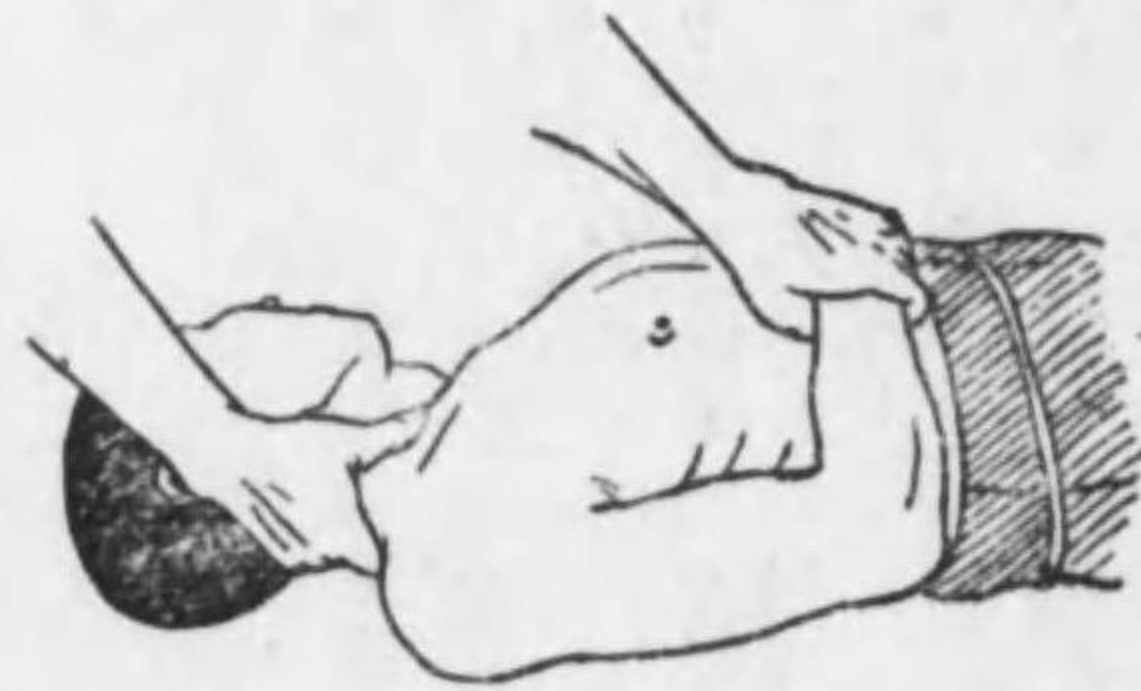
(ロ) 手又ハ前膊ヨリ血出ヅルトキハ上肢ヲ堅テ上膊ノ力瘤ノ内側ナル淺キ溝ノ脈處ニ拇指ヲ當テ他ノ指ヲ後ニ廻シテ握リ拇指ノ腹ニテ強ク壓スベシ。(第八十二圖、第八十三圖)

(ハ) 上膊或ハ腋ノ下ヨリ血出ヅルトキハ頸ノ下鎖骨ノ上ノ窪ニアル脈處ニ拇指ヲ當テ他ノ四指ハ肩ノ後ニ廻シ拇指ノ腹ニテ深ク内下方ニ向ヒ壓スベシ。(第八十四圖)

(ニ) 脚ヨリ血出ヅルトキハ仰ギ臥サシメ、鼠蹊ノ中央ニアル脈處ニ兩拇指ヲ當テ骨ニ向ヒ壓

衛生

圖四十八第



圖五十八第



—(四〇七)—

スベシ。(第八十五圖)

5、上肢又ハ下肢ヨリ血出ヅルコト甚ダ多キガ爲、指ニテ壓スルモ止マザルトキハ上肢ナラバ上膊下肢ナラバ、大腿ノ脈處ニ圓キ物ヲ當テ帶様ノ物ヲ緩ク卷キ末端ヲ結ビ之ニ棒ノ類ヲ挿シ廻シテ緊メ血止マルニ至リテ挿シタル物ノ端ヲ止メ置クベシ緊メテヨリ二時間ナルトキハ緊メタルモノヲ緩メ尙血出ヅルトキハ暫クアリテ再ビ緊メ括ルコトヲ得。(第八十六圖其一、其二)

第八十六圖 (一 共)



寒氣烈シキトキ緊メ括リタル肢ハ容易ニ重キ凍傷ニ罹ルガ故ニ、血甚シク出ヅルトキノ他緊メ括ルコトハ避クルヲ要ス。

骨折

- 1、骨折ニハ同時ニ其部ノ皮ニ創アルコト多シ。創アルトキハ先ヅ假纏帶ヲ行ヒ後骨折ノ處置ヲナスベシ。
 - 2、上肢下肢ノ骨折レタルトキハ形ヲ變ジ短クナリ痛甚シクシテ腫レ、傷者自ラ之ヲ動スコト能ハズ之ヲ動かサントスルトキハ劇シキ痛ミヲ覺ユルヲ知ルベシ。
 - 3、傷キタル肢ヲ動カシ又ハ變リタル形ヲ直サントスルコト勿レ、骨折レタル疑アルトキハ骨折アリト看做シテ取り扱フベシ。
 - 4、上肢又ハ下肢ノ骨折レタルトキハ次ノ處置ヲナス。骨折ノ處置ハ折レタル骨ノ動カヌヤウニナスヲ目的トス。
- (イ) 肘ヨリ上又ハ下折レタルトキハ簾、蓆、厚紙ノ如キモノニテ卷キ又ハ軟ナルモノヲ當テタル上ニ内側ニ短キ棒ノ類外側ニ長キ棒ノ類ヲ當テテ括リ、第八十七圖其一其二ノ如ク胸ニ吊リテ支ヘ又健側ノ手ニテ支ヘ持タシムベシ。

圖七十八第
(一 共)



(二 共)



(ロ) 膝ヨリ下折レタルトキハ軟キモノヲ當テタル上ニ下肢ノ内側ニ足ヨリ大腿ノ中央ニ達スル棒ノ類ヲ當テ外側ニ足ヨリ腰ニ達スル棒ノ類ヲ當テ括リ附クベシ。
棒ノ類ナキトキハ長キ藁束、又ハ卷キタル外套ノ一端ヲ大腿ノ中央ノ内側ニ當テ蹠ニテ折り曲ゲ他ノ端ヲ大腿ノ中央外側ニ達セシメ、膝ノ上下ニテ括リ附ケ支フルモ可ナリ。(第八十八圖共一其二)

圖八十八第
(一 共)



(二 共)



(ハ) 膝及膝ヨリ高キ所ニテ骨折レタルトキハ、外側ニ足ヨリ脚ニ達スル棒ノ類ヲ當テ健側ノ下肢ト共ニ括ルベシ。(第八十九圖)
棒ノ類ニハ尙木ノ皮狭キ板「アリキ」等ヲ用フル事ヲ得。

第九十八圖



二、急病

卒倒

1、被服特ニ胸ノ緊縛ヲ弛メ、空氣ノ流通好キ處ニ安靜ニ臥サシムベシ。即チ、暑時室内ニテハ窓ヲ開キ通風ヲ好クシ、室外ニ在リテハ蔭ヲ選ビ寒時ニハ室ヲ暖メ室外ニ在リテハ暖キ所ヲ擇ブ。

2、顔色ノ蒼キモノハ頭ヲ低クシテ臥サシメ、聲高ク喚ビ醒シ羽又ハ毛ノ類ニテ鼻ノ孔ヲ刺戟シ醋ノ如キ臭強キモノヲ嗅ガシメ、額胸ニ水ヲ灌ギ胸、上肢、下肢ノ皮膚ヲ心臟ノ方ニ向ケテ摩リ胸、掌、蹠ヲ刷毛ニテ擦ル等ノコトヲ試ムベシ。吐クトキハ頭ヲ横ニ向クベシ。

呼吸弱キトキハ人工呼吸法ヲ行フベシ。

3、顔色ノ赤キモノハ頭ヲ高クシテ臥サシメ頭、顔、胸ヲ冷シ手足ニ輕キ按摩ヲ試ミ催眠セシムルヲ可トス。

如何ナル場合ニ於テモ腹部ハ冷却スベカラズ、醒メタルトキハ冷メタル湯茶又ハ水ヲ飲マシムベシ。

4、總テ創傷ノタメニ卒倒ノ狀ニ在ル者ハ手柔ニ取扱ヒ、濫ニ人工呼吸法等ヲ行フベカラズ。

火傷電氣傷

1、人ヲ火ノ中ヨリ救ヒ出サントスルトキハ、衣袴ヲ濡シ頭ト頸トニ濡レタル巾類ヲ纏フベシ。
被服ノ燃ユル人ハ之ヲ速ニ地ニ置レシメ被服寢具等ヲ以テ覆フベシ。

2、電氣ニ感シタルモノヲ救フニハ先ヅ電流ヲ止ムルコトニ注意シ、止メ難キトキハ危
險ナルコトヲ慮リテ不用意ニ近ヅクベカラズ。

之ヲ行フニハ硝子陶器乾キタル木材(板、梯子、腰掛、机、下駄等)竹、被服、毛布、
藁等ノ上ニ乗り乾キタル布片被服又ハ毛布ニテ手ヲ包ミ然ル後患者ノ衣ヲ擱ミ又ハ木
竹等ヲ以テ電線ヨリ離スベシ。其後ハ卒倒者ト同様ノ處置ヲナスベシ。凡テ濡レタル
モノ、金物類ハ電氣ヲ傳ヘ易キヲ以テ用フルベカラズ。

3、火傷(湯傷)電氣傷ノトキハ徐ニ其傷ヲ露スベシ衣片ノ皮ニ膠著シタル處ハ強テ引キ
離サズ剪ニテ周圍ヲ切り取ルベシ。

皮赤クナリタルノミナルトキハ水ニテ冷スベシ。

水疱ヲ生ジタルトキハ薄皮ヲ破ルコト勿レ、皮膚爛レタルトキハ「ガーゼ」ニテ掩ヒ綿
帶スベシ、(指ハ一本毎ニ綿帶スベシ)

凡テ火傷(湯傷)ニハ清潔ナル油ヲ塗ルヲ良トス。

又火傷(湯傷)直後ナルトキハ油ニ食鹽ヲ交セテ塗ルトキハ効果更ニ多シ。

喝病(日射病熱射病)

被服ノ緊縛ヲ弛メ空氣ノ流通好キ處ニ臥サシムベシ、臥サシムルニハ蔭アル地ヲ選アベ

シ。

頭ヲ高クスベシ。扇ノ類ニテ風ヲ送ルベシ、全身殊ニ頭ト胸トヲ冷スベシ、之ガ爲顔胸

ニ水ヲ注ギ濡レタル布片ニテ胸ヲ覆フベシ、水アラバ手拭ニ包ミ頭胸ニ當ツベシ、上肢

下肢ヲ摩ルベシ呼吸弱キトキハ人工呼吸法ヲ行フベシ。

醒メタルトキハ、冷水ヲ十分飲マシメ又醋ノ如キ強キ臭アルモノヲ嗅ガシメ、再ビ失心

スルコトヲ防グベシ。

醒メテ忽チ眠リ又頻リニ讒言ヲ發スルモノハ重態ナルヲ以テ、監視ヲ怠ルベカラズ、重

キ喝病患者ハ醒メタル後モ早ク運搬スベカラズ。

凍死

凍死セントスル患者ヲ救フニハ、急ニ温ムルハ禁物ナリ、又凍ヘタル人ノ體ハ折レ損ジ

易キガ故ニ觸レ動カスニハ手柔ニ取扱フベシ。

風ヲ受ケザル地又ハ家屋アラバ、冷ナル室ニ移シ被服ヲ除キ冷水ニ浸シタル布片又ハ雪

ニテ輕ク全身ヲ摩擦シ體柔ナルニ至ラバ冷ナル寢具ノ上ニ移シ乾キタル毛織物又ハ布片

ノ類ヲ以テ全身ヲ摩擦スベシ、呼吸弱キトキハ人工呼吸法ヲ行フベシ、醒メタルトキハ

微温ナル湯茶ヲ飲マシメ次テ少量ノ酒類ヲ飲マシムベシ。

寢具ヲ被フニハ次第ニ厚クシ室ヲ暖ムルニハ徐ロニ暖ムベシ。

溺水

先ゾ被服ヲ除キ清キ布片ヲ食指ニ纏ヒ口ト咽トノ泥土ヲ擲ヒ出スベシ。

次ニ腹ニ丸メタル被服ヲ當テ上體ヲ低クシテ俯サシメ掌ヲ溺者ノ額ニ當テテ首ヲ反ラセ背ヲ叩キ、或ハ腰ヨリ背ニ向ヒ掌ニテ強ク擦リ上ゲ水ヲ吐カシムベシ。

第九十圖



體ヲ逆ニ吊ルハ不可ナリ、呼吸止マリアルカ又ハ甚ダ弱キトキハ速ニ人工呼吸法ヲ行フベシ。(第九十圖)

窒息

1、室内ニ炭酸瓦斯等溢レタルトキハ窓及戸ヲ開クベシ、己ムヲ得ザルトキハ破壊スルヲ要ス。

瓦斯溢レタル室ニハ火ヲ携フベカラズ、蓋シ危險ナレバナリ。

井、密、坑道ノ中ニ有害瓦斯アルトキハ布ノ類ヲ振り動カシ又ハ開キタル傘ニテ換氣ヲ圖ル等ノ手段ヲ試ムベシ。

2、差シ入レタル燈火ノ消ユルハ尙有毒瓦斯ノ殘レル證據ナリ、救助ノ爲ニ之ニ入ルニハ防毒覆面ナキ場合ニハ石灰水ニ浸シタル布又ハ海綿ヲ口ニ當テ救助索ヲ胸ト肩トニ結ビ又手ニ信號索ヲ結ビテ入ルベシ。

3、救ヒ出シタル人ハ之ヲ空氣ノ流通好キ處ニ仰キニ臥サシメ、被服ヲ除キ顔ヲ水ニテ拭ヒ胸ニ水ヲ灌ギ又ハ水ニ浸シタル布片ヲ當ツベシ。呼吸止マリアルカ或ハ弱キトキハ速ニ人工呼吸法ヲ行フベシ。

4、瓦斯ノ種類ニ依リ、自ラ其處置ヲ異ニスルモ共通セル主ナル救助法左ノ如シ。

(イ) 瓦斯ニ中レル者ヲ救フニハ瓦斯ナキ處ニ移シ靜ニ仰キ臥サシメ、速ニ被服ヲ脱ガセ覆面ヲ除クベシ。

(ロ) 鹽水又ハ水ヲ飲マセ指ノ尖等ニテ咽ヲ刺戟シ吐カシムベシ、重曹水ヲ飲マスハ毒ヲ消ス效アリ。

(ハ) 呼吸困難ニ陥ルトモ人工呼吸法ヲ行フベカラズ。埋沒假死

埋没者ヲ救ヒ出サントスルトキハ、土ノ再ビ崩ルルコトアルヲ慮ルベシ。骨折レタルコトアルヲ慮リ取扱ヒニ注意スベシ。鼻口咽ノ土等ヲ除キ速ニ人工呼吸ヲ行フベシ。

腹部打撲

腹部ヲ打チ氣遠クナリ痛劇シキモノハ靜ニ仰キ臥サシメ、膝ヲ曲ゲ談話怒責ヲ禁ジ飲食物ヲ與フルコトナク、速ニ診斷ヲ受ケシムベシ。嘔氣アルモノハ一刻ヲモ猶豫スベカラズ。

咬傷、熱傷

傷ヨリ全身ニ毒廻リ大事ニ至ルコトアリ。速ニ傷ノ周圍ヲ輕ク壓シテ血ヲ出スベシ。又ハ口ニテ吸ヒ吐キ出スベシ。上下肢ニ在リテハ創ヨリ心臟ニ近キ上ノ部ヲ強ク括ルベシ。

中毒

中毒患者ノ救急處置ハ速ニ吐カシムルヲ以テ最良トス。若自ラ吐カザルトキハ多量ノ微温湯鹽湯又ハ水ヲ飲マセ指ノ尖若ハ羽等ニテ咽ヲ刺戟シテ十分ニ吐カシムベシ。生卵牛乳食用油「バター」若ハ湯茶ヲ飲マシムレバ毒ヲ稀クスル効アリ、但シ燐(猫いらす等)ノ毒ニハ牛乳油「バター」ヲ與フベカラズ。

中毒ヲ起セシ飲食物藥及吐物ハ注意シテ保存スベシ。

三、人工呼吸法

人工呼吸法ハ次ノ如ク行フベシ。空氣ノ流通好キ所ヲ選ビ敷クベキ物アラバ敷キテ其上ニ仰キ臥サシムベシ。被服ヲ脱ガセ被服ノ類ヲ卷キタルモノヲ肩ノ下ニ差シ込ミ頭ヲ低クスベシ。患者ノ舌落ち込ミテ喉頭ヲ塞ギ居ルトキハ救助者ハ先ヅ舌ヲ引キ出シテ布片ニテ頤ニ括リ附クベシ。又ハ絲ニテ舌ヲ縛リ、絲ヲ頂ニ廻シテ結ビ或ハ舌ヲ箸ノ如キ二本ノ棒ニテ挾ミ兩側ヲ縛リ棒ノ端ニテ頤ニ支ヘ口ヨリ出シ置クベシ。(第九十一圖)救助者ハ患者ノ頭ノ端ニ跪キ次ノ運動ヲ反覆スベシ。

第九十一圖



第一動(ひきこつと長ク呼唱ス)
 救助者ハ左右ノ手ニ
 テ患者ノ兩肘ノ下部
 テ外側ヨリ握ミ、兩
 上肢ヲ外側ニ開キツ
 ツ十分ニ頭ノ上ニ舉
 グ(第九十二圖)(息
 チ吸ヒ込マス運動)

第 九 十 二 圖



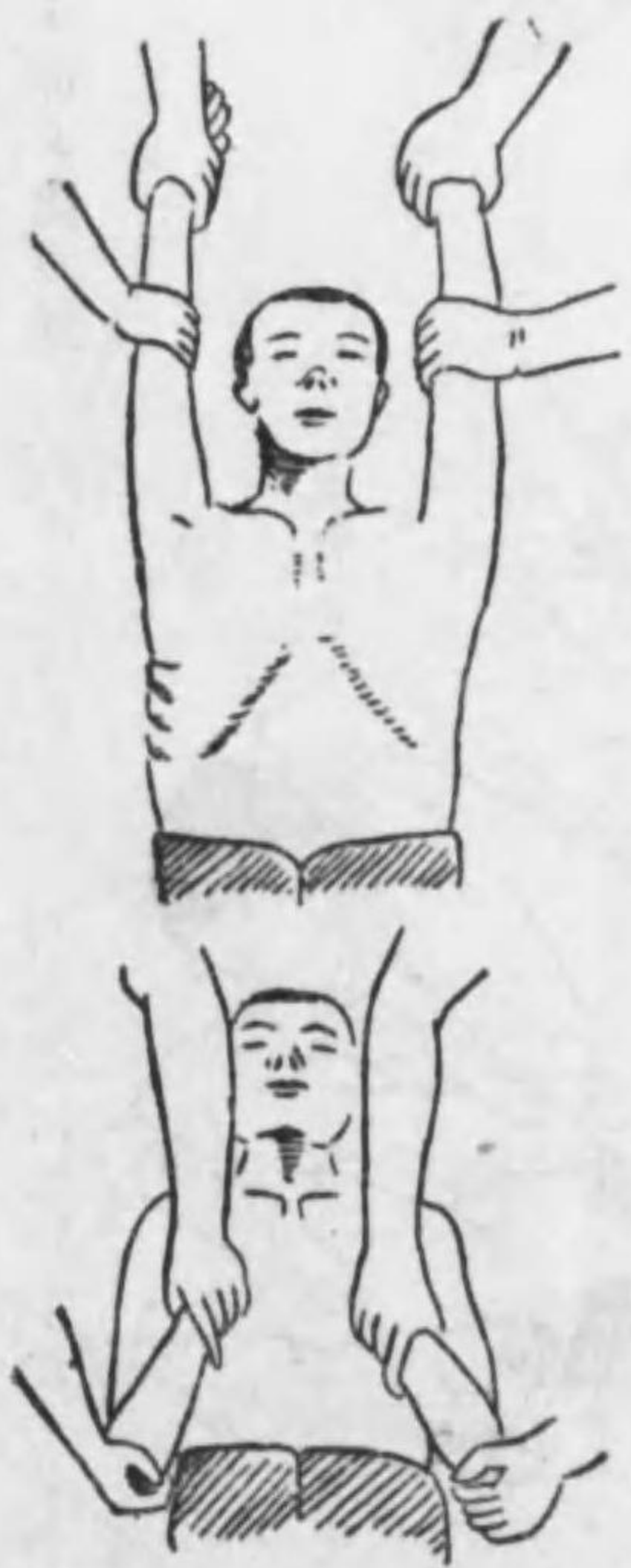
第二動(ふたつと長ク呼唱ス)
 與ゲタル上肢ヲ患
 シ患者ノ上膊ニテ肋ヲ強ク壓スベ
 シ。(第九十三圖) 息ヲ押シ出ス運
 動)

第 九 十 三 圖



救助者二人アルトキハ交代ニ之ヲ行ヒ、又ハ患者ノ兩側ニ座リ其側ノ上肢ヲ摑ミ呼唱ヲ合セテ此ノ運動ヲ行フコトヲ得。(第九十四圖)

圖四十九第



2、人工呼吸法ニハ尙次ノ如キ方法アリ。

仰キ臥サシメタル患者ノ腰ノ上部ニ被服ノ類ヲ挿ミ胃窩^{ミツマ}ヲ最モ高クシ肩ト頭トヲ低クスベシ。

兩上肢ハ頭ノ上ニテ頭ヲ押ヘタル形ニ置クベシ、救助者ハ要スルトキ先ヅ一ノ如ク患者ノ舌ヲ引キ出シ置クベシ。

救助者二人アルトキハ一人ノ患者ノ頭ノ端ニ跪キ、下顎ノ角ヲ推シテ下ノ齒列ヲ上ノ齒列ヨリモ前ニ出シムベシ。(第九十五圖)

救助者ハ患者ノ腰ニ跨リテ跪キ次ノ運動ヲ反覆フベシ。

第一動(ひざーつと長ク呼唱ス)

兩手ノ掌ヲ開キ拇指ヲ患者ノ胃窩ニ他ノ四指ヲ兩側胸ノ下部ニ當ツ(第九十六圖其一)(準備ノ運動)

第二動(ふたーつと長ク呼唱ス)

自己ノ身ヲ伏セツツ體重ヲ兩手ニカケ肋ヲ絞ルヤウニ壓ス(第九十六圖其二)(息ヲ押し出ス運動)

圖五十九第



第九十六圖

(一 共)



(二 共)



第三動 (みつつと呼吸ス)
急ニ身ヲ起スト共ニ兩手ノ力ヲ抜キテ掌ヲ少シク患者ノ胸ヨリ離ス (第九十七圖) (息ヲ吸ヒ込マヌ運動)

第九十七圖



3、人工呼吸法ノ運動ハ凡ソ一分間ニ十五回ナルベシ。
人工呼吸法ハ患者自ラ呼吸スルニ至ル迄續クベシ、時トシテハ二時間以上續ケテ蘇生スルコトアリ、早ク見捨ツベカラズ。

第三節 結繩法

其一 要旨

結繩法教育ノ目的ハ手指ノ働キヲ巧ミニシ、以テ物事ヲ齊整敏活ニ處理スル外物品材料ノ散亂ヲ防ギ、且材料ヲ節約スル凡帳面ノ習性ヲ涵養スルト共ニ、實用ニ供スルニ在リ。
其二 作業要領

結繩

1、網、繩及鐵線等ハ材料ノ種類及太サ又ハ保存ノ状態等ニ依リ強度ヲ異ニスルガ故ニ、之ガ使用ニ當リテハ其用途ニ應ジ網ノ種類ヲ選ビ且其卷數ヲ適當ニスルヲ要ス。網ノ強度不充分ナル爲、或ハ其卷數ノ不足ニ依リ往々不側ノ危害ヲ惹起スルコトアルヲ以テ結束材料ノ使用ニ當リテハ深甚ナル注意ヲ必要トス。



圖八十九第

(ハ)(ロ)

其要領第九十八圖ノ如シ。

荷造網等ハ腕長ヲ利用シテ縮束ス、其要領第九十九圖ノ如シ。
大綱等ハ兩腕ノ長サヲ利用シ(第九十九圖其三)鐵線ハ木片等ニ纏絡シテ使用スル

2、網、繩及鐵線等ヲ使用スルニハ常ニ其用途ニ應ジテ之ヲ整正ニ準備シ、作業ニ方リ混雜ヲ來タサザルコトニ注意セザルベカラズ、之ガ爲網ハ各條毎ニ正シク結束(第九十八圖)シ或ハ若干條毎ニ集束シ置クベシ。
3、結束要領ノ一例左ノ如シ。
(イ) 小紐等ハ掌ヲ利用シテ小輪形ヲ作ルヲ可トス、

圖九十九第



(二 其)



ヲ便トス。

(ニ) 網ハ其綱以テ屈曲シ交叉セシメタルモノヲ環ト謂ヒ(第百圖)之ヲ交叉スルコトナクシテ近接セシメタルモノヲ半輪ト謂ヒ(第百一圖)其綱端ヲ

圖百第



圖一百第



結 繩

—(四二八)—

圖二百第



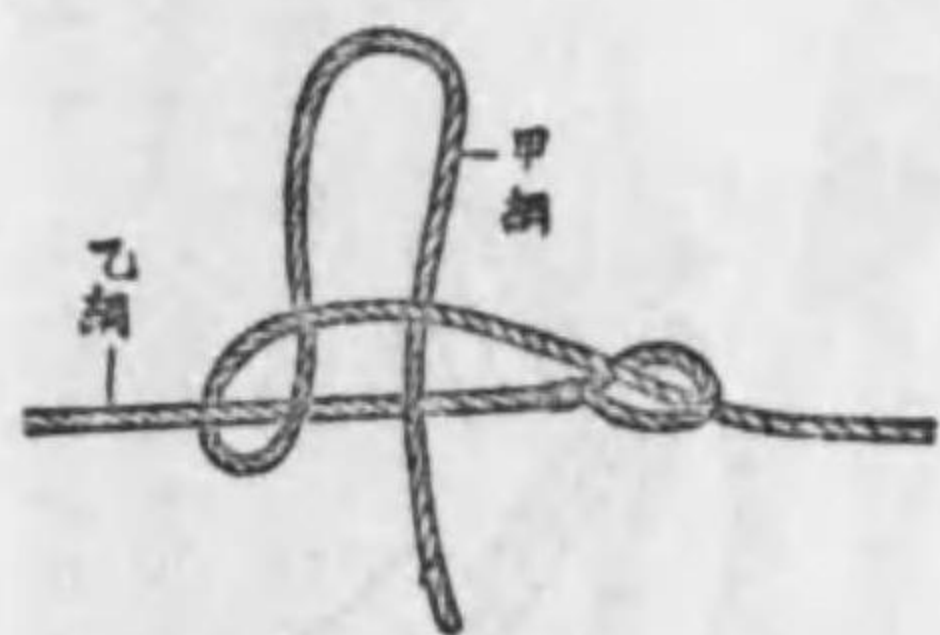
圖三百第



網身ニ結合セシモノヲ蛇口ト謂ヒ(第百二圖)
 又環ヲ作り其一網端ヲ環ノ内ニ通ジタルモノヲ
 單結ト謂フ(第百三圖)
 (ホ) 抗力不充分ナル網、繩、鐵線ハ其二條若ハ數
 條ヲ結合セテ一條トナシ其抗力ヲ大ナラシム此作業ヲ結合ト謂ヒ二條ノ網端ヲ互ニ
 相連結スルヲ結著ト謂ヒ又網ヲ以テ二物體ヲ互ニ連結スルヲ結束ト謂フ。
 (ハ) 網ノ使用ニ當リテハ二人以上一組ニテ作業スルヲ便トス此場合ニハ協同作業ヲ確
 實ナラシムルコト肝要ナリ。

圖四百第

結 解 引



圖五百第



一、網 合
 二條(三條)ノ網(繩)ハ其網(繩)身ヲ捕ヘ
 テ一端ヨリ逐次兩網(繩)ヲ撚ノ方向【兩
 網(繩)ノ撚ノ方向ハ同一ナルヲ要ス】ニ
 捻回シツツ結合ス。
 二、接 合
 一、網ノ結合ニハ引解結、八重結、織

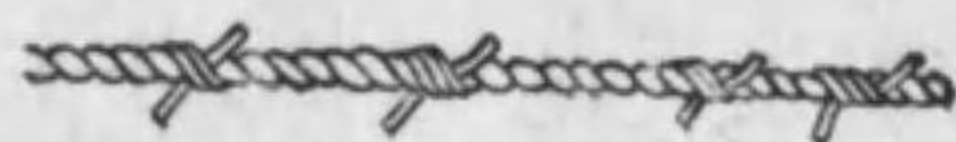
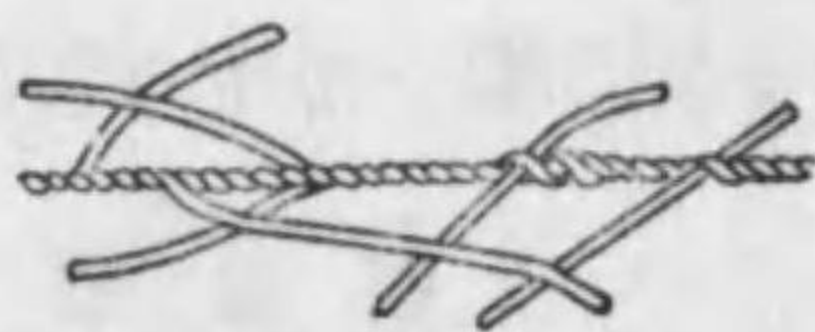
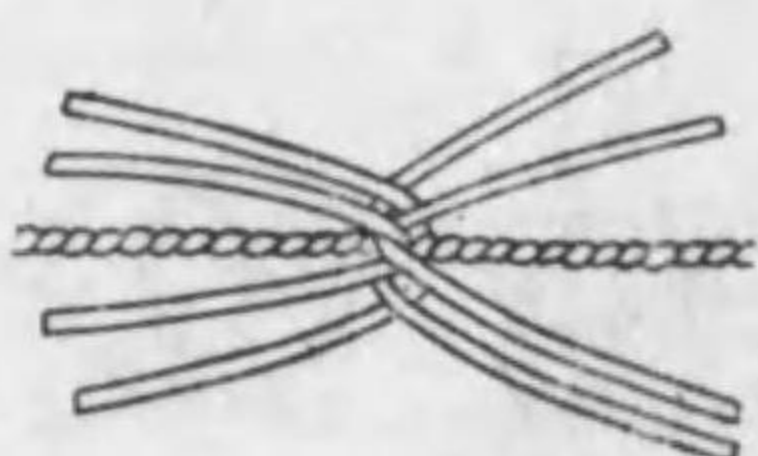
工結及綯接結等ヲ用フ。
 (イ) 引解結、八重結、第百四、第百五圖ノ如シ。
 (ロ) 織工結第百六圖ノ如シ。

緊締後鉤ヲ作ル

圖六百第



圖七百第



圖八百第



結 繩

(ハ) 綯接結第百七圖ノ如シ。
 三、結 著
 一、網ノ結著ニハ蛇口結、模合結、舟子結、雲雀結、副結
 鈎結、滑縮結、鵜ノ首結等ヲ用フ。

—(四二九)—

(リ)(チ)(ト)
 結 繩
 錨結第百十四圖ノ如シ。
 滑締結第百十五圖ノ如シ。
 錨ノ首結第百十六圖ノ如シ。

圖二十百第



圖三十百第



圖五十百第



圖四十百第



圖六十百第



—(四三二)—

(へ) 鈎結第百十三圖ノ如シ。

(ホ) = (ハ)
 舟子結第百十圖ノ如シ。
 雲雀結第百十一圖ノ如シ。
 副結第百十二圖ノ如シ。

圖九百第



圖十百第



圖一十百第

結雀雲



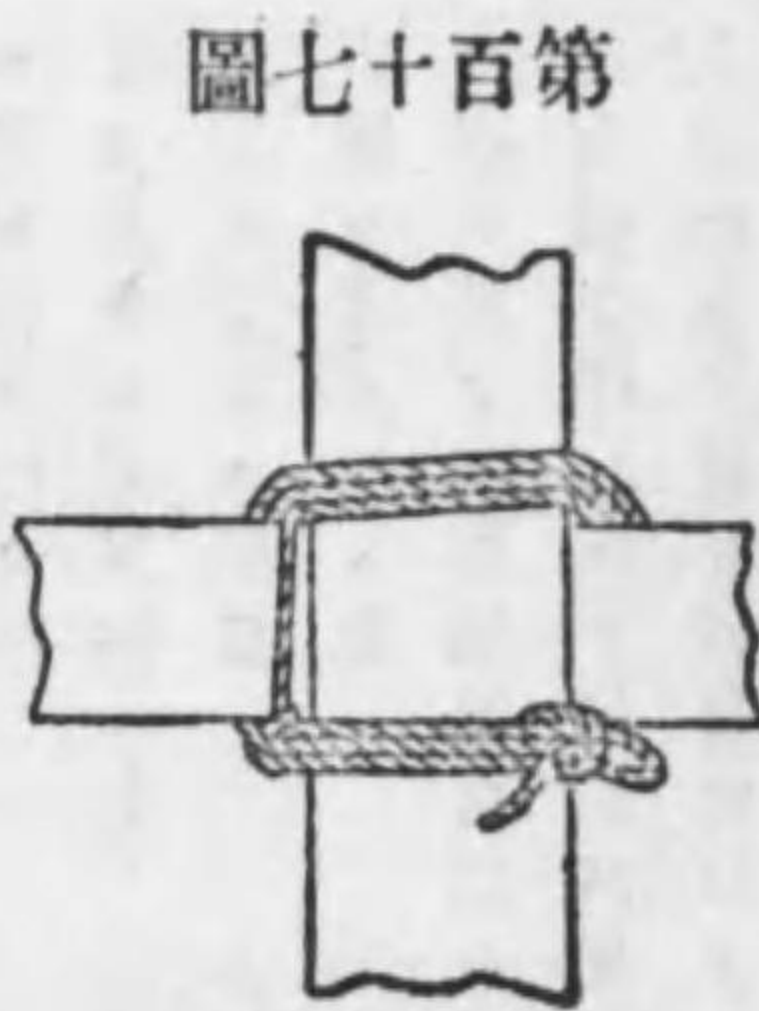
(ロ)(イ)
 結 繩
 蛇口結第百八圖ノ如シ。
 模合結第百九圖ノ如シ。

—(四三〇)—

四、結束

- 1、網(繩)ニ依ル結束ニハ箱結、角結、結掛及「の」字掛等アリ。
 - 2、結束ヲ行フニ當リ注意スベキ諸件左ノ如シ。
 - (イ) 各種材料ノ組合セテ適切ニシ其要部ヲ堅固ニ結束スルヲ要ス、之ガ爲其種類形態重量等ニ應ジ材料ノ組合セ及結束法ヲ決定スルヲ要ス。
 - (ロ) 網(繩)ヲ以テ結束スルニハ通常二周以上之ヲ纏フモノトス。
 - (ハ) 横繩及縱繩ヲ掛クルニハ各々二周ノ爲横繩ハ横圍ノ約二倍半縱繩ハ縱圍ノ約三倍ノ長サヲ要スルモノトス。
 - (ニ) 結束シタル網(繩)ノ各部ハ平等ニ緊張シ且互ニ捻重スルコトナク各部同等ノ効力ヲ有セシムルコトニ注意スベシ、之ガ爲角形ノ物品ナルトキハ稜角毎ニ又角形ナラザルトキハ一回毎ニ力ヲ加ヘテ緊縮スルヲ要ス。
 - (ホ) 網(繩)ハ物品ニ直交スル如ク導キテ緊張セシメ且各網ハ密接シテ纏フヲ要ス。
 - (ヘ) 物品ノ横圍數箇所ニ逐次網(繩)ヲ掛クルトキハ先ヅ中央部ヨリ始メテ兩端ニ及ボシ又其結目ハ之ヲ同方側ニ在ラシメ且之ヲ同高ナラシムルモノトス。
- 網(繩)ヲ縱横ニ交又シテ結束スル爲縱繩ヲ掛クルニハ物品ニ所要ノ横繩ヲ掛ケタル

3、箱結第百十七圖ノ如シ。後ニス。

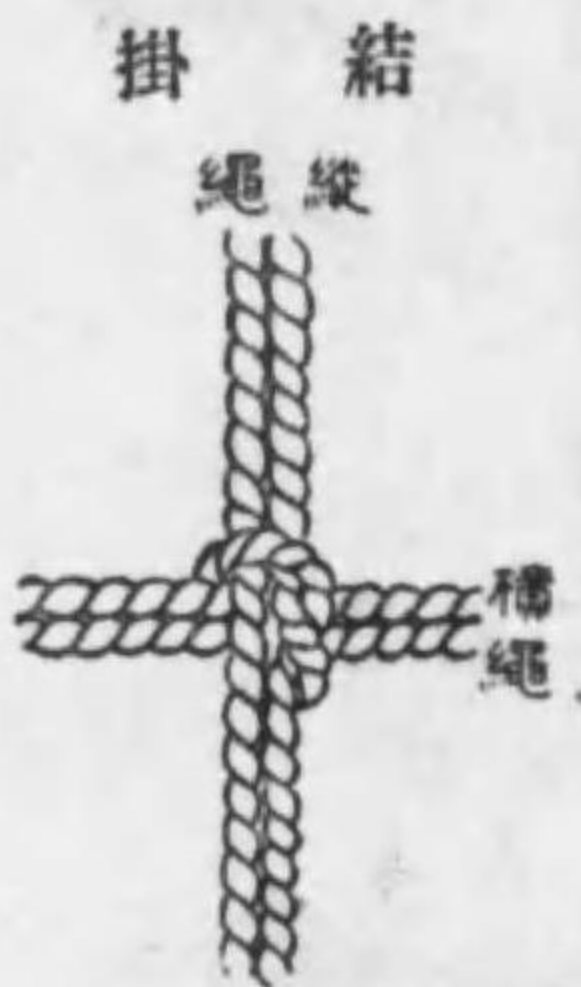


圖八十百第



- 4、角結第百十八圖ノ如シ。
- 5、結掛第百十九圖ノ如シ。
- 6、「の」字掛第百二十圖ノ如シ。
- 7、箱ヲ結束スルニハ通常横網ヲ三箇所ニ縱網ヲ二箇所

圖九十百第



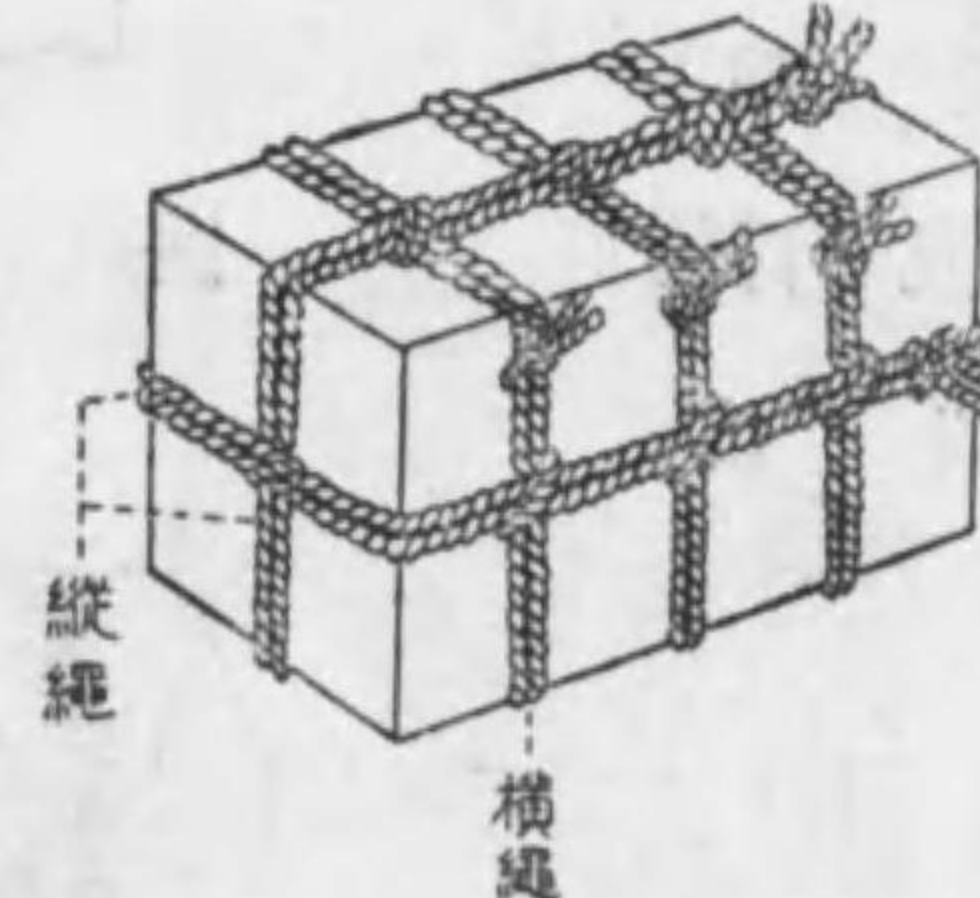
圖十二百第



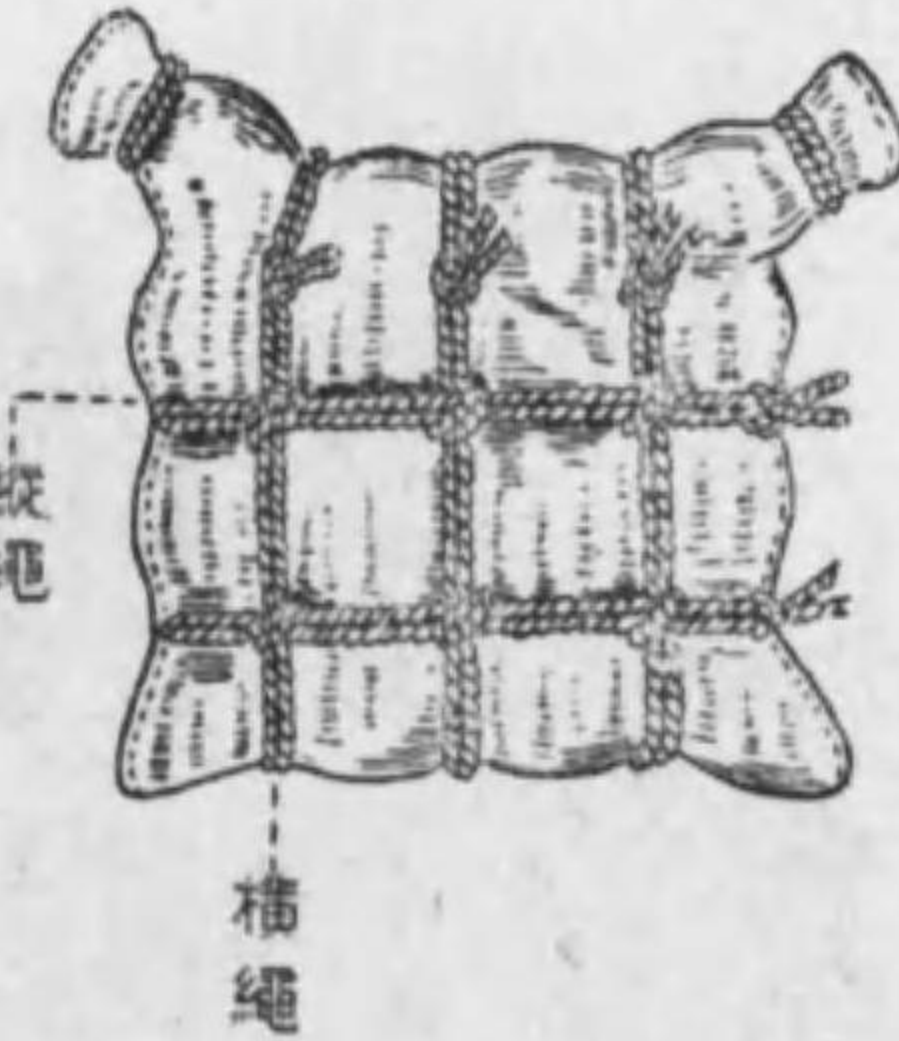
8、掛ク、其ノ要領第百二十一圖ノ如シ。
ハ先ヅ收入品ノ安

定ヲ求メ、口チ一
ツ捲キ込ミ耳繩ヲ
纏ヒ、其餘端ヲ互
ニ結ビ口ヲ捲キ込
ミタル中ニ收メ概
ネ箱ノ結束ニ準シ
形態ヲ整ヘツ、繩

圖一十二百第



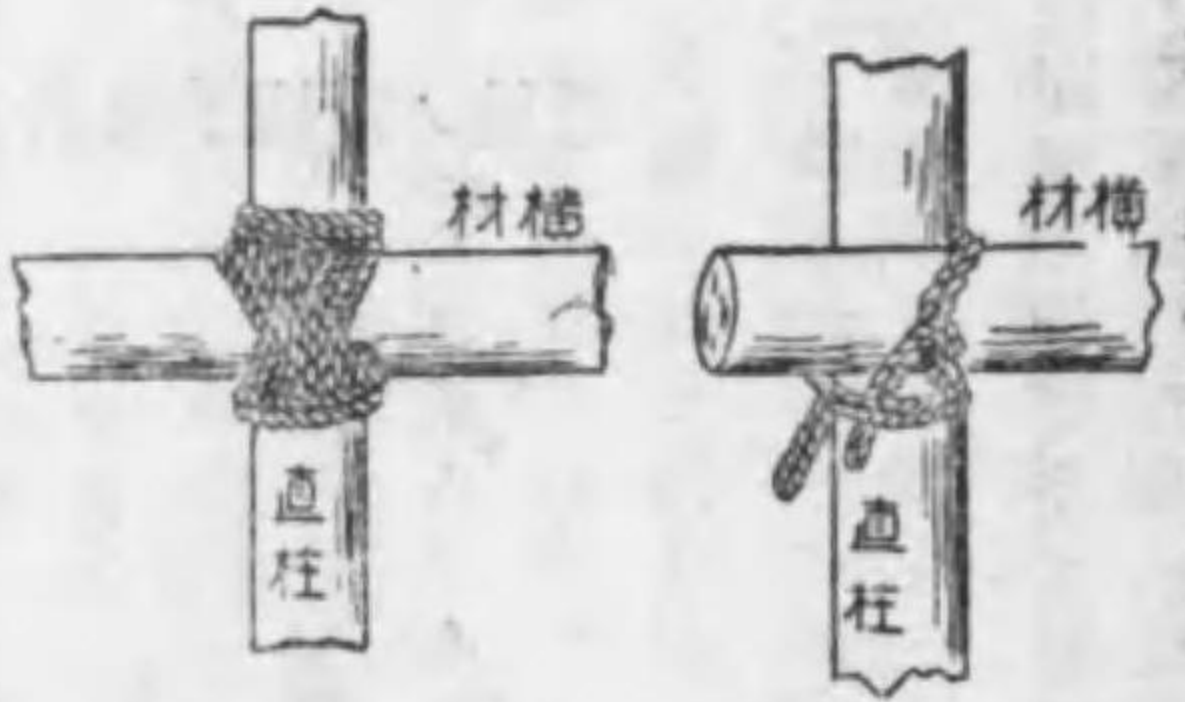
圖二十二百第
束結ノ呬



9、直柱ト横材トヲ結束スルニハ、綱ノ一端ヲ以テ直柱ニ結著シ横材ヲ結目ニ接シテ其
上若ハ下ニ置キ綱身ヲ以テ先ヅ斜メニ右上ヨリ左下(左上ヨリ右下)ニ數回纏ヒ次ニ左
上ヨリ右下(右上ヨリ左下)ニ更ニ數回纏ヒ終ニ割綱ヲ施シ、其末端ヲ模合結ノ要領ニ
テ止ム、其要領第百二十三圖ノ如シ。

10、直柱ト斜材若ハ二箇ノ斜材ヲ結束スルニハ直柱若ハ一斜材ニ綱ノ一端ヲ結著シ斜材
ヲ接著シ綱身ヲ以テ兩材チ一
方向ニ數回纏ヒ、次テ割綱ヲ
施シ其末端ヲ前條ニ準シ緊締
ス。

圖三十二百第



圖四十二百第



次テ二材ノ交叉角ノ大小ニ應ジ第百二十三圖若ハ第百二十四圖ノ要領ニ準シテ結束ス。

第四節 手榴彈投擲法

其 一 要 則

一、手榴彈ハ近接戰ニ於テ其爆裂ニ依リ敵ヲ殺傷震駭スル爲使用スルモノトス、故ニ兵
手榴彈投擲法

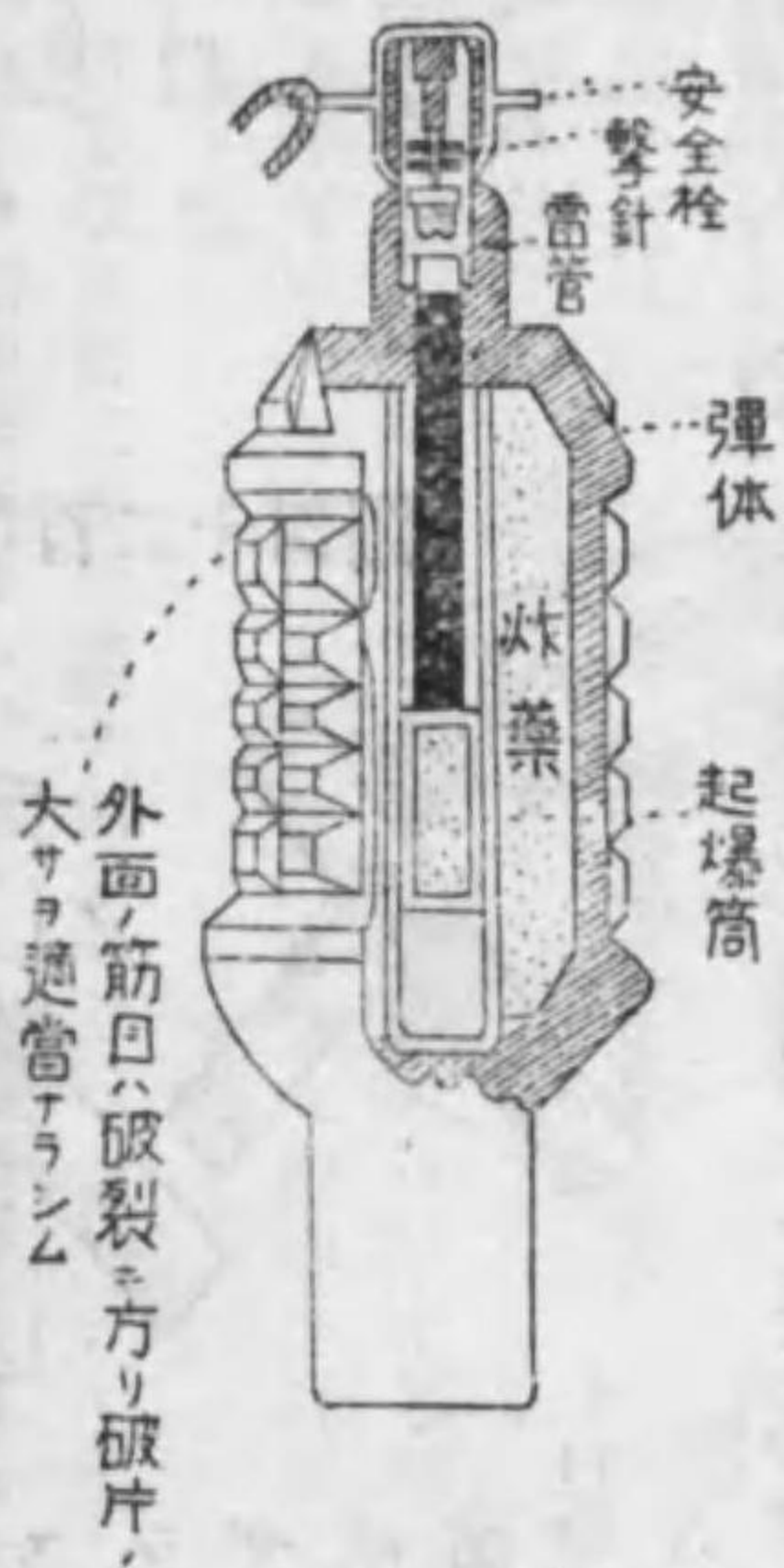
手榴彈投擲法

—(四三六)—

テシテ如何ナル場合ニ於テモ沈著シテ能ク機ニ投ジ正確ニ投擲シ得ルニ至ラシメザル
ベカラズ。

二、手榴彈ハ其點火法ニヨリ著發手榴彈及曳火手榴彈ノ二種ニ區別ス。
三、手榴彈ノ構造第百二十五圖ノ如シ。

第百二十五圖
著發手榴彈ノ構造



註 底部ニ木底ヲ嵌裝シテ藁又ハ棕櫚製ノ彈尾ヲ縛著ス

要領即應用投擲法ニ習熟セシムルヲ要ス。

五、投擲精度ノ標準次ノ如シ。

曳火手榴彈ハ著發手榴
彈ト略々同様トス。
四、本練習ハ通常立姿投
擲及伏姿投ノ順序
ニ基本投擲法ヲ修得シ
次テ各種ノ目標ニ對シ
行進間壕内不齊地夜間
等ニ於テ實施シ遂ニ各
種ノ狀況ニ應ズル投擲

一、最大投擲距離ハ立姿投ニ於テ約三十米ヲ標準トス。
二、常ニ目標ヲ中心トスル半徑五米以内ニ落達セシムル如ク投擲スルコト。

六、投擲演習上一般ノ心得。
一、基本投擲ニ於テハ距離方向速度命中及時機等ニ顧慮スルコト肝要ナリ。
二、投擲時機ヲ誤ル時ハ音ニ効果ヲ收メ得ザルノミナラズ却ツテ自ラ危險ヲ蒙ルコト
アルニ注意スベシ。
三、突撃ト連繫スルモノニ在リテハ其爆裂ノ瞬時ヲ利用シテ突入スベシ。
四、一般ニ投擲演習ノ際ハ常ニ危險ニ留意スルコト必要ニシテ、殊ニ練習ノ初期又ハ
夜間ニ於ケル投擲ニハ特ニ然リトス。

其二 基本投擲

一、立姿投(第百二十六圖)

投方ノ用意ヲ爲サシメ次テ目標ヲ示ス。

【號令】立姿投ゲ(豫令)投ゲ(動令)

【要領】(1)右手ニテ信管頭ヲ下ニシ且信管噴氣孔ヲ左
方ニ向ケ拇指ニテ錫板ノ左側面ヨリ他ノ四指ヲ以

第百二十六圖
立姿投



手榴彈投擲法

—(四三七)—

手榴彈投擲法

—(四三八)—

テ右側面ヨリ確實ニ彈體ヲ握リ左手ヲ以テ安全栓ノ索ヲ撮ミテ之ヲ抽キ出シ銃ヲ左手ニ持チ
(2) 信管頭ヲ平ニ堅硬物體ニ打チ著ケ其發火ヲ確認シタル後、上體ヲ少シク後方ニ倒シテ體重ヲ右足ニ移シ左踵ヲ擧ゲ又ハ左足ヲ地面ヨリ離シ、右臂ヲ後方ニ引キ次テ體ヲ左方ニ捻轉シツツ舊位ニ復スル際一旦右臂ヲ屈ゲ、其彈撥力ヲ利用シテ前方ニ振り出シ體重ヲ左足ニ移シ要スレバ右足ヲ地面ヨリ離シ右臂ヲ十分ニ伸バシテ彈體ヲ放ツ。

第百二十七圖
膝姿投擲



第百二十八圖
伏姿投擲



二、膝姿投

【要領】 前項ノ如ク準備シ第百二十七圖ノ要領ニ從ヒ投擲ス。
三、伏姿投
【要領】 前項ニ準シテ第百二十八圖ノ要領ニ從ヒ投擲ス

其三 應用投擲

- 一、投擲ハ狀況特ニ目標ノ位置地形、地物ノ狀態及投擲距離ノ大小等ニ應ジ適當ナル姿勢、動作ノ方法ヲ選擇スルヲ要ス。
- 二、信管發火ノタメ堅硬物身邊ニ無キ時ハ他ノ彈體、靴ノ踵、其他床尾飯等ヲ利用シテ行フヲ可トス。
行進間ニ在リテハ發火動作不確實ニ陥リ易キヲ以テ沈著確實ニ動作シ、必ズ發火ヲ確認シタル後之ヲ投グルヲ要ス。
- 三、遮蔽物ノ後方ニ位置スル目標ニ對スル投擲及狹隘ナル壕内等ヨリスル投擲ハ斜方向ヨリ之ヲ行フヲ有利トスルコトアリ。
- 四、數人同時ニ行フ場合ハ互ニ協同連繫シ概ネ一齊ニ行フヲ可トス、此際彼是互ニ投擲動作ヲ妨害セザル如ク適宜ノ間隔ヲ保持スルコト必要ナリ。
- 五、敵ニ咫尺シテ投擲スル時ハ自己モ亦危害ヲ蒙ル處アルヲ以テ適當ナル利用ニ依リ之ヲ避クル如ク努ムベシ。

第五節 演習規程ノ拔萃

其一 禁制及注意

演習規程

—(四三九)—

演習規程

—(四四〇)—

- 一、服裝ヲ變ジテ敵線内ニ潜入シ或ハ演習ニ關係ナキモノニ就キ敵情ヲ探知スルコトヲ禁ズ。
 - 二、空包發火ヲ爲スニ方リテハ左ノ諸件ヲ嚴守スベシ。
 - 1、敵ヲ距ルコト小銃ハ五十米、輕機關銃ハ百米、火砲ハ二百米以内ニ於テ發火スベカラズ。
 - 2、航空機ヲ距ルコト、小銃ハ百米、輕機關銃ハ二百米火砲ハ三百米以内ニ於テ發火スベカラズ。
 - 3、前二項以内ノ距離ニ於テ射擊スルトキハ單ニ其動作ヲ爲スニ止メ、空包ヲ用フ可カラズ、但シ小銃、輕機關銃、機關銃ニ在リテハ警報ノ爲又ハ夜間等ニシテ已ムヲ得ズ規定以内ニ於テ發火セントスルトキハ十分銃口ヲ天空ニ向ケ發射スルモノトス、之ガ爲輕機關銃、機關銃ニ在リテハ要スレバ三十度以上ノ射角ヲ探り得ル如ク所要ノ設備ヲ爲スモノトス。
 - 三、突撃又ハ襲撃ニ方リテハ兩軍二十米以内ニ接近スルヲ禁ズ、但特種ノ演習ニ限り統裁者ノ規定ニ依リ此距離以内ニ接近セシムルコトアリ。
- 戰闘ヲ中止セル部隊ニ對シ突撃又ハ襲撃ヲ行フベカラズ。

- 四、夜間對抗演習ヲ行フニ方リテハ特ニ規定セル場合ノ外著劍ヲ禁ズ。
- 五、社寺及墓地ノ境域ハ之ヲ尊重シ又苗圃砂防工事植林セル椎樹及果樹園等ハ特ニ之ガ保護ニ注意スベシ。
- 六、鐵道線路ハ踏切以外ニ於テ之ヲ橫斷シ又ハ線路上ヲ通行スルヲ禁ズ。
- 七、鐵道沿線殊ニ停車場附近ニ於テ假設旗、手旗及小笛等ヲ使用スル場合ニ在リテハ之ガ爲鐵道業務ヲ妨害セザルコトニ注意スベシ。
- 八、敵兵ヲ捕獲シ器材等ノ奪取ヲ禁ズ。
- 九、演習中止ノ信號又ハ號音アリタルトキハ斥候及散兵ニ至ル迄現在ノ姿勢ト隊形トヲ變ズルコトナク嚴ニ其位置ニ停止スベシ。

其二 標 識

- 一、統裁部ニ屬スルモノハ幅約十糎ノ白布ヲ左腕ニ纏フ、但シ雨覆ヲ著シタルトキハ幅約十糎長サ約二十糎ノ同色布ヲ其外面左腕相當部ニ附スルモノトス。
- 二、中立者ハ黃色、陪觀者ハ赤色ノ幅約十糎ノ布片ヲ左腕ニ纏フ、但シ雨覆ヲ著シタルトキハ幅約十糎長サ約二十糎ノ同色布ヲ其外面相當部ニ附スルモノトス。
- 三、演習ニ際シ一方軍ハ白帶ヲ以テ帽ノ鉢卷ヲ覆フモノトス。

演習規程

—(四四一)—

四、假設部隊ヲ標示スル爲ニハ標旗ヲ用フ、此ノ標的ハ約六十糎平方ノ布片ヲ長サ約二米ノ桿ニ附着スルモノニシテ布片ハ左ノ色別ヲ以テ兵種ヲ標示スルモノトス。

歩兵一小隊

赤

騎兵一小隊

白

機關銃一銃

赤

步兵砲一門曲射砲

赤
黄

步兵砲一門平射砲

黄
赤

砲兵一小隊

黄濃

五、破壊若ハ阻絶ヲ假設シタルトキハ附近見易キ箇所ニ紙片又ハ布片ニ「破壊」又ハ「阻絶」ト記載シタルモノヲ標示スルモノトス。

學校教練必携前篇終

附錄

陸軍軍隊符號

第一通 則

- 一、符號ハ著色スルヲ常トシ彼我兩軍ヲ標示スルニハ通常敵軍ニ赤色ヲ、我軍ニ藍色ヲ用フルモノトス。
- 二、編制上ノ番號ヲ示スニハ聯隊内ノ大隊號ニ限り羅馬數字ヲ用ヒ其他ハ總テ亞刺比亞數字ヲ用フ。例ヘバ $2i. 18P.$ ノ如シ
- 三、部隊數又ハ銃、砲、機數ヲ表示スルニハ數字（要スレバ略字註記ヲ併記ス）ニ括弧ヲ附シ之ヲ示スモノトス例ヘバ
 i(五大) K(四中) A(三大) P(一小) \uparrow \downarrow \updownarrow \updownarrow
- 四、上級部隊ノ番號ヲ併記スルヲ要スルトキハ斜線ヲ以テ相隔テ下級部隊ヲ上ニ上級部隊ヲ下ニ記スルモノトス例ヘバ歩兵第二聯隊ノ第三大隊ハ $III/2i$ ノ如シ
- 五、小隊、分隊ヲ示スニハ通常中隊ヲ單位トスル分數ヲ以テス例ヘバ騎兵第五聯隊第二

中隊ノ一分隊ハ、^{5K}ノ如シ
六、部隊ノ一部ヲ缺キタル部隊ヲ示スニハ頁號ヲ附シ括弧内ニ之ヲ示ス例ヘバ歩兵第二聯隊(第八、第十二中隊欠)ハ、^{2i(-8.12)}ノ如シ

第二 隊標、略字、名稱 (註、隊標(▲) (略字(D)) 名稱(師團)ノ如シ)

一、各兵共通

- 師團
- 旅團
- 聯隊
- 各兵中隊長
- 各兵將校
- 同下士
- 同兵

部隊ノ集團

- 機關銃(中)隊
- 機關銃
- 輕機關銃
- 輕迫擊砲
- 重迫擊砲
- 擲彈筒

T.K 戰車

二、步兵

- ☆ 步兵
- ☆ 步兵旅團司令部
- 步兵聯隊本部
- 步兵大隊本部
- 步兵部隊
- 步兵大隊ノ密集隊形
- 步兵中隊ノ密集隊形
- 疎開セル步兵中隊
- 分散セル小隊ノ一例



火線ヲ構成セル小隊ノ一例
↑ 輕機關銃ヲ示ス

iA 步兵砲隊

↑ 平射步兵砲

↑ 曲射步兵砲

iTL 步兵通信班

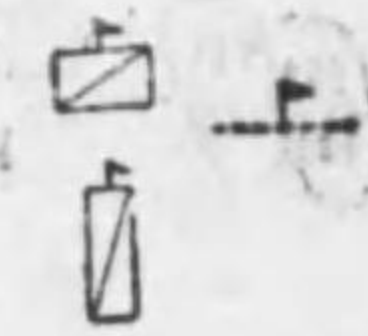
↑ 火線又ハ第一線

↑ 後方部隊

↑ 占領地域

K 三、騎兵

↑ 騎兵聯(大)隊本部


 乘馬散開隊形
 騎兵部隊
四、野戰砲兵
 野砲兵
 騎砲兵
 山砲兵
 野戰重砲兵
 段列
 野砲兵聯隊本部
 野砲兵大隊本部
 野砲兵ノ部隊
 野砲兵放列

四
 大隊 觀測所
 中隊 要スレバ放列トノ間ニ點線ヲ以テ連絡スヲ空自トス
五、工兵
 工兵部隊 (其他歩兵ノ部ヲ準用ス)
六、通信、照明
 電信通信所
 電話通信所
 特ニ區別ヲ要スルトキハ電鈴式ニ限リ▲ヲ用フ
 移動式無線電信所 對空通信ニ任ズルモノハ▲ヲ附加ス例ハ▲ノ如シ

七、航空及防空
 飛行隊
 飛行機
 (二座偵察機)
 短線ハ座席數ヲ示シ偵察、戰鬥、輕爆擊、重爆等ノ種類ヲ示スニハ中、中、中ヲ以テス
 飛行機ノ種類ニ應ジ適宜描畫ス
 飛行場
 野戰高射砲隊
 空中聽音機
 照空燈

八、行李、輜重
 小行李
 大行李
 同集合及行軍隊形
 FL 野戰病院 開設セルモノ
 S 衛生隊 ハハヲ冠ス 隊繩帶所
九、警戒及宿營
 小哨若ハ前哨中(本)隊
 下士哨
 單哨又ハ複哨

— (五) —

高橋 下士ノ斥候



展望略

一〇、作業



散兵壕、交通壕

射撃設備ヲ
ナシタル部
分ハ太クス



輕機關銃座



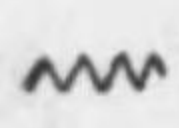
重機關銃座



平射歩兵砲座



曲射歩兵砲座



低鐵條網(高低ヲ區別セザ
ルトキニモ用フ)

高鐵條網

昭和八年九月二十五日 印刷
昭和八年十月五日 發行

學校教練必携 前編 (術科之部)
定價 金 六 拾 錢

編纂者 陸軍省 徵募課

東京市牛込區原町三丁目八番地

帝國在郷軍人會本部

發行者 右代表者 小原正忠

東京市牛込區原町三丁目八番地

印刷者 横山才四郎

東京市牛込區原町三丁目八番地

印刷所 帝國在郷軍人會本部印刷所

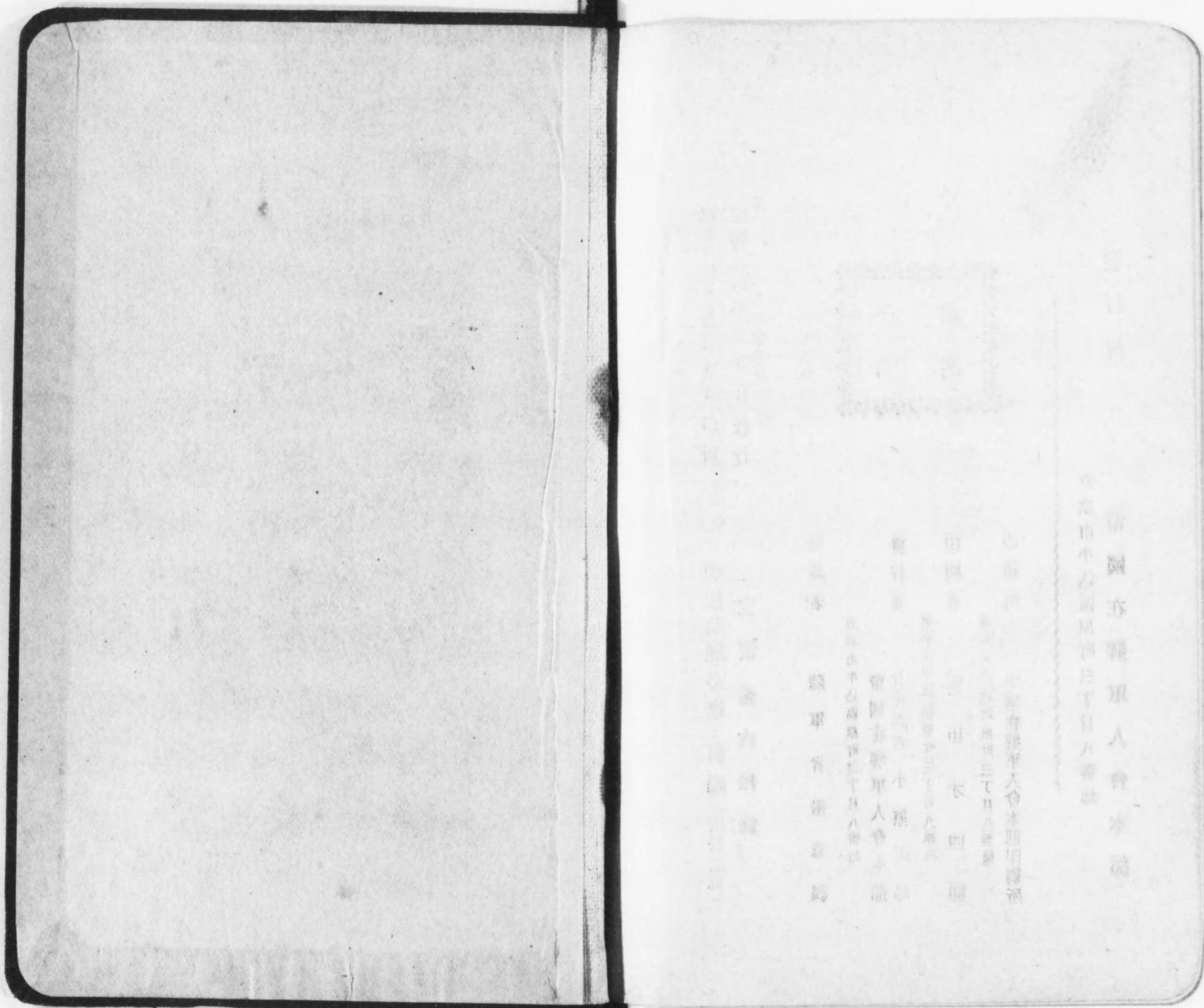


不許
複製

發行所

東京市牛込區原町三丁目八番地

帝國在郷軍人會本部



帝國亦稱軍人會...

帝國亦稱軍人會... 帝國亦稱軍人會... 帝國亦稱軍人會...

帝國亦稱軍人會... 帝國亦稱軍人會...

終